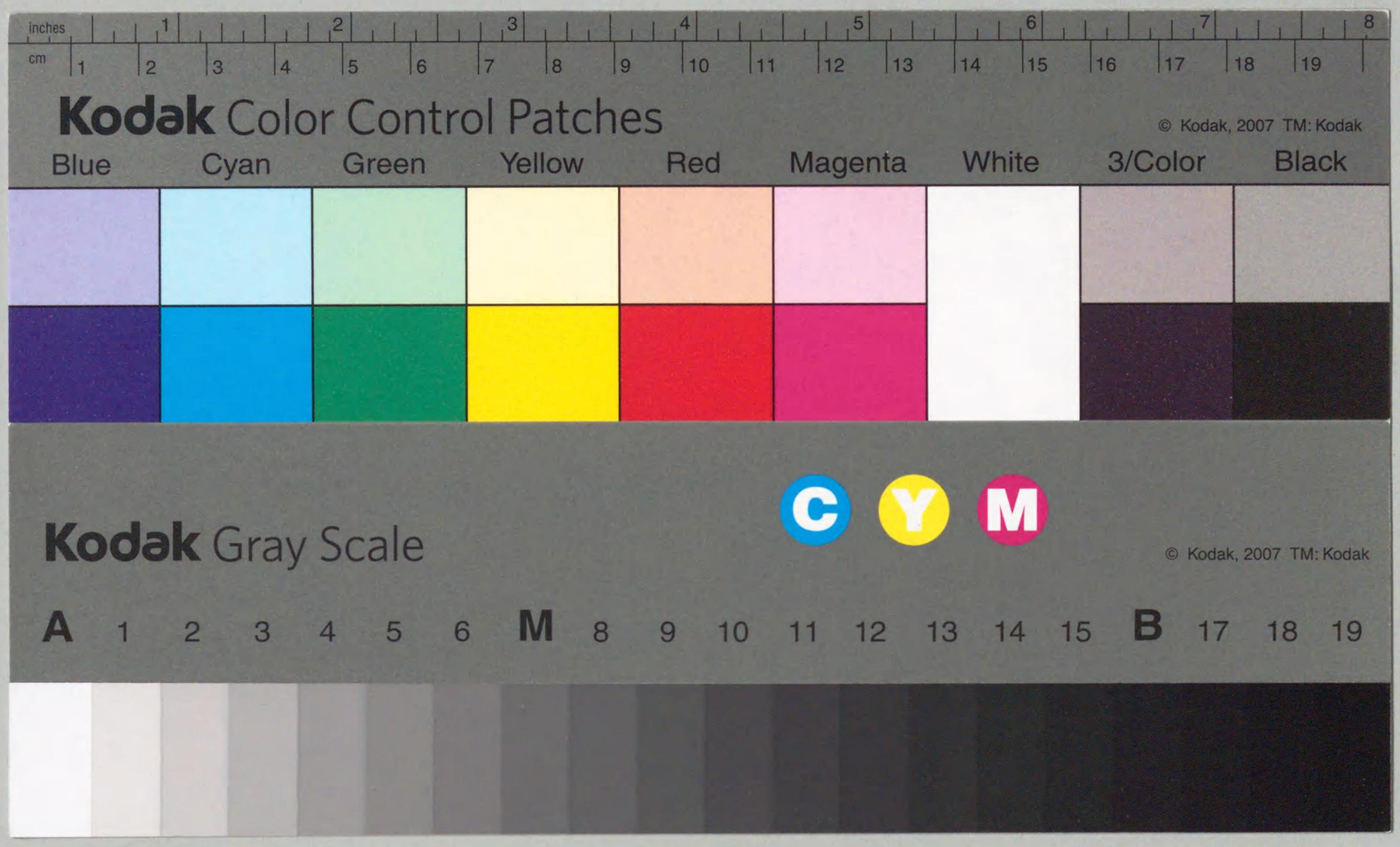

AZ
366
166
82109169
0 複写

35K94
昭10
A
137
昭和9年4月10日
國稅課長
殿寄贈

臨時財政經濟
調査會答申

稅制整理案

立憲民政黨
政務調査館
圖書之印

臨時財政經濟調査會諮問第五號

稅制整理特別委員會ノ經過並決議ノ要領

AZ
366
166

昭10
A
137

國立國會
57.2.22
書籍部

82W09169

HJ
766
.A2

第10
A
137

臨時整理委員會ノ諮問ニ對スル答申ノ要旨

調査相対照審査會諮問案（正誤）

32409163

目次

第一　諮問案（附）特別委員ノ氏名
第二　調査順序
第三　會議ノ經過
第四　整理案ノ大綱竝各稅歲入ノ增減
第五　附帶決議

第一　諮問案

稅制整理ニ關スル諮問案左ノ如シ

諮問第五號

稅制整理ニ關スル根本方策如何

說　明

本邦ノ國稅ハ從來隨時必要ニ應シ之ヲ新設シ又ハ其ノ一部ヲ改正シテ今日ニ至リタルモノニシテ租稅制度トシテ組織完全ヲ缺キ相互ノ脈絡十分ナラス從テ課稅ノ權衡ヲ得サルモノナキニ非ス之ヲ沿革的ニ觀レハ直接稅ニ在リテハ先ツ地租設定セラレ次テ所得稅起リ次テ營業稅其ノ他二三ノ直接稅制定セラレタリ而シテ今之ヲ理論的ニ觀察スレハ所得稅ハ直接稅ノ中心ニシテ地租、營業稅ハ其ノ兩翼トナリ所得稅ヲ補充スルモノト謂フヲ得ヘシ然レトモ地租、營業等ハ各其ノ特質ヲ有シ其ノ組織及課稅方法ヲ異ニスルヲ以テ此等相互ノ關係ヲ考究シ負擔ノ公平ヲ保チ賦課徵收ノ簡易ニシテ且正確ナルヲ期スルカ爲ニハ今後如何ナル方針ノ下ニ之ヲ整理スヘキカ蓋シ直接稅ニ關シテハ所得稅ヲ以テ其ノ中心トスヘキコト前述ノ如シト雖其ノ他ノ直稅トノ脈絡又ハ配合ニ付テハ(一)所得稅ノ外向地租及營業稅ハ之ヲ存置シ之ニ相當ノ改善ヲ加ヘテ負擔ノ權衡ヲ圖ルコト(二)地租及營業稅ハ之ヲ全廢シテ一般財產稅ヲ設ケ所得稅ト

相竝テ課稅ノ權衡ヲ相互ニ補完セシムルコト(三)地租及營業稅ハ之ヲ全廢シ土地、家屋、證券、營業等各種ノ所得ニ對シ其ノ種類每ニ特別所得稅ヲ課シ尙此外ニ此等ノ所得ヲ綜合シタル一般所得稅ヲ設クルコト等ハ研究ヲ要スル重要問題ナリト認ム次ニ間接稅ニ付テモ亦然リ酒稅ハ其ノ起源最モ古ク酒稅ニ次キテ醬油稅、砂糖稅、麥酒稅、織物稅其ノ他各種ノ間接稅制定セラレ爾來財政ノ必要上時々增稅セラレタリ然シテ此等各稅ニ在リテハ其ノ課稅方法、負擔程度相互ノ關係等ニ於テ大ニ研究ヲ要スルモノアルハ言ヲ俟タサルノミナラス元來間接稅ハ必スシモ其ノ負擔者ノ資力ニ相應セス資產者タルト無資產者タルトヲ問ハス均等ニ負擔スルノ傾向ヲ有スルヲ以テ間接稅ハ特殊ノモノヲ除クノ外ハ成ルヘク之ヲ輕減シ或ハ之ヲ改廢スルノ要アルヘシ尙直間兩稅ヲ通シテ現行稅法トノ權衡上又ハ制度ノ缺陷ヲ補フ爲新稅ヲ制定スルノ必要ナキカ是レ亦併セテ研究スルノ必要アリト認ム

國稅ト相竝テ研究ヲ要スルハ地方稅ニ關スル制度ナリトス蓋シ租稅負擔ノ點ヨリ觀察スレハ其ノ國稅タルト地方稅タルトヲ問ハス其ノ總額ニ就テ研究セサレハ事實上衡平ヲ保持スルコト能ハサルヘシ而シテ地方稅ハ各地共其ノ財政ノ膨脹ニ伴ヒ近年著シク增加シ來リタルノミナラス各地各樣ノ特別稅ヲ起スカ故ニ其ノ稅種モ亦頗ル複雜多端ヲ極メ實ニ百餘種ノ多數ニ上ルニ至レリ故ニ之ヲ齊整シテ成ルヘク其ノ稅種ヲ減少シ同時ニ國稅ト相俟テ負擔ノ權衡ヲ圖ルハ實ニ重要事項ナリト認ム

然レトモ亦飜テ之ヲ考フルニ社會ノ進步國家ノ發展ト共ニ經費ハ益々增加スヘキヲ以テ此ノ際租稅全體ヲ通シテ其ノ收入ノ減少ヲ企圖シ得ヘカラス否將來國家ノ進步ト共ニ漸次增加スルコトヲ期セサルヘカラス故ニ少クトモ現今ニ於テハ國稅タルト地方稅タルトヲ問ハス現在收入ヲ減セサル限度ニ於テ稅制ヲ根本的ニ整理シ其ノ組織脈絡ヲ完備ナラシムルト同時ニ國民負擔ノ權衡ヲ圖リ以テ財政經濟ノ基礎ヲ鞏固ニスルコト實ニ緊喫ノ要務ナリト認ム是レ本案ヲ提出シテ之ニ對スル意見ヲ求ルム所以ナリ

追テ關稅ハ外國貿易竝國際問題等ニ密接ノ關係ヲ有シ特殊ノ性質ヲ有スルヲ以テ別箇ニ諮問スルコトトスヘシ爲念附言ス

（附）

特別委員ノ氏名左ノ如シ

委員　伯爵　林　博太郎
委員　男爵　鄕　誠之助
委員　高橋光威
委員　濱口雄幸
委員　田中隆三
委員　藤山雷太

大正九年六月一日以降大正十年四月二十八日迄及大正十一年四月二十日以降最終迄委員長ニ就任
大正十年四月二十八日以降大正十一年四月二十日迄委員長ニ就任

委員　子爵　前田利定
委員　神野勝之助
委員　水町袈裟六
委員　末延道成
委員　神戸正雄
委員　關田嘉一郎
委員　黄金井爲造
委員　濱口吉兵衛
委員　小橋一太
委員　井上辰九郎
委員　星野錫
委員　桑田熊藏
委員　横井時敬
委員　氣賀勘重
委員　馬場鍈一
委員　米山梅吉
委員　山本悌二郎
委員　和田豐治
委員　三土忠造
委員　添田敬一郎
委員　伯爵　奥平昌恭
委員　波多野承五郎
委員　犬塚勝太郎

備考　右委員中犬塚勝太郎ハ大正九年七月一日辭任

第二　調査順序

大正九年六月一日ノ總會ニ於テ本會ニ對スル諮問案第五號稅制整理ニ關スル根本方策如如何ニ付テノ審議ヲ特別委員會ニ付託セラレタルニ依リ特別委員會ハ直ニ審議ニ著手シ先ツ左ノ如キ調査順序ヲ定メタリ

第一　直接國稅ノ體系

一　先以テ現行直接國稅ヲ調査スルコト

二　前項調査ノ結果ニ依リ直接國稅ノ體系ヲ如何ニスヘキヤヲ調査スルコト

本項ノ調査ニ際シテハ左ノ各號ヲ參照スルコト

甲　地租及營業稅ハ之ヲ地方財源ニ委讓シ之ニ代フルニ不動產、動產ヲ網羅シタル一般財產稅ヲ起シ所得稅ト竝ヒ之ヲ行フノ可否若シ可ナリトセハ右各稅ノ組織如何

乙　地租及營業稅ハ之ヲ地方財源ニ委讓シ之ニ代フルニ現行一般所得稅ノ外別ニ各種ノ所得ニ對スル特別所得稅ヲ設クルノ可否若シ可ナリトセハ其ノ組織如何

丙　地租及營業稅ハ之ヲ存續シ之ニ對シ十分ナル修正ヲ加ヘ所得稅ト竝ヒ行フノ可否若シ可ナリトスル場合ニ於テハ地租、營業稅ノ外資本利子稅、家屋稅等ヲ起スノ要ナキヤ若シアリトセハ其ノ稅目及組織如何

三　前項以外尙他ニ現行直接國稅ノ改廢又ハ新設ヲ可トスルヤ果シテ然ラハ其ノ稅目竝ニ組織如何（相續稅、通行稅、鑛業稅、登錄稅其他）

第二　間接國稅ノ整理方法

一　先以テ現行間接國稅ヲ調査スルコト

二　前項調査ノ結果ニ依リ現行間接國稅ノ整理方法ヲ調査スルコト

本項ニ付テハ其ノ調査ニ際シ左ノ各號ヲ參照スルコト

甲　消費稅ノ課稅物件ノ選擇ニ付テハ成ルヘク生活必需品ノ課稅ヲ避ケ又ハ輕減シ主トシテ奢侈品ニ課稅スルノ主義ニ依リ現行消費稅中廢減ヘキモノノ有無ヲ調査スルコト

乙　消費稅ノ課稅方法ニ付テハ左ノ各號ニ付キ考慮スルコト

(イ)　製造課稅ト取引課稅ト何レヲ可トスヘキヤ

(ロ)　從量稅ト從價稅ノ何レヲ可トスヘキヤ

(ハ)　課稅物件ノ種類品質ニ應シ稅率ニ等差ヲ設クルノ可否

(ニ)　現行消費稅ノ課稅物件中專賣ヲ可トスルモノナキヤ

丙　前各號ノ外稅率納期及取締方法等改正ノ要否ニ付調査スルコト

三　課稅ノ權衡ヲ得セシムル目的ヲ以テ現行消費稅以外ニ新ニ消費稅ヲ起スノ要ナキヤ若シアリトセハ其ノ稅目及組織如何

四　消費稅以外ノ現行間接稅中改正ヲ要スルモノナキヤ若シアリトセハ如何ニ之ヲ改正スヘキヤ（印紙稅取引所稅等）

第三　地方稅整理方法

一　先以テ現行地方稅ヲ調査スルコト

二　前項調査ノ結果ニ依リ現行地方稅整理ニ關スル大體方針ヲ調査スルコト

本項ニ付テハ其ノ調査ニ際シ左ノ各號ヲ參照スルコト

甲　地方稅ハ主義トシテ國稅ニ對スル附加稅ト特別稅ト何レヲ可トスヘキヤ若シ之ヲ併存スヘシトセハ大體ニ於テ兩者間ノ權衡ヲ如何ニ定ムヘキヤ

乙　附加稅ヲ課スル場合ニ於テハ左ノ各號ニ付考慮スルコト

(イ)　附加稅ニ對スル制限ノ程度及方法如何

(ロ)　現行附加稅ノ外新ニ附加稅ノ徵收ヲ許スヲ可トスルモノナキヤ

丙　特別稅ニ付テハ左ノ各號ヲ考慮スルコト

(イ)　特別稅トシテハ如何ナル租稅ヲ可トスルヤ從テ現行特別稅（戶數割、家屋稅、營業稅、雜種稅）中改廢ヲ要スルモノナキヤ

(ロ)　特別稅トシテ新設ヲ可トスルモノナキヤ若シアリトセハ其ノ稅目竝ニ組織如何

第三　會議ノ經過

右ノ調査順序ニ從ヒ大正九年六月一日以降本月十五日ニ至ル滿二年間ニ於テ各稅ノ審議ニ付キ特別委員會ヲ開クコト三十回、又特別委員會ノ付託ニ依ル小委員會ヲ開クコト三十六回、合計六十六回ノ議會ヲ重ネタリ今會議ノ經過ヲ畧記スレハ左ノ如シ

一　第一次特別委員會及第一次小委員會

（自大正九年六月一日　至同十一月十二日）

特別委員會十回、小委員會一回開會

調査順序ヲ決定シ尙現行直接國稅ノ制度竝其ノ利害得失ヲ研究シタル後直接國稅ノ體系ヲ如何ニスヘキカニ付之カ調査ヲ特ニ選定シタル小委員ニ付託ス

二　第二次小委員會

（自大正九年十一月十九日　至同十二月二十四日）

小委員會六回開會

直接國稅ノ體系ヲ如何ニスヘキヤノ問題ニ付左ノ三案ヲ作成シ之ヲ特別委員會ニ報告ス

第一案　一般財產稅ヲ創設シ地租及營業稅ヲ地方稅ニ委讓スルノ案

第二案　特別所得稅ヲ創設シ地租及營業稅ヲ地方稅ニ委讓スルノ案

第三案　現行地租及營業稅ニ相當修正ヲ加ヘ尙建物稅及資本利子稅ヲ創設スルノ案

三　第二次特別委員會

（自大正十年一月十三日　至同四月二十八日）

特別委員會五回開會

右三案ニ付審議シタル後其ノ何レヲ採ルヘキヤヲ別ニ指名セラレタル小委員ニ付託ス

四　第三次小委員會

（自大正十年四月二十八日　至同六月八日）

小委員會七回開會

右三案ノ內何レヲ採用スヘキカニ付審議シ第一案ヲ採ルコトニ決定シ之ヲ特別委員會ニ報告ス

五　第三次特別委員會

（大正十年六月九日）

特別委員會一回開會

小委員報告ノ案ニ基キ財產稅及地租營業稅ニ關スル審議ヲ爲シタルトコロ地方稅竝前記以外ノ直接國稅ニ付テモ相當調查シタル上ニ非サレハ之ヲ決定スルコト能ハスト爲シ之カ調查ヲ前ノ小委員ニ付託ス

六　第四次小委員會

（自大正十年六月十五日　至同七月七日）

小委員會八回開會

地方稅ノ整理及財產稅竝地租營業稅以外ノ直接國稅ノ整理ニ付研究シタル上直接國稅全部及地方稅ノ整理案ヲ作成シ之ヲ特別委員會ニ報告ス

七　第四次特別委員會

（自大正十年七月十四日　至同十月六日）

特別委員會七回開會

小委員會作成ノ整理案ニ付質問及討議ヲ爲シタルモ間接國稅全部ノ整理案ヲ作成シタル上之カ決定ヲナスコトトシ間接稅整理案ノ調查ヲ小委員ニ付託ス

八　第五次小委員會

（自大正十年十月十三日　至同十二月八日）

小委員會十回開會

現行間接國稅ノ制度竝其ノ利害得失ヲ研究シタル後間接國稅全部ニ付テノ整理案ヲ作成シ之ヲ特別委員會ニ報告ス

九　第五次特別委員會

（自大正十年十二月二十二日　至大正十一年一月十二日）

特別委員會二回開會

小委員會報告ノ間接國稅整理案ニ付審議ス

一〇　第六次特別委員會

（大正十一年四月二十日）

特別委員會一回開會

財産稅及地方稅ノ整理ニ付討議ヲ爲シタル後間接稅審議ノ參考トシテ煙草專賣制度ニ付調査方ヲ小委員ニ付託ス

一一　第六次小委員會

（大正十一年四月二十七日）

小委員會一回開會

煙草專賣制度ニ付調査ヲ爲シ之ヲ特別委員會ニ報告ス

一二　第七次特別委員會

（自大正十一年四月二十七日　至同五月十一日）

特別委員會三回開會

國稅及地方稅ノ整理ヲ一應決定ス但シ地租、營業稅及所得稅ニ付テハ尙再査ノ餘地アリトシテ其ノ調査方ヲ小委員ニ付託ス尙軍備縮少ニ因ル剩餘金及煙草專賣ノ値上ニ關シ付帶決議ヲ爲ス

一三　第七次小委員會

（自大正十一年五月二十五日　至同六月八日）

小委員會三回開會

地租、營業稅及所得稅ノ再審議ヲ爲シ之ヲ特別委員會ニ報告ス

一四　第八次特別委員會

（大正十一年六月十五日）

特別委員會一回開會

小委員會ノ報告ニ基キ地租、營業稅及所得稅ノ整理ヲ決定シ之ニテ整理案全部完成ス

第四　整理案ノ大綱竝各稅歲入ノ增減

甲　直接國稅

直接國稅ノ根本的整理ニ關スル方策ヲ攻究セントセハ先以テ我邦現行直接國稅ノ內容ヲ調査スルノ要アリ仍テ本會ニ於テハ各直接稅ノ沿革、課稅標準、稅率、徵稅手續、救濟方法、納期竝ニ現行法ノ長所短所等ニ關シ詳細ナル調査研究ヲ遂ケタリ其ノ要領別冊ノ通リ

右調査ノ上各稅整理案ヲ審議シタル結果直接國稅ニ於テハ一般所得稅ヲ中軸トシ其ノ補完稅トシテ一般財産稅ヲ創設シ此ノ兩者ヲ以テ直接國稅ノ根本體系タラシムルヲ目的トシ現行地租及營業稅ハ之ヲ

地方稅ニ委讓スルノ方針ヲ採ルコトトセリ尤モ施行當初ニ於ケル一般財產稅ハ成ルヘク其ノ稅率ヲ輕クシ之カ爲ニ其ノ歲入カ現行地租、營業稅ノ總額ニ達セサル部分ハ當分ノ間地租及營業稅ノ稅率ヲ平等ニ低減シテ此ノ兩稅ヲ存續セシメ而シテ當分存續スヘキ地租ハ現行法ノ儘トシ營業稅ニ付テハ相當修正ヲ加フルコトトセリ

其ノ他ノ直接國稅ニ付テハ通行稅及賣藥營業稅ヲ廢止シ相續稅、登錄稅、鑛業稅及所得稅ニ修正ヲ加ヘ砂鑛區稅、兌換銀行券發行稅及狩獵免許稅ハ現行ノ儘存續スルコトトセリ其ノ大要左ノ如シ

(一) 直接國稅ノ體系竝地租、營業稅ノ委讓　現行地租及營業稅ハ國稅トシテ不適當ナルヲ以テ之ヲ地方稅ニ委讓シ其ノ課稅方ヲ地方的事情ニ適應セシメ併セテ地方財源ノ基礎ヲ確實ニシ一面國稅トシテハ一般財產稅ヲ創設スルモノトス而シテ一般財產稅ハ財產價額ヲ課稅標準トスルモノナルカ故ニ一般所得稅ニ於テ所得調査ノ周到正確ヲ期シ難キカ爲ニ生スル缺點ヲ調節シ併セテ財產ヨリ生スル所得ニ重課スルノ目的ヲ達シ又土地其ノ他ノ自然增價ニ因ル擔稅力ニ課稅シ尙無收益財產ニ對シテモ課稅スルヲ以テ無收益財產ヲ漸次收益的ナラシムルノ利益アル等幾多ノ特長ヲ備ヘ一般所得稅ノ補完トシテ最モ適當ノ性質ヲ有スルモノト認ム故ニ本稅ヲ創設シ一般所得稅ト相俟テ直接國稅ノ體系ヲ構成セシムルコト

(二) 地租營業稅ノ委讓方法　一般財產稅ヲ創設シ地租及營業稅ハ直ニ之ヲ地方稅ニ委讓スルヲ理想トスルモ財產稅施行ノ初ヨリ其ノ稅率ヲ高クスルトキハ或ハ其ノ施行ノ圓滿ヲ害シ又ハ脫稅ノ弊害ヲ助長スルノ虞アリ加之施行當初ニ於テハ課稅物件調査ノ完璧ヲ期スルコト困難ナルヲ以テ歲入ノ確實ヲ保證スルコト能ハス故ニ當分其ノ稅率ヲ成ルヘク低カラシメ漸次其ノ發達ヲ圖ルノ方針ヲ採リ其ノ間ノ歲入不足ニ對シテハ一時的ニ現行地租及營業稅ノ稅率ヲ平等ニ低減シテ之ヲ存續セシメ財產稅ノ基礎確實トナリタル場合ニ於テ此ノ兩稅ヲ地方稅ニ委讓スルコト

(三) 當分存續スヘキ地租、營業稅ノ整理　現行地租ハ法定地價ヲ課稅標準トスルカ爲其ノ實際價格ノ變遷ニ伴ハス負擔ノ公平ヲ得サルモノ少カラスト雖之ヲ根本ニ改正セムトスレハ莫大ノ經費ト手數トヲ要シ實行甚タ困難ナルヲ以テ當分ノ內從來ノ儘之ヲ据置キ追テ地方稅ニ委讓スル場合ニ於テ改善ヲ加フルコトトシ營業稅ハ之ヲ改善セムカ爲ニ地租ノ如ク多大ノ經費ト手數トヲ要スルコトナキノミナラス本稅ハ其ノ制定以來非難多ク殊ニ近來ハ其ノ全廢又ハ改善ノ聲一層高マリ政府又ハ議會ニ對スル建議請願等ノ狀況ニ鑑ミルモ苟モ一般稅制ノ根本的整理ヲ爲サムトスル場合ニ於テハ假令一時的ニ國稅トシテ存續スルニ過キトス雖何等ノ改正ヲ加ヘスシテ之ヲ存置スルコトハ不穩當トリト認メラルルカ故ニ本稅ニ對シテハ現行法ニ對スル非難ニ鑑ミ成ルヘク營業利益側定スルニ適當ナル課稅標準ヲ選擇シ尙營業利益皆無ナル場合ニ於ケル課稅免除ノ途ヲ開ク等適當ナル改正ヲ加フルコト

(四) 通行税ノ廢止　今日ノ社會狀態ニ於テハ汽車、電車又ハ汽船ヲ利用スル者カ之ヲ利用セサル者ニ比シ必スシモ特別ノ擔税力アリト認メ難キヲ以テ本税ハ適當ノ租税ト認メ難ク又其ノ課税範圍ニ付テモ汽車、電車又ハ汽船ノ乘客ナル以上ハ無資産階級ノ者ト雖又如何ナル短距離ノ通行ト雖之ヲ除外スルコトナキカ故ニ多數ノ者ニ對シテ比較的ニ負擔苛重ニ過クルノ感アリ而カモ其ノ短距離ノ通行及下層階級ノ納ムル金額カ總税額ノ大部分ヲ占ムル實況ナルヲ以テ此ノ際之ヲ廢止スルコト

(五) 賣藥營業税ノ廢止　現行賣藥税法中ノ賣藥印紙税ハ賣藥ノ需用者ニ對スル消費税ナルモ賣藥營業税ハ藥劑製造業ニ課税スルモノニシテ普通ノ物品ヲ製造スル者ニ對スル營業税ト異ナル所ナク而カモ其ノ課税内容ニ公平ヲ失スル點アルヲ以テ此ノ機會ニ於テ之ヲ全廢シ他ノ製造業ト同シク營業税法ヲ適用シテ課税ノ統一ヲ期スルコト

(六) 相續税ノ整理　相續税ハ家族制度ヲ破壞スルノ虞アルヲ以テ之ヲ廢止スヘシトノ說ナキニアラサルモ相續ト云フ偶然ノ事實ニ依リ一時ニ多額ノ財産ヲ取得スル者ニ對シ適當ノ課税ヲ爲スハ當然ニシテ之ヲ廢止スヘキ理由ナシ又一說ニハ現行税率ハ低キニ過クルヲ以テ相當ニ之ヲ高ムル必要アリト論スル者アリト雖之ヲ高クスレハ家族制度破壞ノ非難ヲ招クノ虞アリ且財産税ヲ創設シ更ニ相續税ヲ增加スルトキハ動モスレハ財産所有者ノ負擔ヲ過重ナラシムルノ傾向アルヲ以テ此ノ際之カ修正ヲ爲ササルコトトシ唯脫税ノ弊害ヲ除キ課税ノ公平ヲ期スル爲ニ多少ノ修正ヲ加フルコト

(七) 登錄税ノ整理　登錄税ハ特ニ修正ヲ要スル事項ナキモ相續税修正ノ結果ト課税ノ充實公平ヲ期スルノ必要トニ鑑ミ部分的修正ヲ爲スコト

(八) 鑛業税ノ整理　鑛業税中ノ鑛産税ニハ普通ノ營業ニ對スル營業税ニ相當スル部分アルコト明カナルヲ以テ此ノ際鑛産税中ノ畧半額ヲ減額シテ地方税ニ委讓ス

(九) 所得税ノ整理　所得税ハ最近根本的改正ヲ爲シタルモノニシテ特ニ改善ヲ要スト認ムル事項ナキモ脫税ノ手段顯著ナルモノニ對シ相當取締ノ必要ヲ感スルヲ以テ之カ矯正ノ爲ニ多少修正ヲ加フルコト

(一〇) 其ノ他　砂鑛區税ハ鑛業税中ノ鑛區税ト同シク鑛業權特許税タルノ意味ニ於テ之ヲ存續シ、兌換銀行券發行税亦特ニ改正ノ必要ナシト認ムルヲ以テ之ヲ現行ノ通据置キ、狩獵免許税ハ政府ニ於テ狩獵法ノ全體ニ付キ根本的改正ノ計畫アル趣ナルヲ以テ狩獵免許税モ亦其ノ際合セテ研究セラルヘク今回ハ之ヲ改正セサルコト

乙　間接國税

間接國税ノ整理ヲ攻究セムトセハ先以テ我邦現行間接國税ノ全般ニ涉リ其ノ内容ヲ調査スルノ要アリ

是ヲ以テ特別委員會ニ於テハ現行間接國稅ニ付各稅ノ沿革、課稅方法及範圍、稅率、納期、免稅、又ハ戾稅、徵收手續、擔保制度、取締方法竝將來特ニ考慮ヲ要スヘキ諸點ニ關シ仔細ニ研究ヲ爲シタリ其ノ要領別冊ノ通リ

右調査ノ結果ニ依リ各稅整理案ヲ審議シ結局現行稅種ノ內醬油造石稅、自家用醬油稅、石油消費稅、賣藥印紙稅ノ四稅ヲ廢止シ酒造稅、酒精及酒精含有飲料稅、麥酒稅、砂糖消費稅、織物消費稅、印紙稅ニ修正ヲ加ヘ尙化粧品稅、淸凉飲料稅ヲ創設シ取引所稅及骨牌稅ハ之ヲ現行ノ儘存續スルコトニ決シ其ノ他ノ消費物件等ニ付テハ新稅トシテ之ヲ創設スルコトノ可否ニ關シ大體ノ調査ヲ爲シタリ其ノ大要左ノ如シ

(一) 醬油造石稅ノ廢止　醬油ハ生活上ノ日用品ニシテ如何ニ貧困ナル者ト雖或程度ノ數量ヲ消費スルモノナルカ故ニ之ニ課稅スルハ不可ナルノミナラス一方之ト其ノ效用ヲ同フスル味噌其ノ他ノ調味料ニ對シテモ齊シク課稅ヲ爲スニ非レハ負擔ノ公平ヲ得サルヘキモ味噌其ノ他ノ調味料ニ對シ新ニ課稅ヲ爲スコトハ其ノ實行上多クノ困難アルヲ以テ寧ロ本稅ハ之ヲ廢止スルコト

(二) 自家用醬油稅ノ廢止　右ノ如ク醬油造石稅ヲ廢止スル以上農民ノ自用ニ供スル自家用醬油稅モ亦當然之ヲ廢止スルコト

(三) 石油消費稅ノ廢止　燈火用石油消費稅ハ電氣瓦斯ノ發達ニ伴ヒ年次其ノ需要ヲ減少シ今ヤ大體ニ於テ一部下層階級ノ負擔ニ歸スルニ至レリ而シテ若シ本稅ヲ存續スルトセハ石油トノ權衡上新ニ電氣瓦斯ニ對シ課稅ヲ爲スノ要アルモ此等ニ對シ課稅ヲ爲ストキハ工業用動力ニ使用スルモノトノ區分困難ナル等ノ事情アリ故ニ本稅ハ之ヲ廢止スルコト

(四) 賣藥印紙稅ノ廢止　賣藥ハ主トシテ下層階級ニ屬スル者カ醫師ノ診療ヲ受クルコト能ハサル場合ニ消費スルモノニシテ國民ノ保健又ハ治療上必要ノモノナルノミナラス若シ本稅ヲ存續スルトセハ實質ニ於テハ殆ント賣藥ト同一ナル新藥、新製劑ニ對シテモ權衡上新ニ課稅ヲ爲スル要アルヘキモ斯ノ如キハ衞生上行政上由々シキ問題ニシテ其ノ實行不可能ナルヲ以テ結局本稅ハ之ヲ廢止スルコト

(五) 酒造稅、麥酒稅、酒精及酒精含有飲料稅ノ整理　酒稅ニ付テハ現行ノ造石稅制度ニ代フルニ庫出課稅制度竝專賣制度ノ可否ニ關シテモ一應ノ調査ヲ爲ス所アリ結局課稅制度ニ付テハ現行ノ儘之ヲ据置クコトトシ尙本稅ハ比較的擔稅力ニ富ムト認メラルルヲ以テ稅制整理ニ因ル歲入減少ノ補塡ヲ之ニ求メ各酒類一石ニ付平均二圓ノ割合ニ依リ增稅スルコト

(六) 砂糖消費稅ノ整理　砂糖消費稅ニ付テハ現行ノ消費稅制度ニ代ヘテ之ヲ專賣ト爲スコトノ可否ニ關シテモ調査研究ヲ遂ケタルカ結局其ノ課稅方法及稅率ハ之ヲ現行ノ儘据置クコトニ決シ課稅ノ權衡上餡ヲ本稅中ニ加ヘ之ニ對シ百斤ニ付二圓ノ課稅ヲ爲スコト仍現行ノ煉乳原料砂糖戾稅法中

若干ノ修正ヲ爲スコト

(七) 織物消費稅ノ整理　織物消費稅ニ付テハ或ハ綿織物ニ對スル課稅ヲ廢止スヘシ等ノ說アリシモ結局現行ノ課稅方法及稅率ヲ其ノ儘維持スルコトトシ織物トノ權衡上メリヤス、フエルトヲ本稅中ニ加ヘ之ニ對シ織物ト同一率ニ依リ課稅スルコト

(八) 印紙稅ノ整理　印紙稅ハ現行ノ課稅方法及稅率ヲ根本的ニ整理シ卽チ其ノ負擔能力ト納稅上ノ簡便トヲ顧慮シテ階級定額ニ依リ課稅スヘキ證書類ヲ特定シ又證書帳簿ノ性質上頻繁ニ作成セラルルモノニシテ比較的擔稅力少ナキモノニ對シテハ一通又ハ一冊每ニ五錢ノ定額稅ヲ課シ尙產業組合出資證劵ノ如キモノニ對シテハ特ニ低率ノ課稅ヲ爲スコトノ外經濟界發展ノ現況ニ鑑ミ現行法ニ於ケル證書面ノ記載金額ニ對スル課稅最低限ノ五圓ナルヲ十圓ニ引上クルコト

(九) 化粧品稅ノ創設　化粧品ハ主トシテ奢侈的消費ニ屬シ相當擔稅力ニ富メルモノアルヲ以テ本稅ヲ創設シテ之ニ從價一割五分ノ印紙稅ヲ課スルコト

(〇) 清涼飲料稅ノ創設　清涼飲料ハ一種ノ贅澤品ニシテ性質上課稅物件トシテ適當ナルノミナラス其ノ消費狀態モ麥酒ト同一ナル點多キヲ以テ麥酒ノ補完稅タル意味ニ於テ本稅ヲ創設シ一石ニ付十圓ヲ課スルコト

(二) 其ノ他　取引所稅ハ最近取引所法ノ改正ニ伴ヒ旣ニ相當ナル改正ヲ加ヘタルヲ以テ此際變更ヲ加フルノ必要ナシト認メ又骨牌稅ニ付テハ其ノ歲入額僅少ナルノ故ヲ以テ之ヲ廢止スヘシトノ說ナキニアラサリシモ骨牌ハ其ノ使用方法ニ依リテハ社會風敎上忌ムヘキモノアルノミナラス大體ニ於テ奢侈的物件ト認メラルルヲ以テ之ヲ改正スルノ要ナシト認メタリ仍ホ其ノ他新稅トシテ創設スルコトノ可否ニ關シ酢稅、燐寸消費稅等ニ付一應ノ調査ヲ遂ケタルモ孰レモ國稅トシテ採用スルノ價値ナキモノト認メタリ

丙　地方稅

地方稅ニ在リテハ其ノ根本的整理トシテ道府縣ニ於テハ國稅ヨリ委讓セラルヘキ地租及營業稅ヲ中軸トシ之ニ配スルニ所得稅附加稅ヲ以テシ從來ノ戶數割及之ニ代フルヘキ家屋稅ハ之ヲ全廢シ尙地租トノ權衡ヲ得セシムルカ爲ニ新ニ定率稅タル家屋稅ヲ設クヘク市町村ニ於テハ地租家屋稅及營業稅ノ附加稅ヲ中樞トシテ之ニ配スルニ戶數割ヲ以テスヘシ然レトモ地租及營業稅ハ此ノ際地方稅ニ委讓セラレサルヲ以テ當分ノ應急策トシテハ其ノ國稅ニ於テ輕減セラルヘキ部分ヲ地方ニ於クル附加稅ニ於テ增徵シ其ノ財源ノ範圍內ニ於テ前述ノ根本的整理方針ニ從ヒ左記ノ如キ整理ヲ爲スコト

一　道府縣稅

(イ) 從來ノ戶數割及之ニ代ルヘキ家屋稅ハ府縣稅トシテ課稅ノ公平ヲ圖ルコト困難ナルヲ以テ之ヲ廢止シ地租附加稅トノ權衡上賃貸價格ヲ標準トスル定率稅ノ家屋稅ヲ新設スルコト

(ロ) 市町村ノ所得税附加税ヲ府縣税ニ委讓シ府縣ノ所得税附加税率ヲ現在ノ制限率ニ、市町村ノ制限率ヲ加ヘタルモノ迄引上クルコト

(ハ) 府縣税營業税雜種税ハ複雜ニ過クルヲ以テ之ニ相當整理ヲ加ヘ職工税其ノ他細民ニ課スルカ如キ税種ヲ廢止スルコト

(ニ) 鑛業税及砂鑛區税ノ附加税ヲ廢シ新ニ鑛業及砂鑛業ニ對シ府縣税營業税ヲ課スルコト

二 市町村税

(イ) 地租及營業税ノ附加税ヲ地方税ノ中軸トスルノ趣旨ニ依リ國税ヨリ委讓セラレタル財源ヲ以テ其ノ税率ヲ高メ且新設スヘキ府縣税家屋税ニ對スル附加税ヲ課スルコト

(ロ) 鑛業税及砂鑛區税ノ附加税ヲ廢シ鑛業砂鑛業ニ對シ新設スヘキ府縣税營業税ノ附加税ヲ課スルコト

(ハ) 戸數割ハ府縣税トシテ不適當ナルモ市町村内ニ於テハ能ク其ノ權衡ヲ保持シ得ヘシト認メラルルヲ以テ主トシテ所得ヲ課税標準トスル戸數割ヲ設ケ現在ノ家屋税施行地ニモ之ヲ施行スルコト但シ從來ノ戸數割及家屋税ハ府縣税ヨリ削除セラルルヲ以テ之ニ對スル從來ノ市町村附加税ハ自然消滅トス

(ニ) 地租及營業税附加税ノ增率ニ依ル增收額及新設シタル家屋税附加税ノ收入ヲ以テ市町村ノ所得税附加税ヲ道府縣ヘ移シタル財源ノ缺陷及道府縣ニ於ケル營業税雜種税ノ整理税目ニ對スル附加税ノ減收ヲ補塡シ其ノ殘額ヲ以テ市町村戸數割ヲ輕減スルコト

以上各項整理ノ詳細ハ別冊整理案ニ記載シアルカ如クニシテ各税目ノ歳入ニ增減アリト雖國税地方税ヲ通シタル合計ノ實收額ニ於テハ從來ト異ナル所ナキモノトス

以上各税整理ノ結果ニ因ル歳入ノ增減ヲ示セハ左ノ如シ

國税整理ニ因ル歳入增減額調

區分	税目	現行法ニ因ル税額	整理增	整理減	差引整理後ノ税額	備考
		千円	千円	千円	千円	
現行直接税	地租	七四、一四〇	—	三二、九九五	四一、一四五	本税ノ四割四分五厘餘ヲ地方税ヘ委讓ニ因リ減
	所得税	一九一、五七七	—	—	一九一、五七七	現行通
	營業税	六四、五八一	八〇	二八、七七六	三六、八八五	增ハ寶藥營業税編入減ハ其ノ四割四分五厘餘ヲ地方税ヘ委讓ニ因ル
	相續税	一〇、六三七	—	—	一〇、六三七	本税ハ增加スヘキモ登錄税ノ整理減ト差引キ增減ナシト認ム
	通行税	九、一八四	—	九、一八四	〇	廢止ニ因リ減
	鑛業税	一〇、三〇二	—	二、八九六	七、四〇六	鑛産税ノ半額ヲ地方税ニ委讓ニ因リ減
	兌換銀行券發行税	八、三三三	—	—	八、三三三	現行通
	賣藥營業税	三一〇	—	三一〇	〇	營業税ニ編入ニ因リ減
	登錄税	六九、一三八	—	—	六九、一三八	本税ハ減スヘキモ相續税ノ整理增ト差引增減ナシト認ム
	計	四三八、二〇二	八〇	七四、一六一	三六四、一二一	

新直接税 財産税	〇	六四、九三八	—	六四、九三八	新規課税
計	〇	六四、九三八	—	六四、九三八	
直税合計	四三八、一〇〇一	六五、〇一八	七四、一六一	四二九、〇五九	増減ノ差九、一四三千圓減
酒造税	一五三、七〇五	一〇、六六六	—	一六四、三七一	清酒其ノ他一石ニ付二圓ノ割ノ増税ニ因リ増
酒精及酒精含有飲料税	三、〇六〇	九五	—	三、一五五	酒造税トノ均衡上増税ニ因リ増
現行間接税 麥酒税	七、八九四	七二五	—	八、六一九	麥酒一石ニ付二圓増税ニ因リ増
醤油造石税	四、八六七	—	四、八六七	〇	廢止ニ因リ減
自家用醤油税	七七二	—	七七二	〇	同
砂糖消費税	四三、〇八八	九九三	—	四四、〇八一	餡百斤ニ付二圓課税ニ因リ増
織物消費税	四二、六一三	二、七四八	—	四五、三六〇	メリヤス、フエルト課税ニ因リ増（従價一割）
石油消費税	八八四	—	—	〇	廢止ニ因リ減
賣藥印紙税	七、九六四	—	—	七、九六四	同
取引所税	一三、三〇六	—	—	一三、三〇六	現行通
骨牌税	三三八	—	—	三三八	同
印紙税	一一、一四七	—	—	一一、一四七	税率ヲ改正スルモ收入ニ増減ナシト認ム
計	二八九、六二七	一五、三三七	一四四、四八七	二九〇、三六七	
新間接税 化粧品税	〇	六、一二五	—	六、一二五	新規ニ價額ノ一割五分ヲ課税
清涼飲料税	〇	二、一七八	—	二、一七八	新規ニ一石ニ付十圓課税
計	〇	八、四〇三	—	八、四〇三	
間税合計	二八九、六二七	二三、六三〇	一四四、四八七	二九八、七七〇	増減ノ差九、一四三千圓増
總計	七二七、八二九	八八、六四八	八八、六四八	七二七、八二九	増減ナシ

備考

一　現行法ニ依ル税額ハ大正九年度分トス但シ登錄税印紙税ハ大正八年分ニ依ル

二　各新税ハ徵税費ヲ差引タル平年度分ノ收入見込額ヲ掲ク

地方税整理ニ因ル歳入増減調　其ノ一（總計）

種別	現在ノ税收入額	整理ニ依ル増減額	整理後ノ税收入額
	円	円	円
地租附加税	九六、五二七、三九五	三三、九九四、九一五	二二九、五三三、三一〇
營業税附加税	二八、九五七、八三一	二八、七九八、四八六	五七、七五六、三一七
道府縣營業税及其附加税	二五、三九八、三〇三	二、七四四、八一一	一八、一四三、〇一四
家屋税及其附加税（新設）	—	三三、四八九、一七六	三三、四八九、一七六
所得税附加税	三一、二九一、三六八	七、九四四、一〇四三	三九、二三五、四一一
戸數割（新設）	—	一五三、〇八四、五〇八	一五三、〇八四、五〇八
雜種税及其附加税	五四、五九五、五二三	△四、九三六、八八九	四九、六五八、六三四
戸數割及其附加税	二一八、〇〇〇、二五七	△二八、〇〇〇、二五七	—
家屋税及其附加税	二三、九六七、〇七八	△二三、九六七、〇七八	—
鑛業税附加税	一、二四、六五九	△一、二四、六五九	—
砂鑛區税附加税	四、六五五	△四、六五五	—
賣藥營業税附加税	二二、四〇一	△二二、四〇一	—
取引所營業税附加税	三三九、九一一	—	三三九、九一一
水産税及其附加税	一、〇二二、五一一	—	一、〇二二、五一一
市町村分賦額	七、九五二、七五四	—	七、九五二、七五四
夫役	一、三〇七、四〇六	—	一、三〇七、四〇六
段別割	四、七二二、四〇九	—	四、七二二、四〇九
特別税（段別割ヲ除ク）	一五、七二八、三三〇	—	一五、七二八、三三〇
計	五〇〇、九五一、六八一	—	五〇〇、九五一、六八一

現在ノ税收入ト整理後ノ税收入比較

種別	現在ノ税收入額	整理ニ依ル增減額	整理後ノ税收入額
地租附加税	七三、五六二、四九〇	—	七三、五六二、四九〇
營業税附加税	一六、七三三、七九一		一六、七四二、〇八九
營業税	九、四一九、〇六四		九、三五五、四四六
家屋税（新設）	—		
小計	九九、七一五、三四五		一四、九九二、七八四
所得税附加税	三、六七六、〇二九		一二四、六五二、八〇九
雜種税	三五、一六六、九六九		三九、二三五、四一一
戶數割	三九、一三一、一六八		三二、三三七、八〇六
家屋税	七、七三三、七九三		—
鑛業税附加税	六七〇、八七八		—
砂鑛區税附加税	三、五四六		—
賣藥營業税附加税	八、二九八		—
取引所營業税附加税	一九六、二六七		一九六、二六七
水産税	四三二、〇六二		四三二、〇六二
市町村分賦額	七、九五二、七五四		七、九五二、七五四
夫役	四一、〇〇四		四一、〇〇四
段別割	七七八、〇三六		七七八、〇三六
合計	一九五、六二六、一四九		一九五、六二六、一四九

道府縣（十年度當初豫算）　其ノ二（道府縣税）

種別	現在ノ税收入額	整理ニ依ル增減額	整理後ノ税收入額
地租附加税	七三、五六二、四九〇	—	七三、五六二、四九〇
營業税附加税	一六、七三三、七九一		一六、七四二、〇八九
營業税	九、四一九、〇六四		九、三五五、四四六
家屋税（新設）	—		
小計	九九、七一五、三四五		一四、九九二、七八四
所得税附加税	三、六七六、〇二九		一二四、六五二、八〇九
雜種税	三五、一六六、九六九		三九、二三五、四一一
戶數割	三九、一三一、一六八		三二、三三七、八〇六
家屋税	七、七三三、七九三		—
鑛業税附加税	六七〇、八七八		—
砂鑛區税附加税	三、五四六		—
賣藥營業税附加税	八、二九八		—
取引所營業税附加税	一九六、二六七		一九六、二六七
水産税	四三二、〇六二		四三二、〇六二
市町村分賦額	七、九五二、七五四		七、九五二、七五四
夫役	四一、〇〇四		四一、〇〇四
段別割	七七八、〇三六		七七八、〇三六
合計	一九五、六二六、一四九		一九五、六二六、一四九

市町村（九年度當初豫算）　其ノ三（市町村税）

種別	現在ノ税收入額	整理ニ依ル增減額	整理後ノ税收入額
地租附加税	三三、九六四、九〇五	三三、九九四、九一五	五五、九五九、八二〇
國税營業税附加税	一三、二二四、〇四〇	二八、七九〇、一八八	四一、〇一四、二二八
道府縣營業税附加税		△一、〇七四、三三八（鑛業税及其附加税雜種税附加税編入）	
家屋税附加税（新設）	五、九七九、一三九	三、八八二、七六七	八、七八七、五六八
小計	—	七、四九六、三九二	七、四九六、三九二
戶數割（新設）	四一、一六八、〇八四	—	四一、一六八、〇八四
戶數割附加税	—	一五三、〇八四、五〇八	一五三、〇八四、五〇八
家屋税附加税	一七八、七四九、〇八九	△一七八、七四九、〇八九	
道府縣雜種税附加税	一六、二三三、二八五	△一六、二三三、二八五	
所得税附加税	一九、四二八、五五四	△二、一〇七、七二六	一七、三二〇、八二八
鑛業税附加税	二七、六一五、三三九	△二七、六一五、三三九	—
砂鑛區税附加税	四五三、七八一	△四五三、七八一	—
賣藥營業税附加税	一、一〇九	△一、一〇九	—
取引所營業税附加税	一四、一〇三	△一四、一〇三	—
水産税附加税	一四三、六四四	—	一四三、六四四
夫役	五八九、四四九	—	五八九、四四九
段別割	一、二六六、四〇二	—	一、二六六、四〇二
特別税（段別割ヲ除ク）合計	三、九三四、三七三	—	三、九三四、三七三
	一五、七二八、三二〇	—	一五、七二八、三二〇
	三〇五、三二五、五三二	—	三〇五、三二五、五三二

第五　附帶希望決議

諮問第五號
答申

稅制整理案

整理案ハ諮問ノ趣旨ニ依リ國稅及地方稅ノ合計ニ於テ現在歲入ニ增減ナカラシメタルモノナルモ政府ニ對シ左記二項ノ希望ヲ答申スルコトニ附帶決議ヲ爲シタリ

一　地租及營業稅ハ當分約半額ヲ國稅トシテ存置スルコトト爲シタルモ理想トシテハ其ノ全額ヲ地方稅ニ委讓スヘキモノナルカ故ニ軍備縮少ニ因リ生スル財源ヲ以テ此ノ兩稅ノ全部ヲ地方稅ニ委讓スルコト

二　間接國稅ニ關スル稅制整理ノ結果課稅ノ衡權上ヨリ新ニ飴、メリヤス、フエルト、化粧品、清涼飲料ニ對シ課稅ヲ爲シ約一千二百萬圓ノ歲入ヲ圖ルコトヲ計畫シタルモ若シ此ノ際他ニ適當ナル財源アルニ於テハ此等ノ比較的大ナラサル新稅ヲ創設スルハ稅制整理ノ大體ヨリ通觀シテ寧ロ避クヘキモノト認メラル而シテ參考トシテ專賣事業ニ關シ調査スルニ將來煙草ノ賣行カ大正十年度ニ比シ減少セサルモノト假定シ其ノ定價ノ平均二割程度ノ値上ヲ爲ストセハ約一千二百萬圓ノ歲入ヲ得ヘキカ故ニ此ノ財源ニ因リ敍上新稅ノ創設ヲ見合スルコト

諮問第五號答申

諮問第五號ノ稅制整理ニ關スル根本方策ニ付調査審議ノ結果左記ノ趣旨ニ依リ別冊整理案及答申候也

大正十一年七月二十日

臨時財政經濟調査會長　男爵　加藤友三郎

內閣總理大臣　男爵　加藤友三郎　殿

左記

稅制ノ根本的整理ハ中央地方ノ財政上至大ノ影響ヲ及ホス而已ナラス國民個々ノ利害ニモ亦極メテ重大ナル關係アルヲ以テ之カ適確ナル方策ヲ定ムルコト頗ル難事タルモ幸ニ特別委員會ニ於テ別冊ノ成案ヲ得タルニ依リ政府ハ更ニ其ノ利害得失ヲ攻究シ實際ニ付テ十分ナル調査ヲ遂ケ現下ノ財政經濟ノ實狀ニ鑑ミ適當ナル整理ヲ實行セラレ可然ト認ム

目次

第一編　直接國稅整理案……一
第二編　間稅國稅整理案……九一
第三編　地方稅整理案……一九九
第四編　附帶希望決議……二一一

第一編

直接國稅整理案

目次

第一　直接國稅ノ體系竝地租營業稅ノ整理……一
甲　直接國稅體系竝地租、營業稅ノ地方稅委讓……五七
乙　地租、營業稅ノ委讓方法……七一
丙　當分存續スヘキ地租營業稅ノ整理……七三
第二　其ノ他ノ直接稅ノ整理……七九
甲　廢止スヘキモノ……七九
通行稅……七九
賣藥營業稅……八〇
乙　改正スヘキモノ……八一
相續稅……八一
登錄稅……八四
鑛業稅……八六
所得稅……八七

丙　改正セサルモノ……八九
砂鑛區稅……八九
兌換銀行劵發行稅……八九
狩獵免許稅……九〇

第一　直接國稅ノ體系竝地租營業稅ノ整理

直接國稅ノ整理ニ關スル根本方策ヲ研究セムトセハ先以テ直接國稅ノ體系ヲ如何ニスヘキヤヲ調査スルノ必要アリ惟フニ我國ノ直接國稅ハ從來隨時必要ニ應シ之ヲ新設シ又ハ其ノ一部ヲ改正シテ今日ニ至リタルモノニシテ制度トシテ組織完全ヲ缺キ相互ノ脈絡十分ナラス從テ其ノ體系トシテ未タ完備シタルモノト認ムルコト能ハス而シテ將來其ノ體系ヲ如何ニスヘキカニ付テハ本會ニ於テ最モ多クノ日子ヲ費シ最モ愼重ナル審議ヲ遂ケタル所ナリトス而シテ一般所得稅ヲ以テ直接國稅ノ中樞タラシムヘシトスル點ニ付テハ殆ト異論ナキ處ナリシモ唯之ニ配スヘキ補完稅ノ選定ニ付テハ種種議論アリタル所ニシテ審議討究ノ結果左ノ三案ヲ作製シタリ

第一案

一般所得稅ヲ中樞トシ別ニ一般財產稅ヲ創設シテ之カ補完稅タラシメ現行地租營業稅ハ之ヲ地方稅ニ委讓スルコト

說明

我國直接稅ヲ觀ルニ地租、營業稅、所得稅ハ其ノ最モ主要ナルモノニシテ財政ノ必要上漸次ニ制定セラレタルモノノ如シ而シテ之ヲ理論的ニ考察スレハ地租ハ農業者ニ課稅シ營業稅ハ商工業者ニ課稅シ以テ農商工ノ負擔ノ權衡ヲ圖ルト同時ニ其ノ間又別ニ所得稅ヲ設ケテ所得ノ源泉ヲ問ハス悉ク之ニ課稅シ以テ負擔ノ周到ヲ期スルニ在ルモノト認ム然レトモ仔細

ニ之ヲ觀察スレハ各稅ノ組織又ハ相互ノ脈絡完カラス從テ直接稅ノ體系トシテ頗ル不完全ナリト云ハサルヘカラス尤モ所得稅ニ付テハ最近一大改正ヲ斷行シテ舊來ノ面目ヲ一新シタリト雖モ地租營業稅ハ依然トシテ創設當時ノ舊態ヲ存シ到底課稅ノ衡平ヲ維持スルコト能ハス卽チ現行地租ハ法定地價ヲ課稅標準ト爲スカ故ニ事實上地價又ハ土地所得ノ變動アルモ之ニ對シテ適應ノ課稅ヲ爲スコト能ハス去リトテ隨時法定地價ノ修正ヲ爲サムトスルモ莫大ノ費用ト長期ノ期間トヲ要シ容易ニ之ヲ行フコト能ハス從テ年所ヲ經ルニ從ヒ漸次不公平トナルノミナラス將來財政ノ必要ニ應シ稅率ノ增加ニ依テ增收ヲ計ラントセハ益々各地各人間ニ負擔ノ不權衡ヲ來スヘシ加之營業稅、所得稅ハ課稅最低限ヲ設クルニ拘ラス地租ハ單ニ一筆ノ土地ヲ有スルモ尙課稅セラルル如キハ甚タ權衡ヲ失スルモノト云フヘシ次ニ營業稅ハ各種ノ外形標準ニ依リテ課稅スルカ故ニ其ノ課稅ハ必スシモ所得ニ伴ハス時ニ或ハ損失アルモ尙課稅セラルルカ如キ結果ヲ來シ應能課稅ノ理論ニ背反スルコト少カラス加之將來財政ノ必要ニ應シ其ノ稅率ヲ增加スルコトアランカ益々負擔ノ權衡ヲ失スルニ至ルヘシ右ノ如ク兩稅共各其ノ缺點アルノミナラス此ノ兩稅間ニ於ケル組織ノ連絡ヲ缺クカ故ニ此ノ兩稅ヲ以テシテハ到底農業者ト商工業者トノ間ニ負擔ノ均衡ヲ得ルコト能ハサルナリ假ニ一歩ヲ讓リ地租、營業稅ニ相當修正ヲ加ヘ相互ノ脈絡權衡ヲ圖ルトスルモ此ノ兩者以外ニ於テ相當擔稅力ヲ有スル財產卽有價證券又ハ家屋等ニ課稅セサルニ於テハ到底普遍的ニ課稅ノ權衡ヲ期シ難シ去リトテ此ノ他尙證券稅又ハ家屋稅等ヲ新設セムカ益々稅制ヲ複雜ナラシムルコトヽナリ稅制整理ノ趣旨ニ反スルノミナラス各稅間ノ權衡ヲ圖ルコト一層困難ニ陷ルヘシ故ニ直接稅制度ノ根本的整理ヲ行ハントセハ宜シク地租營業稅ヲ廢シ之ニ代フルニ新ニ一般財產稅ヲ創設シ一般所得稅ト相俟テ課稅ノ權衡ヲ圖ルヲ要ス若夫レ租稅ハ單ニ所得ニノミ課稅スヘシトノ理論ニ從フトキハ單一所得稅ヲ以テ可ナリトスヘキモ同一所得ト雖其ノ源泉カ財產ナルト勤勞ナル

トニ依リ擔稅力ニ相違アルヲ以テ財產ニハ特ニ重課スルノ要アルノミナラス所得ヲ生セサル財產ト雖モ尙之ニ課稅スレハ當該財產ヲシテ收益化セシムルノ反射作用ヲ生スヘキヲ以テ一般所得稅ノ外尙其ノ補完稅トシテ一般財產稅ヲ起スノ必要アリ而シテ一般財產稅ハ農業者タルト商工業者タルト將亦其ノ他ノ財產所有者タルトヲ問ハス其ノ有スル一切ノ動產、不動產ヲ網羅シテ課稅スルモノナルカ故ニ各人間ノ負擔權衡上最モ理想的ニシテ且最モ完全ナルモノト認ム斯クノ如ク一般所得稅及一般財產稅ヲ以テ直稅制度ノ體系ト爲スコトハ歐洲各國中直稅制度ニ付最モ研究ヲ遂ケタル普國ニ於テ既ニ一八九三年之ヲ實行シタル所ナリ卽チ當時普國ハ不完全ナル所得稅ノ外ニ地租、家屋稅及營業稅ヲ有セシカ同年ノ改革ニ當リ此等ノ諸稅ヲ地方團體ニ委讓シ國稅トシテハ新ニ一般財產稅ヲ創設シ更ニ從來ノ所得稅ニ大改正ヲ加ヘテ一般所得稅ト爲シ此ノ兩稅ヲ以テ直接稅ノ體系トシテ負擔ノ權衡ヲ計レリ爾後其他ノ獨乙聯邦ニ於テモ此例ニ倣ヒ其ノ制度ヲ改善シ著々好成績ヲ擧ケタリ故ニ我國ニ於テモ一般財產稅ヲ起ス場合ニ於テハ地租、營業稅ハ宜シク之ヲ地方團體ニ委讓スヘシ蓋シ此ノ兩稅ハ國稅トシテハ上述ノ如キ缺點ヲ有スルモ之ニ相當修補ヲ加ヘテ地方稅ニ移ストキハ其ノ施行區域狹少ナルカ故ニ地價ノ修正又ハ課稅標準ノ調查等容易且周到ナルヲ以テ比較的權衡ヲ維持シ得ヘク又各地間ノ權衡ニ付テハ中央政府ニ於テ相當監督ヲ加フルトキハ大體其ノ均衡ヲ維持スルコトヲ得ヘシ況ンヤ現下地方財源頗ル枯渴セルノミナラス複雜ナル現行地方稅ヲ整理スルノ必要切迫セル今日ニ於テハ此ノ兩稅ヲ地方財源ニ委讓スルハ最モ機宜ニ適セル方策ナリト認ム以上ノ趣旨ニ依リ今一般財產稅ヲ創設セントセハ左ノ諸點ニ注意スルヲ要ス

第一　課稅スヘキ財產ハ收益ヲ生スルト否トヲ問ハサルコト

財產稅ハ財產其ノモノカ擔稅力アリトシテ之ニ課稅スルヲ目的トスルカ故ニ收益ノ有無ヲ問フノ必要ナシ加之無收益財

産ト雖モ之ニ課税スレハ當該財産ヲシテ收益化セシムルノ好影響ヲ與フルコトアルヘシ但法人ノ財産ハ株式又ハ持分ニ表現セラレ一方個人ノ財産トシテ課税セラルルヲ以テ重複課税ヲ避クルカ爲法人ノ財産ニハ課税セサルヲ可トス

第二　不動産ノ課税價格ニハ相當斟酌ヲ加フルコト

財産ノ調査竝其ノ評價ハ課税技術上最モ困難トスル所ニシテ動産其他ノ無形財産ハ逸シ易ク之ニ反シ不動産ハ漏ナク捕捉セラルルノ結果往々不動産ニ偏重スルノ傾向アルヲ以テ不動産ノ課税價格ニハ相當斟酌ヲ加ヘ不動産以外ノ財産トノ權衡ヲ維持スルノ要アリ

第三　税率ヲ累進率トスルコト

財産所有者ノ擔税力ハ其ノ財産ノ增加スルニ從テ累進スルカ故ニ税率ハ比例率ト爲サス累進率ト爲スヲ可トス尙其ノ税率ノ程度ニ付テハ我國ニ於テハ本税ノ創設カ地租及營業税ヲ全廢スルコトヲ條件トスルモノナルカ故ニ財政ノ必要上此ノ兩税ニ代ハルヘキ收入ヲ擧クルコトヲ期スルヲ要ス

第四　人的關係ノ斟酌ヲ爲ササルコト

家族扶養費ノ控除、小額所得者ニ對スル斟酌等ノ如キハ一般所得税ニ於テ爲スヲ可トスルモノニシテ一般財産税ニ於テハ此等ノ必要ナシ

第五　課税最低限ヲ設クルコト

個々ノ財産ニ對シテハ課税最低限ヲ設クルノ要ナカルヘシト雖モ個人ニ綜合シタル財産ノ總價額カ一定限度ニ達セサルトキハ免税スルヲ可トス而シテ其ノ程度ハ大體ニ於テ所得税ニ於ケル課税最低限ノ所得ヲ得ルニ要スル財産價格ヲ標準トスルコト適當ナルヘシ

以上ノ諸點ヲ考慮シタル結果ニ依ル本税制定ノ要領ハ左ノ如シ

一般財産税要領

第一　納税義務者

一　財産ノ權利者但シ法人ハ之ヲ除ク

（註）法人ヲ除クハ重複課税ヲ避クルカ爲ナリ

二　權利者ノ住所カ內國ニ在ルト外國ニ在ルトヲ問ハス但シ第二項第一號（ハ）ノ財産ニ付テハ其ノ住所カ內國ニ在ル者ニ限ル

第二　課税スヘキ財産

一　內國ニ在ル左記各號ノ財産

（註）收益財産タルト無收益財産（享樂財産ヲシテ）タルトヲ問ハス

（イ）動産及不動産

（ロ）不動産ノ上ニ存スル權利

（ハ）前二號ニ揭ケタル以外ノ財産權

（註）本號ノ財産ニ付テハ權利者ノ住所地ヲ以テ財産ノ所在地ト看做ス

二　前號ノ財産價額中ヨリ權利者ニ屬スル一切ノ債務ヲ控除ス但シ課税外ノ財産ヲ取得スル爲ニ要シタル債務ハ之ヲ控

除セス

（註）但書ハ理論上正當ナルヘキモ實行上殆ト不可能ナルヘシ

第三　課税外ト爲スヘキ財産

一　總財産價額一萬圓未滿ノ者ノ有スル財産但シ家族ノ財産ハ之ヲ合算ス

二　公共ノ用ニ供シ又ハ公益ノ爲ニ使用スル財産

三　動産中家寶、什器、書藉、家具其ノ他日用品等ニシテ營利ノ目的ニ供セラレス又直接所得ヲ生セサル財産

第四　課税價格ノ算定

一　一月一日ノ時價ヲ標準トスルコト但シ不動産ニ付テハ其ノ四分ノ三トス

二　時價不明ナルモノハ收益ノ十五倍ヲ標準トスルコト時價收益共ニ不明ナルモノハ評定價格ニ依ル

三　地上權、永小作權、定期金其ノ他特殊ノ權利ニ付テハ大體相續税法ノ計算ニ依ルコト

第五　課税價格ノ調査決定

（註）大體現行所得税法ノ規定ニ準ス即左ノ通リ

一　納税義務者ハ毎年一月中ニ其ノ財産價格ヲ申告スルコト

二　税務署ハ納税義務者ノ申告及其ノ他ノ資料ニ依リ課税價格調査書ヲ作製スルコト

三　調査委員會ヲ設ケ納税義務者ノ申告及税務署ノ調査書ヲ提出シテ之ニ付議スルコト

四　税務署ハ調査委員會ノ決議ニ依リ之ヲ決定ス但シ不當ト認ムルトキハ之ヲ再調査ニ付シ尚不當ト認ムルトキハ税務

署ノ調査ニ依リ決定スルコト

第六　税率

超過累進率トシ左記區分ニ依ル

課税財産價格	税率
二萬圓以下	千分ノ四、
二萬圓ヲ超エ三萬圓以下	四、五
三萬圓同　五萬圓同	五、
五萬圓同　十萬圓同	五、五
十萬圓同　二十萬圓同	六、
二十萬圓同　五十萬圓同	六、五
五十萬圓同　百萬圓同	七、
百萬圓同　二百萬圓同	七、五
二百萬圓同　五百萬圓同	八、
五百萬圓同　千萬圓同	八、五
千萬圓同　二千萬圓同	九、
二千萬圓同　五千萬圓同	九、五

五千萬圓ヲ超ユルモノ

第七　納期

四期ニ別チ左記區分ニ依ル

六月一日ヨリ同末日限

八月一日ヨリ同末日限

十月一日ヨリ同末日限

十二月一日ヨリ同末日限

第八　本稅施行ニ依リ徵收シ得ヘキ稅額見込左ノ如シ而シテ其ノ內譯ハ別記ノ通リ但シ徵稅費ノ計算ハ未定

一三四、五五二、二〇五圓

財產稅ヲ國稅トシ地租及營業稅ヲ地方稅ニ移ス場合ニ於ケル要項

一　地租及營業稅ヲ地方稅ニ移ス場合ニ於テハ此ノ兩稅ニ對シ相當修補ヲ加フヘキモ大體ニ於テハ現行法ノ規定ヲ襲用スルコト

二　地方稅タル地租、營業稅ハ財產稅ノ納稅者ニ對シテモ之ヲ賦課スルコト

(註)財產稅ノ總額ハ現行地租及營業稅ノ合計額ヲ標準トスルニ拘ラス課稅最低限(一萬圓)ヲ設ケテ其ノ以下ノ者ニハ課稅セサルヲ以テ財產稅ノ納稅者ハ最低限以下ノ者カ現在負擔シツツアル地租及營業稅ニ相當スル稅金ヲモ負擔スルコトトナルヘシ然ルニ之ニ對シテ尙地方稅タル地租、營業稅ヲモ賦課スルハ過重ナリトノ說ナキニアラサルヘ

キモ又一方ヨリ之ヲ觀レハ一萬圓以上ノ財產ヲ有スル以上ハ此ノ變遷ノ場合ニ於テ其ノ以下ノ者ヨリ若干負擔ノ增加スルハ社會ノ趨勢上已ムヲ得サルヘク殊ニ國稅タル財產稅納稅者ハ地方公共的各種ノ施設ニ依リ利益ヲ受クルコト多カルヘキヲ以テ其ノ有スル土地又ハ營業ヲ標準トシテ地方稅ヲ負擔スルコト當然ナルヘシ

三　地租及營業稅ヲ地方稅ニ移ス場合ニ於テハ地價ノ設定修正及土地臺帳ノ整理竝營業稅課稅標準ノ調查決定等ハ總テ地方團體ヲシテ之ヲ爲サシムルコト但シ政府ニ於テ相當監督ヲ爲スコト

四　地方稅トシテ徵收シ得ヘキ地租及營業稅ノ總額ハ此ノ變遷ノ時期ニ於テハ從來此ノ兩稅ニ對シテ課シタル附加稅ノ範圍ニ止ムヘキコト但シ將來地方團體財政ノ膨脹ニ伴ヒ漸次擴張シ得ヘク又此ノ兩稅ノ財源ヲ以テ諸他ノ地方稅ヲ整理シ負擔ヲ減少スルトキハ其ノ程度ニ於テ從來ノ附加稅以上ニ上ルモ妨ケナキコト

(註)此ノ結果、財產稅ヲ納ムル資格ナキ者(一萬圓以下ノ財產所有者)ハ從來國稅トシテ納付シタル地租又ハ營業稅丈ケ其ノ負擔ヲ輕減セラルルコトトナルヘシ

以上各項ニ關聯シテ地方稅タル營業稅、雜種稅、家屋稅及戶數割等ノ整理又ハ財產稅附加稅ノ要否等ニ付キ研究ヲ要スル事項多シト雖モ此等ハ地方稅審議ノ際ニ之ヲ讓ルコト

財產稅ノ可否

可トスル點

一　財產ヨリ生スル所得ハ勤勞又ハ資產勤勞共働ノ所得ヨリモ特ニ擔稅力アリト認メラルルカ故ニ所得稅ノ外ニ財產稅ヲ起スノ要アルコト

（註）此ノ點ニ付テハ地租及營業稅ヲ課シ又ハ財產所得ニ重課スルコトニ依リテ調節スルヲ得ヘキヲ以テ特ニ財產稅ヲ起スノ要ナシトノ說アランモ營業ニ對スル課稅ハ資產ヨリ生スル所得ニ課稅スルノ外營業ノ勤勞ヨリ生スル所得ニ對シテモ課稅スルコトトナルカ故ニ其ノ目的ニ副ハス故ニ財產稅ヲ起シテ純粹ナル資產ノ擔稅力ノミヲ捕捉スルノ要アリ

二　所得ノ有無ヲ問ハス財產其物ニ對シテ課稅スルノ要アルコト

（註）所得ヲ生スル財產ニ課稅スルノ至當ナルハ勿論所得ヲ生セサル財產ト雖モ之ニ課稅スルトキハ此ノ種ノ財產ヲ收益的ニ供用セシムルノ反射作用ヲ生スヘキヲ以テ財產稅ハ所得稅ノ及ハサル所ヲ補フコトヲ得ヘシ

三　地租ト營業稅トハ兩々相對立シテ權衡ヲ保ツヘキモノト認メラルルニ拘ラス此ノ兩稅法ノ組織課稅標準等全ク異ナルカ故ニ農業者ト商工業者トノ間ニ於ケル負擔ノ權衡ヲ失スルノ虞アリ故ニ此ノ兩者ヲ廢シテ共通的ノ財產稅ト爲スノ要アルコト

四　土地又ハ營業ノ外相當擔稅力アリト認メラルル有價證券動產又ハ家屋等アルヲ以テ課稅ノ公平ヲ期スル爲ニハ廣ク財產稅ヲ起シテ此等ヲ網羅スルノ要アルコト

五　土地其ノ他ノ自然增價所謂不勞價値增加ニ對シ現行法上適當ナル課稅方法ナキモ財產稅ヲ以テスレハ其ノ增加額ニ對シテモ課稅スルコトヲ得ルコト

否トスル點

一　租稅ハ本來所得ニ課スルヲ本旨ト爲スヘキモノナルニ所得ノ有無ニ拘ラス財產其ノモノニ課稅セムトスルハ租稅ノ本旨ニ反ス加之其ノ結果ハ元本侵蝕ノ結果ヲ來スノ虞アルコト

二　財產稅施行ノ場合ニ於テ土地家屋等ノ如キ不動產スラ其ノ價額ノ調查極メテ困難ナルヘキニ動產又ハ債權等（無記名ノ公債、社債、預金、貸金、商品其ノ他ノ動產等）ニ至リテハ其ノ所在ノ調查容易ナラサルノミナラス其ノ價額ノ調查一層困難ニシテ其ノ結果課稅ノ不公平ヲ來スノ虞アルコト殊ニ享樂財產ニ迄課稅セムトスルハ實行上頗ル困難ニシテ或ハ美術ヲ破壞シ又ハ文明ノ進步ヲ妨クトノ批難アルヘシ

三　前項ノ結果トシテ本稅ノ負擔ハ農業者其ノ他不動產所有者ニ重ク商工業者其ノ他無形財產、動產所有者ニ輕キ結果ヲ生スルノ嫌アルコト

四　啻ニ財產ノ調查困難ナルノミナラス其ノ控除スヘキ債務ノ調查亦頗ル至難ニシテ之カ爲動モスレハ種々ノ弊害ヲ伴フヲ免カレサルコト

五　課稅價格ノ評定ハ事實上困難ナルノミナラス時價ナキモノハ收益ノ何倍ト謂フ標準ノミニテ一律ニ評定シ難キモノ頗ル多シ殊ニ時價モ收益モナキモノハ其ノ評定一層困難ナルコト（鑛山、漁業、版權、特許權、商標權又ハ美術骨董品等）

（別記）

課稅財產價額竝稅額調

種類	課稅財產價額	同上ノ內四分ノ一ノ控除金額	課稅價額	稅額	備考
土地	千円 一三、六四八、二七七	千円 三、四一二、〇六九	千円 一〇、二三六、一八六	円 五一、一八〇、九三〇	

建物	四、二四四、二七〇	一、〇六一、〇六七	一五、九一六、〇一五	三、一八三、二〇三	一二
山林ノ立木	六九一、五七九	一七二、八九四	二、五九三、四二五	五一八、六八五	
鑛山	四八〇、九六一	—	二、四〇四、八〇五	四八〇、九六一	
船舶	八〇、三二七	—	四〇一、六三五	八〇、三二七	
家畜	六九、八二三	—	三四九、一一〇	六九、八二三	
機械器具	四二、七三三	—	二一三、六六五	四二、七三三	
原料品	二六、七〇八	—	一三三、五四〇	二六、七〇八	
商品	二、四八四、〇五六	—	二、四二〇、二八〇	二、四八四、〇五六	
國債	三五六、七二一	—	一、七八三、六〇五	三五六、七二一	
地方債	一四〇、六七〇	—	七〇三、三五〇	一四〇、六七〇	
社債	一一八、三二〇	—	五九一、六五〇	一一八、三二〇	
銀行預金	二、一五四、六八二	—	一〇、七七三、四一〇	二、一五四、六八二	
流通貨幣	五六、三六四	—	二八一、八二〇	五六、三六四	
株式其ノ他ノ法人投資	六、九六〇、九九三	—	三四、八〇四、九六五	六、九六〇、九九三	
計	三一、五五六、四六三	四、六四六、〇二三	二六、九一〇、四四一	二六、九一〇、四四一	

備考

税額ハ平均率千分ノ五ヲ以テ算出セリ

私有總財産價額竝課税財産價額調

種類	總財産價額	同上ノ内法人所有歩合	同上ノ内法人所有ノ分	差引個人所有ノ分	内財産壹萬圓以上ヲ有スル者ニ屬スル分ノ割合	課税財産價額	備考
土地	二六、一二一、九八九 千円	〇五割	一、二〇六、九九四 千円	二四、八二四、九九五 千円	〇五割	一三、六四八、二四七 千円	別紙内譯ノ通
建物	八、九二六、三三三	別紙ノ通リ	四三七、七九一	八、四八八、五四一	〇五割	四、二四四、二七〇	同
山林立木	一、八一九、九四六	〇五	九〇、九九七	一、七二八、九四九	四〇	六九一、五七九	同
鑛山	六、四二二、八二〇	〇七割	四、四八八、九七四	一、九二三、八四六	二五	四八〇、九六一	鑛産價額（農商務省調査）六四一、二八二千圓ヲ利率一割ニテ價額ヲ還元ス
船舶	六四二、六一九	〇七割	四八一、九六四	一六〇、六五五	五〇	八〇、三二七	別紙内譯ノ通
家畜	三四九、一一一	—	—	三四九、一一一	二〇	六九、八二三	同
機械器具	二八四、八八九	〇七五	二一三、六六七	七一、二二三	六〇	四二、七三三	營業税ヲ課セラレタル製造業資本金一、七八〇、五五五、三五圓中八割一、四二四、四四四、一〇八圓ヲ固定資本トシ其ノ二割ヲ機械器具ト見積計算ス
原料品	一七八、〇五六	〇七五割	一三三、五四二	四四、五一四	六〇	二六、七〇八	同上ノ製造業資本金一、七八〇、五五五、三五圓中二割三五六、一二一、〇二七圓ヲ運轉資本トシ其ノ五割ヲ原料品ト見積リ計算ス
商品	六、四五二、〇九五	〇四五割	二、九〇三、四四三	三、五四八、六五二	七〇	二、四八四、〇五六	營業税決定卸賣一七、七八六、八九四千圓ノ三割五、三五六、〇六八千圓及小賣二、七九〇、〇六八千圓ノ四割一、一二六、〇三七千圓ヲ現在商品ト見積リ計算ス
國債	一、二七四、〇〇四	〇三割	三八二、二〇一	八九一、八〇三	四〇	三五六、七二一	大正九年六月末現在高ニ公定相場ヲ乘シテ計算ス
地方債	四〇一、九一四	〇三割	一二〇、五七四	二八一、三四〇	五〇	一四〇、六七〇	所得金額三、五〇七千圓ヲ利率五分六厘ニテ價額ヲ還元ス
社債	四三二、六〇八	〇三割	一二六、七八二	二九五、八二六	四〇	一一八、三二〇	所得金額一、五八二千圓ヲ利率七分ニテ價額ヲ還元ス
銀行預金	七、六九五、二九二	一〇割	一、五三九、〇五八	六、一五六、二三四	三五	二、一五四、六八二	大正九年六月一日現在ニ依ル
流通貨幣	一、五二六、三九三	別紙ノ通リ	一、二四四、五七一	二八一、八二三	二〇	五六、三六四	別紙内譯ノ通
株式其ノ他ノ法人投資	二、二七二、八六四	〇五割	五六三、六四三	二〇、七〇九、二二一	六五	六、九六〇、九九三	大正九年末現在拂込見込資本八、六七一、四三四千圓ニ二割增トシテ計算ス
計	七三、七八〇、九三二	—	二四、〇三四、二〇一	五九、七四六、七三一	—	三一、五五六、四六三	

備考

一　財産價額ハ私有財産價額トス

二　一萬圓以上ノ財産ヲ有スル者ニ屬スル割合ハ所得稅ノ調査等ヨリ達觀シテ推定シタルモノトス

三　各種財産ノ現在高ハ大正七年乃至大正九年ニ於テ調査シ得タルモノノ內成ヘク最近ノモノヲ採用シタリ

四　機械器具、道具等ニ付テハ製造業ノ分ノミヲ計算シ農業及商業用ノモノハ算入セサルコトトセリ

五　室內裝飾品、身邊裝飾品及自動車等ノ如キモノハ調査至難ナルカ故ニ之ヲ省キタリ

六　私設鐵道及軌道ノ價額ハ總テ法人ノ所有經營ニ屬スルカ故ニ株式其ノ他ノ法人投資額中ニ包含ス

一　全國土地賣買價格調

地目	段別	一段當賣買價格	總價格	一段當地價	備考
田	二、九三二、五七五、五段	四六九円	一三、七〇六、八七九千円	三四、八六錢	單價ハ勸業銀行調査ノ大正八年四月現在價格ニ依ル
畑	二、五〇一、七八四、九	二四九	六、三二六、四四四	九、一三	同
宅地	三九三、一三五、七	市郡坪當 三、五 一、五	四、三八〇、九〇九	一六九、七一	市街宅地ハ地價ノ約八倍郡村宅地ハ地價ノ約五倍ニテ計算ス
鹽田	五、六三〇、四	八〇〇	四五、〇三六	三、〇四	專賣局調査大正九年分ニヨル
鑛泉地	三、三	坪當 一、五〇〇	一、四八五	七、六三	地價ノ二十倍ヲ以テ計算ス
山林	八、〇四八、八八九、〇	二〇	一、六〇九、七七七	三三	農務局調査及相續稅ノ調査ヲ參照シテ計算ス
池沼	一三、六八七、〇	二〇	二、五三七	一、三三	山林價格ニ比準シテ計算ス
原野	一、三三六、五四五、〇	一〇	一三三、六五四	二	農務局調査及相續稅ノ調査ヲ參照シテ計算ス
牧場	五〇、九六五、八	一〇	五、九六五	二〇	原野ニ比準シテ計算ス
雜種地	一四、〇二九、九	四五	六、三一三	九、三一	地價ノ約五倍ヲ以テ計算ス
計	一五、二六六、二四六、五		二六、二二、九八九		

二　建物價額調

區別	總價額	備考
個人 家屋（住宅及附屬建物共）	八、三八三、一四八千円	市制地ノ戶數二、二六一、八〇七戶、一戶當、地代ヲ除キタル賃貸料年二四〇圓ト見積リ此ノ賃貸料計五四二、八三三、六〇〇圓市制地以外ノ戶數八、二〇七、八〇九戶、一戶當、地代ヲ除キタル賃貸料年三六圓ト見積リ此ノ賃貸料計二五、四八、二四圓合計八三八、三四、八〇四圓利率一割ニテ價額ヲ還元ス
個人 倉庫	六、〇四二	營業稅ヲ課セラレタル倉庫業建物賃貸價格七九、二六四圓中敷地及店舗ノ分ヲ控除シタル倉庫ノミノ分ヲ七割ト見積リ之ヲ利率一割ニテ還元シタル價額二〇三四、九六八圓外ニ營業者以外ヲ其ノ二割ト見積リ之ヲ加算セリ
個人 工場	九〇、三一九	營業稅ヲ課セラレタル製造業建物賃貸價格一五、〇五三、二元圓中敷地及店舗ノ分ヲ控除シタル工場ノミノ分ヲ五割ト見積リ之ヲ利率一割ニテ還元シタル價額五、二五、六四五圓外ニ營業者以外ヲ其ノ二割ト見積リ加算セリ
個人 築造物計	九、〇三二	築造物ハ工場ノ一割ト推定セリ
法人 家屋	八、四八八、五四一	
法人 其ノ他	四三七、七九一	營業稅ヲ課セラレタル法人ノ建物賃貸價格五、五二四、七九七圓中敷地ノ分ヲ控除シタル建物ノミノ分ヲ八割五分ト見積リ之ヲ利率一割ニテ價額ヲ還元セリ
合計	八、九二六、三三一	

備考

營業稅ハ大正九年決定額ニ依リ調査ス

三　山林立木調

一	大正九年分山林所得（八年伐採）	八三、九九八、三五九円
二	伐採價額百圓當所得步合七十五圓ニテ換算セル伐採金額	一一一、九九七、八一二
三	外ニ所得納稅者以外ノ伐採ヲ右ノ三割ト見積リタル伐採價額	三三、五九九、三四四
四	伐採價額合計	一四五、五九七、一五六
五	伐採價額ノ十二倍半ヲ以テ立木價額ト見積リ計算シタル金額	一、八一九、九六四、四五〇

備考

伐採年限ヲ大體五十年ト見積リ現在立木總數量ハ一ケ年伐採量ノ五十倍ナレトモ其ノ平均年數(二十五年)ニ相當スル立木ノ單價ハ伐採期ニ達シタルモノノ四分ノ一ヲ相當ト認メ五十倍ノ四分ノ一卽十二倍半ヲ以テ立木ノ總價額ト計算セリ

四　船舶價額調

		總噸數	單價	價格	備考
汽船		二、九六五、五九三 噸	二〇〇	五九三、一一八 千円	
帆船		九六六、四三一 石	五〇	四八、三二一	
		二九五、〇九三	四	一、一八〇	
計				六四二、六一九	

備考

總噸數ハ遞信省ノ調査ニ依リ單價ハ營業稅資料ヲ基礎トシテ調査セリ

五　家畜價額調

種別	頭數	單價	價額	備考
牛	一、二〇四、三三一 頭	一二五 円	一四九、九九八 千円	
馬	一、五六〇、二四二	一〇七	一六六、九四五	
山羊	一〇九、六九二	二	二一九	
緬羊	三、一九二	二	六	
豚	三五九、九九九	一八	六、四七九	
鷄	二五、〇九一、五二一	一	二五、〇九一	
鴨	三七三、五三六	一	三七三	
計			三四九、一二一	

備考

頭數ハ農商務統計ニ依リ價額ハ大正七年中ニ於ケル家畜市場ノ平均ニ依ル

六　流通貨幣調

流通正貨		五九、七一〇 千円
補助貨		一五二、八七九
兌換券發行高		一、七八三、五〇八
計		一、九九六、〇九七
內	銀行金銀在高	一、〇五六、六八九
差引		九三九、四〇八
內	銀行以外ノ法人所有高	一八七、八八二(二割)
	調査不能ノ分	四六九、七〇四(五割)
	個人所有ノ分	二八一、八二二(三割)

備考

銀行以外ノ法人所有高調査不能ノ分及個人所有ノ分ノ各割合ハ推定トス

第二案

一般所得税ヲ中樞トシ別ニ土地營業等ニ對スル特別所得税ヲ創設シテ之カ補完税タラシメ現行地租、營業税ハ之ヲ地方税ニ委讓スルコト

説明

直接税制度ノ調査上第一ニ考慮スヘキハ其ノ組織體系ヲ如何ニスヘキカニ在リ惟フニ租税ノ負擔ハ應能課税ノ理ニ基クヘキモノナルヲ以テ其ノ合理的税源ハ之ヲ各人ノ所得ニ求ムルヲ要ス從テ直接税制度ノ中心體系ハ所得税ヲ以テセサルヘカラス今歐洲列强國ニ於ケル直接税制度ノ推移ヲ大觀スルニ英國ハ從來所得税ヲ以テ租税制度ノ中軸トシ國家有事ノ際ハ常ニ其ノ税率ヲ增加シテ其ノ國費ヲ支辨シ來リシカ一九一四年ニ至リ普通所得税ノ外ニ更ニ各所得ノ綜合ニ對スル附加所得税ヲ設ケ益々其ノ特徵ヲ發揮セリ佛國ニ於テハ一九一四年從來ノ營業税、人頭動産税、地税、家屋税、門窓税等ノ收益税ノ外ニ一般所得税ヲ創設シ更ニ一九一七年ニ至リ營業税、人頭動産税、門窓税等ヲ廢シテ特別所得税ヲ起シ兩者相俟ツテ直接税制度ノ改革ヲ完成セリ伊國ニ於テモ亦最近ニ至リ從來ノ主要直接税タリシ地租、家屋税、動産所得税ヲ併合整理シテ統一所得税ヲ設ケタリ普國ニ於テハ既ニ一八九三年ノ税制改革ニ依リ地租家屋税及營業税ヲ地方團體ニ委讓シ之ニ代フルニ財産税ヲ以テシ尙舊來ノ所得税ヲ改正シテ一般所得税ト爲シ財産税ト相俟ツテ直接税制度ノ中心ト爲セリ

右ノ如ク各國ノ直接税制度ハ漸次外形的標準ヲ以テ課税標準ト爲ス收益税ヲ廢シテ所得税ヲ中心體系トスル組織ニ改正スルニ至レリ翻テ我國直接税制度ノ現狀ヲ見ルニ最近所得税ノ一大改正ヲ斷行シ舊來ノ面目ヲ一新シタリト雖モ尙依然トシテ外形的標準ニ依リ課税スル地租、營業税ヲ存續シ其ノ課税ノ權衡宜シキヲ得サル爲此等ニ對スル非難ノ聲ヲ絕ツニ至ラス蓋シ現行地租ハ收入ノ確實ニシテ徵收ノ容易ナルノ長所ヲ有スルモ法定地價ヲ課税標準ト爲スカ故ニ事實上地價又ハ土

地所得ノ變動アルモ之ニ對シテ適應ノ課税ヲ爲スコト能ハス去リトテ隨時地價ノ修正ヲ爲スコト容易ノ業ニアラス營業税ハ各種ノ外形的標準ニ依リテ課税スルカ故ニ其ノ課税ハ必スシモ所得ニ伴ハス時ニ或ハ損失アルモ尙課税セラルルカ如キ結果ヲ來シ應能課税ノ理論ニ背反スルコト少カラス加之兩税間ニ於ケル組織ノ連絡ヲ缺クカ爲此ノ兩者ヲ以テシテハ到底農業者ト商工業者トノ間ニ負擔ノ均衡ヲ得ルコト能ハサルナリ假リニ一歩ヲ讓リ地租、營業税ニ相當修正ヲ加ヘ相互ノ脈絡權衡ヲ圖ルトスルモ此ノ兩者以外ニ於テハ相當擔税力ヲ有スル財産卽有價證券又ハ家屋等ニ課税セサルニ於テハ到底普遍的ニ課税ノ權衡ヲ期シ難シ故ニ一般財産税ヲ起シテ其ノ整理ヲ期セムトスルノ議アルモ財産税ハ所得ノ有無ニ拘ラス之ニ課税セムトスルモノニシテ租税ノ根本觀念ニ反シ動モスレハ財産其ノモノヲ侵蝕スルノミナラス不動産ニ重課スルノ不公平ナル結果ヲ生スルコトハ到底避ケ難キモノト認ム或ハ又地租、營業税ヲ相當ニ修補シ以テ其ノ權衡ヲ圖ラムトスルカ如キハ從來數次改正ヲ經テ今尙非難ノ聲ヲ絕タサル現況ニ鑑ミ將亦世界各國ノ大勢ニ省ミ根本的革新ノ必要切迫セル今日ニ於テハ到底斯カル姑息ノ方法ヲ以テ滿足シ得ヘキモノニ非ス是ヲ以テ之ヲ觀レハ我邦將來ノ直接税制度トシテハ宜シク歐洲各國ノ例ニ倣ヒ地租、營業税ヲ廢シ之ニ代フルニ各種ノ特別所得税ヲ起シ農工商等ヲ通シテ其ノ所得ニ課税スルト同時ニ其ノ綜合所得ニ對シテハ又別ニ一般所得税ヲ課スルノ制度ヲ樹立スルコト最肝要ナリト認ム如此所得税ヲ以テ中心體系トスルトキハ一朝有事ノ場合ニ於テ之ニ增課スルモ其ノ負擔ノ權衡ヲ維持スル上ニ於テ最モ適當ナルヘシ而シテ地租、營業税ノ如キハ地方税トシテ之ヲ徵收スルニ於テハ比較的其ノ權衡ヲ維持シ得ヘク殊ニ地方財源枯渴ノ折柄ナルヲ以テ此兩者ハ宜シク地方團體ノ財源ニ委讓スルヲ得策トスヘシ此主旨ヲ以テ特別所得税ヲ創設スルニ當リテハ左ノ諸項ニ注意スルヲ要ス

第一　所得ヲ生スル源泉ニ依リ課稅率ヲ異ニスルコト

卽資產所得ハ擔稅力最モ大ナルヲ以テ之ニ重課シ營業所得之ニ次キ勤勞所得ハ擔稅力最モ薄弱ナルヲ以テ一般所得稅ヲ課スルニ止メ特別所得稅トシテハ之ヲ課稅外ニ置クコトヲ要ス

第二　稅率ハ比例稅トスルコト

一般所得稅ハ各種ノ所得ヲ綜合シテ課稅スルモノニシテ之ヲ取得スル個人ノ負擔能力ニ應セシムルモノナルカ故ニ其ノ稅率ハ累進率ヲ用フヘキモノナルモ特別所得稅ハ之ニ反シ其ノ所得ヲ生スル源泉ノ負擔能力ヲ目的トシ個々ニ課稅スルモノニシテ之ヲ受クル人的關係ヲ問ハサルカ故ニ其ノ稅率ハ比例率トスルヲ要ス

第三　稅率ハ地租、營業稅ノ總收入高ヲ得ルコトヲ目的トスルコト

理想的ニ稅率ヲ定メムトスルトキハ特別所得稅ハ成ルヘク輕キヲ要ス然レトモ我國ニ於ケル事實問題トシテハ地租、營業稅ヲ全廢スルコトヲ條件トスルカ故ニ財政ノ都合上此兩稅ニ代ハルヘキ收入ヲ擧クルコトヲ期スルヲ要ス

第四　人的關係ニ基ク斟酌ハ爲サヽルコト

例ヘハ家族扶養費ノ控除小額所得者ニ對スル斟酌等ノ如キハ一般所得稅ニ於テ爲スヘキモノニシテ特別所得稅ニ於テハ此等ノ必要ナシ

第五　課稅最低限ヲ設クルコト

特別所得稅ニ在リテハ本來ハ課稅最低限ヲ設クルノ必要ナシト認ムルモ零碎ナル所得ヲ捕捉スルハ課稅技術上困難ナルノミナラス現行營業稅ニ於テモ既ニ其ノ最低限ヲ認メ居ルヲ以テ之ニ代フヘキ本稅ニ於テハ一定ノ最低限度ヲ設クルヲ可トスヘシ但シ資產所得ト營業所得ト其ノ程度ヲ異ニスルノ要アリ

以上ノ諸點ヲ考慮シタル結果ニヨル本稅制定ノ綱要ハ左ノ如シ

特別所得稅綱要

現行地租及營業稅ハ之ヲ池方財源ニ委讓シ之ニ代フルニ不動產所得、資本利子所得及營業所得ニ對シ左ノ方法ヲ以テ特別所得稅ヲ賦課スルコト

甲　不動產所得

第一　納稅義務者

一　內國ニ於ケル土地家屋其ノ他ノ築造物ノ所有者

(註)法人タルト個人タルトヲ問ハス以下各種ノ所得皆同シ

二　內國ニ住所ヲ有シ外國ニ於テ土地家屋其ノ他ノ築造物ヲ所有スル者但シ外國人ヲ除ク

第二　課稅所得

一　內國ニ在ル土地家屋其ノ他ノ築造物ノ賃貸所得但シ自己所有ノ不動產ヲ供用シテ所得ヲ得ルモノハ其ノ賃貸所得ヲ評定ス

二　內國ニ住所ヲ有スル者ノ外國ニ於テ所有スル土地家屋其ノ他ノ築造物ノ賃貸所得但シ自己所有ノ不動產ヲ供用シテ所得ヲ得ルモノハ其賃貸所得ヲ評定スルコト前項ニ同シ

第三　課稅外ト爲スヘキ所得

一　一般所得税法ニ於テ免税スル公共團體、公益法人、産業組合等ノ所得

二　地租條例ニ於テ免税スル公共用等ノ土地ノ所得

（註）現行地租條例中ニ認メアル各種ノ減免租年期ノ如キハ地方税トナスヘキ地租ニ於テハ之ヲ認容スルモ特別所得税ニ於テハ之ヲ認メス即年期中ノ土地ト雖苟モ所得アレハ之ニ相當スル課税ヲ爲スモノトス

三　一ケ年二百圓未滿ノ所得但シ法人ノ所得ハ此ノ限ニ在ラス

第四　税率

所得金額百分ノ五ノ比例税率トス

乙　資本利子所得

第一　納税義務者

一　内國ニ於テ資本利子ヲ取得スル者但シ第二項第二類ノ所得ニ付テハ内國ニ住所ヲ有スル者ニ限ル

二　内國ニ住所ヲ有シ外國ニ於テ資本利子ヲ取得スル者但シ外國人ヲ除ク

第二　課税所得

一　第一類

内國ニ於テ支拂ヲ受クル公債（國債ヲ除ク）社債ノ利子及割引料、銀行預金、信託金ノ利子及法人ヨリ受クル利息

（註）本所得ノ大部分ハ現行税法第二種所得ト實質同一ナルヲ以テ重複ノ感アリ故ニ現行第二種所得ヲ第三種ニ編入シ而シテ本所得ハ特別所得税トシテ施行スルヲ可ト認ム

二　第二類

前號以外ノ利子即金錢又ハ物品ノ貸付等ニ依ル利子又ハ使用料及外國ヨリ受クル利子等

第三　課税外ト爲スヘキ所得

一　法人ヨリ受クル配當

（註）法人ニ對シテモ特別所得税ヲ課スルヲ以テ重複課税ヲ避クルカ爲ナリ

二　銀行ノ取得スル利子、割引料等

（註）銀行ノ所得タル利子割引料等ハ營業所得トシテ課税スルカ故ナリ

三　一般所得税法ニ於テ免税スル公共團體、公益法人及産業組合等ノ所得

四　第二類ノ所得ニシテ一ケ年二百圓未滿ノ所得

但シ法人ノ所得ハ此ノ限リニアラス

第四　徴收又ハ調査決定

第一類ハ現行所得税法ノ第二種ニ準シテ徴收シ第二類ハ現行所得税法第三種ニ準シテ調査決定スルモノトス

第五　税率

所得金額百分ノ五ノ比例税率トス

丙　營業所得

第一　納税義務者

一　內國ニ於テ營業ヲ爲ス者

二　內國ニ住所ヲ有シ外國ニ於テ營業ヲ爲ス者但シ外國人ヲ除ク

第二　課稅所得

一　內國ニ於ケル商業、工業、鑛業、原始產業等ノ所得

二　內國ニ住所ヲ有スル者ノ外國ニ於ケル商業、工業、鑛業、原始產業等ノ所得

(註)課稅所得ハ資產ト勤勞トヲ併用シ營利ノ目的ヲ以テ行フ凡テノ事業ヨリ生スル所得ヲ網羅スルモノニシテ現行營業稅法ノ各業體ハ勿論同法以外ノ營業タル賣藥營業、娛樂興業、湯屋、理髮業等竝ニ所謂原始產業タル農業、漁業、牧養業、採取業等ヲモ含ムモノトス但シ醫師、辯護士、看護婦等ノ自由職業者及職工勞役者ハ之ヲ除ク

第三　課稅外ト爲スヘキ所得

一　動產、不動產及金錢ヲ貸付クル營業ノ所得

(註)營業トシテ貸付クル以上ハ理論上營業所得トシテ課稅スヘキモノナルモ動產及金錢貸付ノ所得ハ資本利子所得トシテ課稅シ不動產貸付ノ所得ハ不動產所得トシテ課稅スル方事實上適當ト認ムルニ依ル

二　營業ニ使用スル資產金額千圓ニ滿タサル者ノ所得

(註)營業所得ニ課稅スルハ資產勤勞共働ノ所得ニ課稅スルノ趣旨ナルヲ以テ假令最低限以上ノ所得アリト雖其ノ所得ノ大部分カ勤勞ノミヨリ生スルカ如キモノヲ課稅外トスル要アリ(例周旋業、仲立業等)

三　一ケ年四百圓未滿ノ所得但シ法人ノ所得ハ此ノ限ニアラス

(註)營業所得ハ半ハ勤勞ノ結果ニ依ルモノト認メ財產所得等ノ倍額トセリ

四　一般所得稅法ニ於テ免稅スル重要物產製造業ノ所得

五　一般所得稅法ニ於テ免稅スル公共團體、公益法人及產業組合等ノ所得

第四　所得金額ノ算定

所得ノ算定方法ハ一般所得稅法ニ準ス但シ不動產ノ賃貸料ハ之ヲ控除シテ算定スルコト

(註)不動產ノ賃貸料ハ不動產所得トシテ別ニ課稅スルカ故ナリ

第五　稅率

所得金額百分ノ三ノ比例稅率トス

(註)營業所得ハ半ハ勤勞ノ結果ニ依ルモノト認メ畧其ノ稅率ヲ半減セリ

各所得共通ノ事項

一　各所得別ニハ課稅最低限ニ達セサルモノト雖左記ノ場合ニ於テハ課稅スルモノトス

(イ)　一般所得稅ヲ納ムル資格アル者ノ不動產、營業及資本利子所得

(ロ)　不動產所得及資本利子第二類ノ所得ノ合計額カ二百圓ニ達スルトキ又ハ前記所得ノ一若ハ其ノ合計額ニ營業所得二分ノ一ヲ加ヘタル金額カ二百圓ニ達スルトキ

(註)右二項ノ理論ハ可ナリトスルモ實行上頗ル煩細ニシテ或ハ不可能ナラン

二　前記各所得稅ノ部ニ記載シタル外申告、調查、決定、納期、救濟方法等ハ各所得ヲ通シ凡テ現行所得稅法ニ依ル

三　稅額

本稅施行ニ依リ徵收シ得ヘキ稅額見込左ノ如シ而シテ其ノ內譯ハ別記ノ通リ但シ徵稅費ノ計算ハ未定

一二九、八八九、四七五圓

國稅トシテ特別所得稅ヲ創設シ地租及營業稅ヲ地方稅ニ移ス場合ニ於ケル要項

一　地租及營業稅ヲ地方稅ニ移ス場合ニ於テハ此ノ兩稅ニ對シ相當修補ヲ加フヘキモ大體ニ於テハ現行法ノ規定ヲ襲用スルコト

二　地方稅タルノ地租、營業稅ハ特別所得稅ノ納稅者ニ對シテモ之ヲ賦課スルコト

（註）特別所得稅ノ總額ハ現行地租及營業稅ノ合計額ヲ標準トスルニ拘ラス課稅最低限ヲ設ケテ其ノ以下ノ者ニハ課稅セサルヲ以テ特別所得稅ノ納稅者ハ最低限以下ノ者カ現在負擔シツツアル地租及營業稅ニ相當スル稅金ヲモ負擔スルコトトナルヘシ然ルニ之ニ對シテ既ニ地方稅トナレル地租、營業稅ヲモ賦課スルハ過重ナリトノ說ナキニアラサルモ又一方ヨリ觀レハ特別所得稅納稅者ノ土地又ハ營業ハ地方公共的各種ノ施設ニ依リ利益ヲ受クルコト比較的多カルヘキヲ以テ之ニ對シ相當ニ課稅スルハ已ムヲ得サルヘシ

三　地租及營業稅ヲ地方稅ニ移ス場合ニ於テハ地價ノ設定、修正及土地臺帳ノ整理竝ニ營業稅課稅標準ノ調査決定等ハ總テ地方團體ヲシテ之ヲ爲サシムルコト但シ政府ニ於テ相當監督ヲ爲スコト

四　地方稅トシテ徵收シ得ヘキ地租及營業稅ノ總額ハ此ノ變遷ノ時期ニ於テハ從來此ノ兩稅ニ對シテ課シタル附加稅ノ範圍ニ止ムヘキコト但シ將來地方團體財政ノ膨脹ニ伴ヒ漸次擴張シ得ヘク又此ノ兩稅ノ財源ヲ以テ諸他ノ地方稅ヲ

整理シ負擔ヲ減少スルトキハ其ノ程度ニ於テ從來ノ附加稅以上ニ上ルモ妨ケナキコト

（註）此ノ結果特別所得稅ヲ納ムル資格ナキ者ハ從來國稅トシテ納付シタル地租又ハ營業稅丈ケ其ノ負擔ヲ輕減セラルルコトトナルヘシ

以上各項ニ關聯シテ地方稅タル營業稅、雜種稅、家屋稅及戶數割等ノ整理又ハ特別所得稅附加稅ノ要否等ニ對シ研究ヲ要スル事項多シト雖モ此等ハ地方稅審議ノ際ニ之ヲ讓ルコト

特別所得稅ノ可否

可トスル點

一　所得稅ハ所得ニ課スルモノナリト雖モ其ノ所得ノ種類ニ依リテ擔稅力ヲ異ニス卽チ資產所得ハ最モ擔稅力强ク資產勤勞共働所得之ニ次キ勤勞所得ハ其ノ力最モ弱シ故ニ前二者ニ對シテハ一般所得稅ノ外ニ尙特別所得稅ヲ課シ勤勞所得トノ權衡ヲ保タシムルノ要アルコト但シ資產所得ト資產勤勞共働所得トノ間ニモ亦稅率ニ區分ヲ設ケ此ノ兩者間ノ權衡ヲ圖ルコトヲ要ス

（註）現行所得稅法第十五條ニ於テ既ニ勤勞所得ニ對シ二割ノ控除ヲ爲シ此等ノ權衡ヲ圖リ居ルヲ以テ本項ノ必要ナシトノ論アランモ現行法ニ依ル勤勞所得ノ割引ハ尙不足ナルノミナラス小額所得者ニ限ラレ居ルヲ以テ權衡維持上現行法ノ規定ニテハ不十分ナリ

二　資產所得及資產勤勞共働所得ハ土地所得又ハ營業所得ノミニ止マラス然ルニ現行稅法ニ於テハ此等兩所得ニ對シテノミ地租又ハ營業稅ヲ課シ其ノ他ノ種々ナル所得ニ對シテ何等課稅ヲ爲ササルハ權衡ヲ失ス故ニ各種ノ所得ヲ網羅

スル特別所得税ヲ起シテ課税ノ均衡ヲ圖ルノ要アルコト

三　地租及營業税ハ所謂外形的標準ヲ以テ課税標準トスルカ故ニ其ノ結果ハ農業者ト營業者トノ間又ハ各農業者及各營業者間ニ課税ノ衡平ヲ失スル虞アリ故ニ此ノ兩税ヲ廢止シ農工商等ヲ通シ凡テ一律ニ所得ヲ課税標準トスル特別所得税ヲ起シ此等ノ不權衡ヲ矯正スルヲ可トスルコト

四　一般財産税ハ財産價格其ノモノヲ標準トシテ課税シ所得ノ多少ヲ顧ミサルカ故ニ動モスレハ元本ヲ侵蝕スルノ虞アルノミナラス事實上不動産ハ比較的重課セラルルノ虞アリ之ニ反シ特別所得税ニアリテハ大體ニ於テ如此弊ナキコト

否トスル點

一　特別所得税ハ所得ヲ目的トシテ課税スルモノナルカ故ニ所得ヲ生セサル財産ニシテ而カモ其ノ利用ノ如何ニ依リテハ所得ヲ生シ得ヘキモノニモ課税シ得サルコト

二　土地其ノ他ノ自然增價所謂不勞價値增加ニ對シテ課税シ得サルコト

三　各種財産及營業等ニ付キ悉ク其ノ所得ヲ各別ニ調査スルハ頗ル困難ナルノミナラス特別所得税ハ一般所得税ト重複課税セラルルカ如キ形トナリ納税者ニ負擔過重ノ感ヲ起サシメ從テ所得ヲ隱蔽スルノ傾向アルコト

四　所得實額ノ調査困難ニシテ到底精確ヲ期シ難キニ拘ラス特別所得税並一般所得税モ同一調査材料ニ依リテ課税スルトキハ愈々其ノ不權衡ヲ擴大スルノ虞アルコト

五　現行地租及營業税ノ納期ヲ總テ合併シテ一般所得税ト共ニ徵收スルコトトナルノ結果國庫ノ歲入ヲ年度ノ後半ニ偏

重セシメ歲計上種々ノ不便ヲ生スルコト

（別記）

特別所得税所得金額税額調

種別	所得金額	税率	税額	備考
不動産所得税	九六四、一五三円	百分ノ五	四八、二〇七、六五〇円	
資本利子所得税	四七九、九二四	百分ノ五	二三、九九六、二〇五	
營業所得税	一、九二三、八五四	百分ノ三	五七、六八五、六二〇	
計	三、三六六、九三一		一二九、八九九、四七五	

備考

計算内譯左ノ通

一　土地、家屋其ノ他築造物ノ所得金額税額調

種目	所得金額	税額	備考
土地	六五九、七六一、〇〇〇円	三、九八八、〇五〇円	所得金額内譯別紙ノ通リ
家屋其ノ他ノ築造物	三〇四、三九二、〇〇〇	一五、二二九、六〇〇	同上
計	九六四、一五三、〇〇〇	四八、二〇七、六五〇	税率百分ノ五

イ　土地賃貸料及所得金額調

種目	段別	賃貸料	備考
田	二、九二二、五七五反	七四二、三三四、一七五円	（主税局調査ノ小作料段當全國平均一石〇一升六合此ノ小作料合計二九、六九三、三六七石米價一石二圓ヲ以テ計算ス）
畑	二、五〇一、七八四、九	二一五、七七八、九五〇	（同主税局調査ノ小作料段當全國平均三斗四升五合（玄米ニ換算）此ノ小作料合計八、六三一、一五六石以下前同上）

宅地	三九三、一三五●七	九三、七五八、〇五九	計算ノ基礎別紙ノ通リ	
鹽田	五、六三〇●四	三、一五三、〇二四	一段歩八百圓ヲ以テ賣買價格トシ(地價ノ二十五倍)財産價額合計四五、〇四三、二〇〇圓利廻七朱ヲ以テ賃貸料トス	
鑛泉地	三●三	一〇三、九五〇	一坪千五百圓ヲ以テ賣買價格トシ(地價ノ二十倍)財産價額合計一、四八五、〇〇〇圓以下前同上	
池沼	一三、六八七●〇	一七七、六一八	一段歩二十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價額合計二、五三七、四〇〇圓以下前同上	
山林	八、〇四八、八八九●〇	一二二、六八四、四四六	一段歩二十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價額合計一、六〇九、七七七、八〇〇圓以下前同上	
牧場	五〇、九六五●八	三五六、七六〇	一段歩十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價額合計五、〇九六、五八〇圓以下前同上	
原野	一、三三六、五四五●〇	九、三五五、八一五	一段歩十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價額合計一三、六五四、五〇〇圓以下前同上	
雜種地	一四、〇三九●九	四四一、九四一	一段歩四十五圓ヲ以テ賣買價格トシ(地價ノ約五倍)財産價額合計六、三一三、四五五圓以下前同上	
計	一五、二八六、二四六●五	一、一七八、一四四、七三八		
右ノ内所得二百圓以上ヲ有スル者ノ取得スル賃貸料所得金額		八二四、七〇一、三一七	總賃貸料ノ七割ヲ以テ二百圓以上所得アル者ノ取得スル分ト推定ス	
		六五九、七六一、〇五四	所得金額ハ賃貸料百圓ニ付八十圓ト推算ス	

備考

一 本表ノ段別ハ大正九年一月一日現在ニ依リ調査ス

ロ 宅地賃貸料調

區分	四十三年ノ坪數	同上ノ賃貸價格	一坪當賃貸價格	四十三年ニ對スル最近ノ騰貴割合	最近ニ於ケル一坪當賃貸價格
市街宅地	八〇、三三六、七七五坪	三六、五二四、六六四円	四五五圓	二倍二割	一、〇〇〇圓
郡村宅地	一、〇七一、六〇四、六五八	三五、三八二、七六〇	〇三三	一倍七割	〇五六
計	一、一五一、九四一、四三三	七一、九〇七、四二四			

大正九年一月一日現在坪數一、一八〇、〇〇七、一〇〇坪四十三年ニ對スル大正九年坪數ノ增加割合百分ノ二、四三

區分	四十三年ノ坪數	大正九年ノ坪數(即チ增加割合ヲ乘シタルモノ)	内自己居住用見積坪數	差引課稅坪數	一坪當賃貸價格	總賃貸價格
市街宅地	八〇、三三六、七七五坪	八二、三六二、四四九坪	一六、四七二、四九坪	六五、八八九、九九九坪	一、〇〇〇圓	六五、八八九、九九九円
郡村宅地	一、〇七一、六〇四、六五八	一、〇九七、六四四、六五一	六〇〇、〇〇〇、〇〇〇	四九七、六四四、六五一	〇五六	二七、八六八、一〇〇
計						九三、七五八、〇五九

備考

一 四十三年ノ坪數竝賃貸價格ハ宅地地價修正ノ際ニ於ケル大藏省調査ニ依ル

二 四十三年ニ對スル最近ノ騰貴割合ハ市街宅地ニ在リテハ日本銀行調査ノ四十三年對大正七年ノ物價指數ノ騰貴割合ニ依リ算出シ郡村宅地ハ右ヨリ五割ヲ減シテ算出セリ

三 自己居住用見積坪數ハ市街宅地ニ在リテハ二割、郡村宅地ニ在リテハ農業總戸數約五百萬戸ト推定シ之ニ一戸當見積坪數百二十坪ヲ乘シテ計算セリ

ハ 家屋其ノ他ノ築造物ノ賃貸價格及所得金額調

區別	賃貸價格	所得金額	備考
家屋	三八四、八三三、六四八円	二六九、三七六、五五四円	市制地ノ戸數三六二、八〇七戸一戸當(地代ヲ除キタル)賃貸料年二四〇圓ト見積リ此ノ賃貸料合計四二八、三六六、八四四圓市制地以外ノ戸數八、二〇七、八〇九戸内農業戸數約五百萬戸ト見積リ之ヲ控除シタル戸數三〇七、八〇九戸之ニ一戸當(地代ヲ除キタル)見積賃貸料年三六圓ヲ乘シタル金額二五、四八一、三四四圓賃貸料總計四九、七四八、〇六八圓内納稅資格ニ達セサルモノヲ三割ト見積リ之ヲ控除シタルモノトス所得金額ハ賃貸料百圓ニ付七十圓ト推算ス

個人	倉庫	四八三、三五七	三三八、二四九
	工場	七、三三五、五〇〇	五、〇五七、八五〇
	築造物	七三、五五〇	五〇五、七五五
法人	家屋其ノ他ノ築造物	四二、五九〇、一二三	二九、一二三、〇八六
計		四三四、八四五、一七八	三〇四、三九八、六二四

備考

建物賃貸價格ハ大正九年營業税決定額ニ依リ調査ス

倉庫ノ營業税ヲ課セラレタル倉庫業建物賃貸價格七一九、一八四圓中土地及店舗ニ對スル分ヲ三割ト見積リ之ヲ控除シタル殘七割五〇三、四九八圓ヲ倉庫ノミノ分トシ之ニ營業者以外ノ分ヲ二割ト見積リ加算シタル金額六〇四、二七二圓ヨリ納税資格ニ達セサルモノヲ内二割ト見積リ控除シタルモノトス所得金額ハ賃貸料百圓ニ付七十圓ト推算ス

工場ノ營業税ヲ課セラレタル製造業建物賃貸價格二五〇、〇三三、二二九圓中土地及店舗ニ對スル分ヲ五割ト見積リ之レヲ控除シタル殘五割七、五六、五六四圓ヲ工場ノミノ分トシ之ニ營業者以外ノ分ヲ二割ト見積リ加算シタル金額九、〇三二、八七二圓ヨリ納税資格ニ達セサルモノヲ内二割ト見積リ控除シタルモノトス所得金額ハ賃貸料百圓ニ付七十圓ト推算ス

築造物ハ工場ノ一割ト推定セリ

二　資本利子税概算額調

種類	利子額	備考
貸金ノ利子（營業）	四〇、二一〇、八六一円	大正八年分營業税課税標準タル金錢貸付業運轉資本金額三三五、〇九〇、五一五圓ニ對シ利率一割二分ヲ乘シテ算出ス
同（非營業）	四四、四八八、一三〇	大正八年分第三種所得種類別表ノ貸金預金其他利子額四六、八二九、六二一圓ノ内一割ハ銀行預金及所得二百圓未滿ノ者ノ取得スル利子ト看做シ之ヲ控除シテ算出ス
物品貸付料（營業）	八三三、七三三	大正八年分營業税課税標準タル物品貸付業運轉資本金額六、九三九、四三四圓ニ對シ一割二分ヲ乘シテ算出ス
社債及公債（國債以外）ノ利子	五二、〇八九、七七三	大正八年度第二種所得税額表ニ依ル
銀行定期預金ノ利子	三三〇、〇五四、六二七	大正八年一月現在銀行定期預金高三、三八五、四五五、八二一圓ニ對シ利率六分五厘ヲ乘シテ算出ス（預金高ハ銀行局編纂ニ係ル全國銀行貸借對照表ニ依ル以下同シ）
銀行特別當座預金ノ利子	五七、四六五、〇一六	大正八年一月現在銀行特別當座預金高一、二三四、五六〇、〇〇二圓ニ對シ日歩一錢四厘トシテ算出ス
銀行當座預金ノ利子	六三、六〇九、二三〇	大正八年一月現在銀行當座預金高一、四五二、二五、三三三圓ニ對シ日歩一錢二厘トシテ算出ス
割引發行ニ係ル公債、社債ノ割引料	一、一七三、七三五	日本興業銀行調査ニ係ル全國公債社債明細表ニ依リ推算ス（償還シタル分ニ對スル割引料トス）
合計	四七九、九二四、〇九四	税額三、九九六、二〇五圓税率百分ノ五

三　營業所得金額及税額調

區分		所得金額	摘要
商工業	法人	一、二七四、五二一	法人ノ分ハ大正八年分純益金ヲ基礎トシ拂込資本ノ割合ヲ以テ各業ニ之ヲ按分シタリ
	個人	四六〇、八五三	
鑛業	法人	一四〇、七四三	
	個人	五、四二三	
原始産業	法人	六、七五〇	個人ノ分ハ大正八年分ノ各業每ノ所得決定高ニ對シ四百圓以上五百圓未滿ノ者ノ所得見積千分ノ三十八（大正七年ノ改正實蹟ニ依ル）ヲ加算シタル金額ナリ
	個人	三四、五七四	税額七、六六五、六二四圓税率百分ノ三
合計	法人	一、四二二、〇〇四	
	個人	五〇〇、八五〇	
	計	一、九二二、八五四	

第三　案

一般所得税ヲ中樞トシ之ニ配スルニ現行地租營業税ヲ修正シテ存續セシメ尙土地營業税トノ權衡上建物税及資本利子税ヲ創設スルコト

説明

直接國税ノ體系ヲ如何ニスヘキカハ重大ナル問題ナリト雖應能課税ノ原則ニ從ヒ各人ノ全所得ヲ課税標準トスル一般所得

稅ヲ以テ其ノ中心ト爲スヘキコトニ付テハ理論上ニ於テモ亦各國ノ立法例ニ鑑ミルモ殆ト疑問ノ餘地ナキ所ナリ然レトモ一般所得稅ノミヲ以テシテハ未タ完全ニ其ノ目的ヲ達成シ能ハサルヲ以テ之レカ補完稅トシテ如何ナル租稅ヲ設クルヲ適當トスヘキカハ重要ナル研究問題ナリトス而シテ一般所得稅ノ及ハサル所トシテ擧クヘキ重要ナル事項ハ左ノ二點ニアリ

第一　各人ノ純收入ハ事實上之ヲ完全ニ調査スルコト困難ナルヲ以テ純收入ヲ課稅標準トスル一般所得稅ノミニテハ動モスレハ負擔ノ公平ヲ失スルノ虞アリ

第二　各種ノ所得ハ其ノ源泉カ資產ナルカ又ハ勤勞ナルカニ依リ擔稅力ヲ異ニスルハ疑ナキ所ナリ然ルニ一般所得稅ノミヲ以テシテハ充分ニ之ヲ調節スルコト能ハス

故ニ之レカ補充トシテ一般所得稅ニ對立スヘキ租稅ハ最モ善ク以上ノ缺點ヲ補フニ足ルヘキ性質ヲ具フルモノタルコトヲ要ス

今現行ノ地租及營業稅ヲ全廢シ財產稅ヲ創設スヘシトノ說ニ付キ之ヲ考フルニ一般財產稅ハ財產其ノモノヲ課稅標準トスルカ故ニ直接所得ヲ調査セムトシテ及ハサル點ヲ補充スルノ趣旨ト資產所得ニ重課スルノ趣旨トヲ兼備スルカ如シト雖其ノ調査周到ヲ期シ難キノ結果比較的不動產ニ重課セラルルノ傾向アルノミナラス其ノ所得ノ有無ヲ問ハス又ハ其ノ程度ヲ異ニスルニ拘ラス之ヲ同一ニ律セムトスルノ點ニ於テ亦却テ不公平ナル結果ヲ生スルノ虞アリ且一面財產稅ヲ起シテ地租及營業稅ヲ廢止スヘシトスル理由ハ主トシテ此ノ兩稅カ其ノ擔稅力ニ伴ハストノ點ニアルニ拘ラス擔稅力ノ表現タル所得ノ如何ヲ無視シテ財產價額ノミヲ課稅ノ標準トシ以テ地租及營業稅ニ代ヘムトスルハ其ノ理由徹底セスト認ム

又現行ノ地租及營業稅ヲ廢シテ特別所得稅ヲ新設スヘシトノ說ニ付キ考フルニ特別所得稅ハ各種ノ所得ニ於ケル負擔力ノ相違ヲ斟酌スルニ適シ一般所得稅ノ第二ノ缺點ヲ補充スルニ足ルカ如シト雖其ノ第一ノ缺點ヲ補充スルノ目的ニ副ハス加之一般所得稅ト等シク調査困難ナル純收入ヲ課稅標準トスルモノナルカ故ニ一般所得稅ノ缺點ヲ益々增大セシムルノ結果ヲ生ス

以上ノ如クニシテ一般財產及特別所得稅ハ何レモ一般所得稅ノ補充トシテ理想的ノモノト認メ難シ故ニ之レヲ創設セムカ爲ニ既ニ行ハルルコト久シキ地租及營業稅ヲ俄ニ廢止シ國民經濟ニ變動ヲ與フルカ如キハ大ニ考慮ヲ要スト認ム

現行地租及營業稅ハ固ヨリ其ノ缺點トシテ數フヘキモノ少ナカラスト雖施行後既ニ數十年ヲ經過シ官民其ノ取扱ニ慣熟セルノ特長アルノミナラス其ノ表現的課稅標準ヲ以テスルノ點ニ於テ一般所得稅ノ短所ヲ補充スルニ適シ資產若ハ資產勤勞共働ノ所得ニ重課スルノ點ニ於テモ亦一般所得稅ノ及ハサル所ヲ補フニ足ルヘキ特質ヲ有ス故ニ之ヲ相當ニ修補シテ其ノ缺點ヲ矯正スルコトニ努メ同時ニ土地及營業以外ニ於テ尙相當擔稅力ヲ有スト認メラルル建物及貸付資本ニ重課スルノ目的ヲ以テ建物稅及資本利子稅ヲ創設シ一般所得稅ト相俟テ負擔ノ公平ヲ圖ルハ本邦直接稅ノ組織ヲ完全ナラシムルノ方法トシテ適當ノ策ナリト認ム其ノ要領ヲ擧クレハ左ノ如シ

地租制度改正ノ必要

法定地價ハ明治八年改租以來局部的地價ノ修正ヲ爲シタルモノノ外大體ニ於テ變動ナシ然ルニ爾後ニ於ケル經濟事情ノ變遷、交通機關ノ發達、農事ノ改良進步等其ノ他各般ノ狀況ニ依リ土地ノ價格ハ著シク變動ヲ來シ殊ニ宅地ニ在リテハ其ノ變動甚シキモノアリ而シテ宅地ニ付テハ明治四十三年ニ於テ地價修正ヲ行ヒタルモ其ノ他ノ土地ニ付テハ地價ノ修正ヲ爲サス以テ今日ニ及ヘリ去レハ田畑ノ現行法定地價ハ其ノ收穫ヨリ之ヲ見ルモ將又其ノ賃貸價格ヨリ之ヲ見ルモ各地ノ問著

シク不權衡ヲ來セルハ疑ナキ所ナリ故ニ之カ課稅ノ均衡ヲ圖ラントセハ根本的地價ノ修正ヲ爲ササル可カラス

地價修正ヲ實行スルニ付テハ各種ノ方法アランモ大體ニ於テ左ノ三種ノ方法ニ歸著スヘシ

一　賣買價格主義

土地ノ賣買價格ヲ以テ地租ノ課稅標準トナスモノ

二　收穫主義

土地ノ收穫價格ヨリ公課耕作費等ヲ控除シタル純益ヲ相當金利ニテ還元シタル價格ヲ以テ地租ノ課稅標準トナスモノ

三　賃貸價格主義

土地ノ小作料卽チ賃貸價格ヲ以テ地租ノ課稅標準ト爲スモノ

前揭ノ方法ニ付テハ各々利害得失アリト雖就中賃貸價格主義ニ依ルヲ最適當ナリト認ム而シテ其ノ何レニ依ルモ地價修正ヲ行ハントセハ其ノ經費田畑ノミニテ約四五千萬圓ヲ要ス

田畑ノ地價修正ヲ行フト同時ニ宅地ニ付テモ亦地價修正ノ要アルヘシト雖右ハ明治四十三年ニ於テ既ニ之ヲ修正シ其ノ後ノ經過年月比較的短キヲ以テ此ノ際地價修正ヲ見合スモ可ナルヘシ然レトモ其ノ當時ニ於テ付シタル制限ハ之ヲ撤廢スルコトヲ要ス此ノ制限撤廢ニ付テハ格別經費ヲ要セスシテ百九十萬圓ノ收入ヲ得ヘシ

（註）宅地地價ノ修正ハ賃貸價格ノ十倍ヲ以テ地價トスルヲ原則トセシモ賃貸價格ノ十倍カ現在地價ニ對シ市街宅地ニ在リテハ十八倍ヲ郡村宅地ニ在リテハ七倍二割ヲ超ユルトキハ其ノ十八倍若ハ七倍二割ニ制限シ之ヲ以テ地價トセリ

山林原野等ニ付テモ亦現行法定地價ノ不權衡タルコト蓋シ田畑及宅地以上ナルヘシ故ニ山林原野等モ亦地價修正ヲ爲スコトヲ要スルハ勿論ナルモ山林原野等ニ付テハ其ノ實行田畑ヨリモ一層困難ナルノミナラス土地臺帳登錄面積ニ誤謬甚シカルヘキヲ以テ地價修正ヲ爲スニ於テハ同時ニ地盤ノ測量ヲ爲スコトヲ要スヘシ

以上述フル事由ニ依リ此ノ際地價修正ヲ實行スルモ經濟事情ノ變遷、交通機關ノ發達、農事ノ改良進步其ノ他各般ノ狀況ニ依リ爾後數年ノ後ニ於テハ再地價修正ヲ爲スヲ要スルニ至ルヘシ尤モ五六年目每ニ地價ノ修正ヲ爲ストセハ可ナルヘキモ其ノ一回ノ經費田畑ノミニテモ約四五千萬圓ヲ要シ始ント一ケ年分田畑ノ地租額ニ近キ經費ヲ要スヘキコトトナルヘシ

右述フル如ク法定地價ノ制度ハ土地價格ノ變動ニ隨テ其ノ修正ヲ爲スニ非サレハ課稅ノ權衡ヲ保持スル能ハサルニ拘ラス之レカ修正ニハ多大ノ手數竝ニ經費ヲ要シ實行殆ト不可能ナリ然ルニ賃貸價格ハ土地價格ノ變動ニ順應シテ異動シ且調査比較的容易ナルト及地租ハ本來土地ノ價格ヨリモ寧ロ收益稅トシテ土地ノ收益タル賃貸價格ニ課稅スルヲ適當ト認メラルルカ故ニ法定地價ニ代フルニ賃貸價格ヲ以テセハ地價修正等ノ煩勞ヲ要セスシテ而モ能ク土地ニ對スル課稅ノ權衡ヲ期シ得ヘシ依テ賃貸價格ヲ以テ課稅標準トシ尙左記各項ノ通現行地租制度ヲ改正セントス

地租制度改正要領

第一　納稅義務者

土地臺帳ニ登錄セラレタル記名者

（註）事實上ノ所有者ハ異ナルモ徵稅上ニ付テハ臺帳記名者トス

第二　課稅スヘキ土地

現行地租條例ニ於ケル有租地トス

（註）即（第一類）田、畑、宅地、鹽田、鑛泉地
（第二類）池沼、山林、牧場、原野、雜種地

第三　課税外ト爲スヘキ土地
公用若ハ公共ノ用ニ供スル土地又ハ墳墓地、用悪水路、溜池、堤塘、井溝、鐵道用地、軌道用地、運河用地、保安林等

第四　課税標準
一　課税標準ハ賃貸價格ニ依ル
二　賃貸價格ハ前年ノ實蹟ニ依ル但シ賃貸ニ付セサルモノハ之ヲ評定ス
（註）賃貸ニ付セサルモノノ内ニハ無償貸付、自己使用及自他共ニ使用セサルモノヲ含ム

第五　課税標準ノ調査決定
（註）大體現行所得税法ノ手續ニ準スルコト即チ左ノ通
（一）一月一日現在ニ於ケル土地所有者ハ毎年一月中ニ於テ前年ノ賃貸價格ヲ申告スヘキコト但シ前年ニ於テ賃貸ニ付セサルモノハ類地ニ比準シテ申告スルコト
（二）課税賃貸價格ハ税務署ニ於テ右申告ヲ基礎トシ申告ナキモノ又ハ申告不正ト認ムルモノハ相當資料ニ依リ其ノ調査ヲ爲スコト
（三）課税賃貸價格ノ決定ニ付テハ特ニ設クル調査委員會ニ付議シ其ノ決議ニ依リ政府之ヲ決定スルコト

第六　地租ノ減免
現行地租條例ニ於ケル開墾、荒地又ハ耕地整理法ニ依ル整理地等ニ對スル地租ノ輕減又ハ免除ニ關スル制度ノ趣旨ハ之ヲ存續シ當該地ヨリ收入スル賃貸料ノ全部又ハ一部ヲ一定期間課税標準タル賃貸價格中ヨリ控除スルコト

第七　税率
賃貸價格百分ノ四ノ比例税率トス

第八　納期ハ現行ノ通リトスルコト即チ左ノ如シ
宅地　七月、翌年一月
田　翌年一月、二月、三月、五月
其他　九月、十一月

本案ノ可否

可トスル點
一　現行法定地價制度ノ如ク一定ノ期間經過後多大ノ經費ヲ投シテ之ヲ修正スルノ要ナク而カモ各地間ノ權衡ヲ保持シ得ヘキコト
二　地租ヲシテ屈伸力ヲ生セシムルコト
三　年ノ豐凶、米價ノ高低ニ順應シ納税者ノ負擔力ニ適應シタル課税ヲ爲シ得ルコト

否トスル點

一　事實上各筆毎ニ賃貸價格ノ精確ナル決定困難ナルカ故大小地主間又ハ一部所有權移轉等ノ場合ニ不權衡ヲ來タスノ虞アルコト

二　田、畑、宅地等ノ賃貸價格ハ假リニ調査シ得ルトスルモ山林、原野等ニ至リテハ其ノ調査一層困難ナルコト

土地賃貸料及税額調

種目	段別	賃貸料	備考
田	二、九二三、五七五、五段	七四二、三三四、一五円	主税局調査ノ小作料段當全國平均一石〇一升六合此ノ小作料合計二九、六九三、三六七石ニ來價一石二十五圓ヲ以テ計算ス
畑	二、五〇一、七八四、九	二二五、七七八、九五〇	主税局調査ノ小作料段當全國平均三斗四升五合(玄米ニ換算)此ノ小作料合計八、六三一、一五六石以下前同上
宅地	三九三、一三五、七	一四三、八三〇、五四九	別紙内譯ノ通
鹽田	五、六三〇、四	三、一五三、〇一四	一段歩八百圓ヲ以テ賣買價格トシ(地價ノ二十五倍)財産價格合計四五、〇四三、二〇〇圓利廻七朱ヲ以テ賃貸料トス
鑛泉地	三、三	一〇三、九五〇	一坪千五百圓ヲ以テ賣買價格トシ(地價ノ二十倍)財産價格合計一、四八五、〇〇〇圓以下前同上
池沼	三、六七、〇	一七、六一八	一段歩二十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價格合計三、五三七、四〇〇圓以下前同上
山林	八、〇四八、八八九、〇	一二、六八四、四四六	一段歩二十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價格合計一、六〇九、七七七、八〇〇圓以下前同上
牧場	五〇、九六五、八	三五六、七六〇	一段歩十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價格合計五、〇九六、五八〇圓以下前同上
原野	一、三三六、五四五、〇	九、三五五、八一五	一段歩十圓ヲ以テ賣買價格トシ財産價格合計一三、六五四、五〇〇圓以下前同上
雜種地	一四、〇三九、九	四四一、九四一	一段歩四十五圓ヲ以テ賣買價格トシ(地價ノ約五倍)財産價格合計六、三三、四五五圓以下前同上
計	一五、二八六、二四六、五	一、三三八、二七、三八	税額九、二六、六九圓　税率百分ノ四

備考

一　本表ノ段別ハ大正九年一月一日現在ニ依リ調査ス

二　米價ハ現今ノ相場ヲ參照シテ一石二十五圓ト推定セリ

三　鹽田以下價格ニ對スル賃貸料ノ割合ヲ利廻七朱トシテ計算セルハ定期預金利子等ヨリ推定セリ

宅地賃貸料調

區分	四十三年ノ坪數	同上ノ賃貸價格	一坪當賃貸價格	四十三年ニ對スル最近ノ騰貴割合	最近ニ於ケル一坪當賃貸價格
市街宅地	八〇、三三六、七五坪	三六、五三四、六六四円	四五五円	二倍二割	一、〇〇〇厘
郡村宅地	一、〇七一、六〇四、六五八	三五、三八二、七六〇	三三	一倍七割	〇五六
計	一、一五一、九四一、四三	七一、九〇七、四二四			

大正九年一月一日現在坪數一、一八〇、〇〇七、一〇〇坪

四十三年ニ對スル大正九年坪數ノ增加割合百分ノ二、四三

區分	四十三年ノ坪數	大正九年ノ坪數(即チ增加割ヲ乘ジタルモノ)	一坪當賃貸價格	總賃貸價格
市街宅地	八〇、三三六、七五坪	八二、三六二、四四九坪	一、〇〇〇厘	八二、三六二、四四九円
郡村宅地	一、〇七一、六〇四、六五八	一、〇九七、六〇四、六五一	〇五六	六一、四六八、一〇〇
計				一四三、八三〇、五四九

備考

一　四十三年ノ坪數竝賃貸價格ハ宅地地價修正ノ際ニ於ケル大藏省調査ニ依ル

二　四十三年ニ對スル最近ノ騰貴割合ハ市街宅地ニ在リテハ日本銀行調査ノ四十三年對大正七年ノ物價指數ノ騰貴割合ニ依リ算出シ郡村宅地ハ右ヨリ五割ヲ減シテ算出セリ

現行營業稅ハ主トシテ外形標準ニ依リ課稅スルカ故ニ其ノ課稅ハ必スシモ各人ノ所得ニ伴ハス時ニ或ハ損失アルモ尙課稅セラルルカ如キ結果ヲ生シ且其ノ申告誠實ヲ缺キ又ハ調査精確ヲ期シ難キカ故ニ各營業者ノ負擔權衡ヲ得サルコトアリ去リトテ徹底的ニ此ノ調査ヲ行ハントセハ營業者ノ迷惑ヲ來スコト多ク從テ動モスレハ官民相互ノ間ニ於テ紛爭ヲ釀スノ虞アリ故ニ此等ノ弊害ヲ除去スルコトヲ以テ修正ノ眼目ト爲ササルヘカラス然レトモ營業稅ハ所得ニ伴ハストノ非難ヲ避ケントセハ結局各營業ノ所得ヲ課稅標準トスルノ外ナカラン如斯スルトキハ事實上所得稅ニ變化スルモノニシテ營業稅トシテノ改善ニ非ス之レ全ク別箇ノ議論ナリ兎モ角如斯スルトキハ營業稅ハ所得稅ニ於ケル調査不充分ニ伴フ不權衡ヲ補完スルノ主要目的ヲ失フコトトナルヲ以テ原則トシテハ依然外形標準ヲ採リ唯其ノ業體ニ應シ成ルヘク所得ヲ推定スルニ適當ト認ムルモノ即チ營業ノ大小又ハ收入ノ多寡ヲ最モ能ク代表スト認ムルモノヲ課稅標準トシテ選擇スルコトトシ同時ニ其ノ種目ヲ成ルヘク少ナカラシメ以テ調査ノ簡便ヲ圖ルヲ要ス如上ノ趣旨ニ依リ現行法ニ對シ大體左ノ如キ修正ヲ加フルコト

第一　課稅營業

一　現行法ノ課稅營業中金錢貸付業及物品貸付業ニ對シテハ資本利子稅ヲ課スルコトトシ營業稅ヨリハ之ヲ削除スルコト

（註）營業ニ非サル金錢、物品貸付ノ收益ニ對シテハ資本利子稅トシテ課稅ス然ルニ營業ナルトキハ營業稅ヲ課スルトセハ營業稅ノ稅率ハ資本利子稅ヨリ輕キヲ以テ此ノ兩者間ノ權衡ヲ失ス殊ニ金錢、物品貸付行爲ノ營業ナリヤ非營業ナリヤハ事實上容易ニ區分シ難ク又金錢、物品貸付ノ收益ハ事實上大部分資產收入ニシテ他ノ普通營業ト其ノ內容ヲ異ニス故ニ此ノ點ヨリモ亦營業稅ヨリ除外スルノ要アリ

二　現行制度ニ於テ營業稅法以外ニ於テ特殊ノ營業稅ヲ課セラルル賣藥製造業ヲモ本法ノ製造業中ニ包含セシメテ之ヲ統一シ賣藥營業稅ハ之ヲ廢止スルコト

第二　課稅標準

一　建物賃貸價格ハ必スシモ營業ノ大小收入ノ多寡ヲ代表スルモノニアラサルヲ以テ原則トシテ課稅標準中ヨリ之ヲ削除スルコト但シ左記ノ營業ニ付テハ例外トシテ現行ノ通存置スルコト

席貸業、料理店業、旅人宿業

二　前項但書ニ依リ建物賃貸價格ヲ存置スル營業ニアリテモ現行法ノ如ク建物賃貸價格及從業者ノミヲ課稅標準トセス尙其ノ課稅標準中ニ收入金ヲ加フルコト

三　建物賃貸價格ヲ削除スルノ結果從來之ヲ主タル課稅標準ト爲シタル倉庫業ニアリテハ製造業運送業等ノ如ク其ノ課稅標準中ニ資本金ヲ加ヘ之ヲ主タル課稅標準トスルコト

四　物品販賣業ノ賣上金ハ現行法ニ於テハ卸賣小賣共ニ之ヲ甲乙ニ區分シテ稅率ヲ定メアルモ其ノ種目區分中不適當ト認ムルモノアルヲ以テ之ヲ相當整理スルト同時ニ卸賣ニ付テハ甲乙丙ノ三種ニ分チ尙卸賣ト小賣トノ稅率ノ間差ヲ少クスルコト

五　現行法ニ於ケル資本金ノ計算方ハ簡單ニ失シ營業ノ實情ニ副ハサルノ感アルヲ以テ拂込資本金等ノ外ニ社債、借入金、銀行預金及保險責任準備金等ノ一部ヲ資本金トシテ計算スルコト

（註）其ノ算入スヘキ程度ハ自己資本ヲ以テスル純益步合ト借入資本ヲ以テスル純益步合トノ割合ヲ大體ノ標準トスル

コト

六　現行法ニ於テ製造業者ノ資本金額カ前年ノ資本金額ニ對シ十分ノ二以上增加セル場合ハ其ノ增加總額ニ對シ二年間之ヲ課稅標準ヨリ控除スルコトトナリ居ルモ之ヲ改メテ增加資本金額カ前年ノ資本金額ニ對シ五割ヲ超過スル場合ニ於テ其ノ超過額ノミヲ控除スルコト

（註）此ノ恩典ハ製造業ノミナルヲ以テ他業トノ權衡上廢止スルヲ可トスヘシ然レトモ沿革上之ヲ存置セサルヲ得ストセハ其ノ增加割合ノ二割ハ少キニ失スルヲ以テ之ヲ改メ且增加金額全部ヲ控除スルハ二割未滿ノ增加ヲ爲シタルモノヨリモ却テ其ノ課稅少キ結果トナリ不權衡ナルヲ以テ之ヲ改正スルノ要アリ

七　一般經濟界ノ變遷ニ依リ現行課稅最低限度ハ低キニ失スト認メラルルヲ以テ之ヲ別紙第一表ノ通變更スルコト

第三　課稅手續

一　課稅標準ノ調査ニ付テハ現行調査委員ノ外同業組合其ノ他各種ノ組合等ノ意見ヲ徵スルノ制度ヲ設ケ以テ直接納稅者トノ折衝ヲ少ナカラシムルコト

二　實地ニ付キ調査スルノ必要アル場合ハ成ルヘク高等官ヲ以テ之ヲ充ツルノ組織ト爲シ且祕密漏洩ニ對シ嚴格ナル制裁ヲ設クルコト

三　誠實ナル申告ヲ奬勵シ成ルヘク其ノ申告ヲ尊重スルノ方針ヲ採ルト同時ニ無申告者又ハ不正申告者ニ對シテハ相當嚴重ナル制裁規定ヲ設クルコト

第四　調査、決定、徵收、納期等

現行法ノ通リ但シ調査委員及審査委員等ノ制度ハ大體改正所得稅法ニ準シ之ヲ改ムルコト

第五　稅率

別紙第二表ノ通

第六　納期

現行通リ六月、十一月ノ二期トス

（別紙）

第一表　課稅標準種目及課稅最低限

業名		課稅標準 現行	課稅標準 改正	課稅最低限 現行	課稅最低限 改正
物品販賣	卸賣	甲乙	甲乙	賣上金二千圓	賣上金三千圓
	小賣	甲乙	甲乙丙		
	賃貸價格從業者	資本金	資本金		
銀行	賃貸價格從業者	資本金	資本金	—	—
保險	賃貸價格從業者	資本金	資本金	—	—

無盡	資本金	從業者	資本金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	—
製造	資本金	從業者	資本金 千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	三人
印刷	資本金	從業者	資本金 千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	三人
出版	資本金	從業者	資本金 千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	三人
寫眞	資本金	從業者	資本金 千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	三人
運送	資本金	從業者	資本金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	三人

運河	資本金	從業者	資本金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	—
橋梁	資本金	從業者	資本金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	—
船舶碇繫場	資本金	從業者	資本金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	—
貨物陸揚場	資本金	從業者	資本金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	—
倉庫	資本金	從業者	資本金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	—
鐵道	收入金	從業者	收入金
	賃貸價格	內職工勞役者	—
請負	請負金	從業者	請負金 二千圓
	賃貸價格	內職工勞役者	三千圓
席貸	收入金	從業者	收入金
	賃貸價格	從業者	賃貸價格 百圓
	賃貸價格	從業者	賃貸價格 二百圓

（別紙）

第二表　税率及税額調

課税標準	内訳	課税標準額	税率	税額
旅人宿	賃貸価格	従業者四人	賃貸価格二百圓	報償金三百圓
旅人宿	賃貸価格収入金	従業者四人	賃貸価格二百圓	報償金三百圓
料理店	賃貸価格	従業者四人	賃貸価格二百圓	報償金三百圓
周旋	報償金	従業者二百圓	報償金二百圓	報償金三百圓
代理	報償金	従業者二百圓	報償金二百圓	報償金三百圓
仲立	報償金	従業者二百圓	報償金二百圓	報償金三百圓
問屋	報償金	従業者二百圓	報償金二百圓	報償金三百圓
信託	報償金	従業者二百圓	報償金二百圓	報償金三百圓

課税標準	内訳	課税標準額	税率	税額
賣上金	卸 甲	四、六一〇、一九一千円	萬分ノ五	二、三〇五、〇九五円
	卸 乙	一、五四三、四七八	同 一〇	一、五四三、四七八
	卸 丙	三、四九七、六〇六	同 一三	四、五四六、八八七
	小賣 甲	四三五、八一五	同 二〇	八七一、六三〇
	小賣 乙	一、〇四五、四六四	同 二六	二、七一八、二〇六
資本金	（銀行、保險、無盡）	二、〇五二、八三三	千分ノ二、五	五、一三二、〇八二
	（製造、印刷、出版）	一、八一八、三八〇	同 五	九、〇九一、九〇〇
	（倉庫）	四七、四四八	同 四	一八九、七九二
	（其ノ他）	四八六、五七〇	同 七	三、四〇五、九九〇
請負金	（請負）	一九三、七三四	同 三、五	六七八、〇六九
	（鐵道）	四〇、七一一	同 一五	六一〇、六六五
收入金	（席貸）	三、七六八	同 六	七六、六〇八
	（旅人宿、料理店）	二七、四九九	同 三、五	九六、二四六
報償金	（周旋、代理、仲立、問屋、信託）	二八、二八三	同 三、〇	三、五四八、四九〇
建物賃貸價格	（席貸）	一、三〇三	同 五五	七一、六六五
	（旅人宿）	二、五三〇	同 三五	八八、五五〇
	（料理店）	三、一三八	同 六〇	一八八、二八〇
從業者	內 從業者	一、一三四、八〇四	一人ニ付 二圓	二、二六九、六〇八
	職工勞役者（各業）	一、一〇〇、七九六	同 五十錢	六〇〇、三九八
合計				三八、〇三三、六三九

備考

課税標準額ハ大正八年分營業税ノ實蹟ヲ基礎トシテ調査セリ

第一　納税義務者

建物臺帳ニ登錄セラレタル所有者

（註）事實上ノ所有者ハ異ナルモ徵税上ニ於テハ臺帳記名者トス

第二　課税スヘキ建物

一　建物トハ住宅、工場、倉庫等一切ノ建物ヲ包含ス

（註）一、船渠、橋梁、窟倉等ヲ含マス

二、住宅ニハ附屬建物ハ勿論門塀ヲ、工場ニハ煙突ヲ含ム

二　用途ノ如何ニ拘ラス課税ス

（註）營業用ノモノニモ課税ス從テ形式上營業税ト重複スルモ元來課税ノ根據ヲ異ニスルヲ以テ已ムヲ得サルモノトス

三　普通建物ト稱セラルル程度ノモノトシ一時的建物ト認メラルルモノハ課税セス

第三　課税外ト爲スヘキ建物

公用又ハ公益ノ用ニ供スル建物及社寺、佛堂、祠宇等

第四　課税標準

一　課税標準ハ一構ヲ以テ賃貸價格ヲ定メアルモノ又ハ定ムルヲ適當ト認ムルモノハ一構ノ賃貸價格ニ依リ其ノ他ノモノハ建物一棟毎ノ賃貸價格ニ依ル但シ土地ノ賃貸料ヲ含マス

二　賃貸價格ハ前年ノ實蹟ニ依ル但シ賃貸ニ付セサルモノハ類似ノモノニ比準シテ之ヲ評定ス

（註）一、地租ト同樣課税ノ最低限ヲ設ケス

二、賃貸ニ付セサルモノノ内ニハ無償貸付、自己使用及自他共ニ使用セサルモノヲ含ム

第五　課税標準ノ調査決定

一　法律施行ノ際建物所有者ヨリ建物ノ所在、用途、構造、坪數ヲ申告セシメ之ヲ基礎トシテ建物臺帳ヲ調製スルコト爾後ノ新築、增築、滅失又ハ所有者ノ變更及其ノ他ノ異動ヲ生シタル場合ハ其ノ都度當該事項ヲ申告セシメ臺帳ヲ訂正シ置クコト

二　一月一日現在ニ於ケル建物所有者ハ毎年一月中ニ於テ前年ノ賃貸價格ヲ申告スヘキコト但シ前年ニ於テ賃貸ニ付セサルモノハ類似ノモノニ比準シテ申告スルコト

三　課税賃貸價格ハ税務署ニ於テ右申告ヲ基礎トシ申告ナキモノ又ハ申告不正ト認ムルモノハ相當資料ニ依リ其ノ調査ヲ爲スコト

四　課税賃貸價格ノ決定ニ付テハ調査委員會ニ付議シ其ノ決議ニ依リ政府之ヲ決定スルコト

（註）調査委員會ハ地租ノ調査委員會ト同一委員會トス

第六　建物税ノ減免

燒失倒壞ノ場合ハ課税ヲ減免スルコト

第七　税率

賃貸價格百分ノ三、五ノ比例稅率トス

第八　納期

第一期　七月

第二期　十月

建物稅ノ可否

可トスル點

一　地租及營業稅竝ニ資本利子稅等ノ權衡上本稅ヲ設クルノ必要アルコト

二　建物ハ表現的ニシテ調査容易ナルヲ以テ調査上ノ脫漏ニヨル課稅上ノ不公平ヲ避ケ得ヘキコト

否トスル點

一　本稅ヲ設クルトキハ地方財源ヲ奪フノ虞アルコト

二　建物其ノモノノ調査ハ容易ナルモ賃貸價格ノ調査甚ダ困難ニシテ不公平ヲ來ス虞アルコト

三　自己居住ノ用ニ供スルモノ及其ノ他賃貸ニ付セサルモノニ對シ課稅スルハ動モスレハ財產其モノヲ侵蝕スル嫌アルコト

建物賃貸價格及稅額調

區別		賃貸價格	備考
個人	家屋	八三八、三一四、八〇四円	市制地ノ戶數二、三六一、八〇七戶一戶當地代ヲ除キタル賃貸價格年二四〇圓ト見積リ此ノ賃貸價格計五四二、八三三、六〇〇圓市制地以外ノ戶數八、二〇七、八〇九戶一戶當地代ヲ除キタル賃貸價格年三六圓ト見積リ此ノ賃貸價格計二五、四八一、二四〇圓
	倉庫	六〇四、一九七	現行營業稅法ニ依リ營業稅ヲ課セラレタル倉庫業建物賃貸價格七一九、三六四圓中土地及店舗ニ對スル分ヲ三割ト見積リ之ヲ控除シタル殘七割五〇三、二八八圓ヲ倉庫ノミノ分トシ之ニ營業者以外ノ分ヲ其ノ二割ト見積リ之ニ加算シタルモノトス
	工場	九〇三、八七六	現行營業稅法ニ依リ營業稅ヲ課セラレタル製造業建物賃貸價格一五、〇五三、二二六圓中土地及店舗ニ對スル分ヲ五割ト見積リ之ヲ控除シタル殘五割七、五二六、五六四圓ヲ工場ノ分トシ之ニ營業者以外ノ分ヲ其ノ二割ト見積リ之ヲ加算シタルモノトス
法人	家屋倉庫等	四三、七七九、〇七七	營業稅ヲ課セラレタル法人ノ建物賃貸價格五一、五〇四、七九七圓中土地ノ分ヲ一割五分ト見積リ之ヲ控除シタルモノトス
工場			
計		八九一、七二九、九五四	稅額三、二一〇、五四八圓　稅率百分ノ三、五

資本利子稅

第一　納稅義務者

一　內國ニ於テ資本利子ヲ取得スル者

第二　課稅スヘキ利子

一　第一類

內國ニ於テ支拂ヲ受クル公債（國債ヲ除ク）社債ノ利子及割引料、銀行預金、信託金ノ利子又ハ法人ヨリ受クル利息

（註）第一類ニ屬スル利子ノ大部分ハ現行所得稅法第二種所得ト實質同一ナルヲ以テ重複ノ感アリ故ニ此ノ利子ニ對シ

（資本利子税ヲ課スル以上ハ現行税法第二種所得ヲ第三種所得ニ編入スルヲ可ト認ム

二　第二類

前號以外ノ利子　即チ金錢又ハ物品ノ貸付等ニ依ル利子又ハ使用料

第三　課税外ト爲スヘキ利子

一　法人ヨリ受クル利益記當

（註）法人ニ對シ既ニ地租、營業税、資本利子税ヲ課スルヲ以テ重複課税ヲ避クル趣旨ニ依リ之ヲ除外シタリ然シ尚議論ノ餘地アルヘシ

二　銀行ノ取得スル利子割引料等

（註）營業税ヲ課スルヲ以テ本税ヲ課セス

三　所得税法ニ於テ免税スル公共團體、公益法人及産業組合等ノ受クル利子

第四　課税標準

課税標準ハ收入利子額トス

第五　徴收又ハ調査決定

第一類ハ現行所得税法ノ第二種ニ準シテ徴收シ第二類ハ現行所得税法第三種ニ準シテ調査決定スルモノトス

第六　税率

利子金額百分ノ四、五ノ比例税率トス

第七　納期

第二類ハ第三種所得税ニ同シ

資本利子及税額調

種類		利子額	備考
貸金ノ利子（營業）		四〇、二〇、八六二円	（大正八年分營業税課税標準タル金錢貸付業運轉資本金額三三五、〇九〇、五一五圓ニ對シ利率一割二分ヲ乘シテ算出ス
同	（非營業）	四四、四八八、一三〇	（大正八年分第三種所得種類別表ノ貸金預金其ノ他ノ利子額四六、八二九、六二圓ノ内一割ハ銀行預金利子ト看做シテ之ヲ控除シテ算出ス
物品貸付料（營業）		八三、七三三	（大正八年分營業税課税標準タル物品貸付業運轉資本金額六、九三九、四三圓ニ對シ一割二分ヲ乘シテ算出ス
社債及公債（國債以外）ノ利子		五二、〇八九、七七三	大正八年度第二種所得税額表ニ依ル
銀行定期預金ノ利子		二二〇、〇五四、六二七	（大正八年一月一日現在銀行定期預金高三、三八五、四五五、八二圓ニ對シ利率六分五厘ヲ乘シテ算出ス
銀行特別當座預金ノ利子		五七、四六五、〇一六	（大正八年一月現在銀行特別當座預金高一、二二四、五六〇、〇〇二圓ニ對シ日歩一錢四厘トシテ算出ス
銀行當座預金利子		六三、六〇九、二二〇	（大正八年一月現在銀行當座預金高一、四五二、二五五、三〇三圓ニ對シ日歩一錢二厘トシテ算出ス
割引發行ニ係ル公債社債ノ割引料		一、一七三、七三五	（日本興業銀行調査ニ係ル全國公債社債明細表ニ依リ推算ス（償還シタル分ニ對スル割引料トス）
合計		四七九、九二四、〇九四	税額三、五六六、五八四圓税率百分ノ四、五

合計税額表

種別		課税標準額	税率	税額	備考
地租	賃貸料	一、三二八、二二七千円	百分ノ四	四九、二二六千円	
建物税	同	八九一、七三〇	同　三、五	三、二二〇	

資本利子税	利子 四七九、九二四	同 四、五	三、五九六
營業税	（別表）	（別表）	三八、〇三三
計			一三九、九六七

備考

現行地租（九年一月現在）　七四、一四〇千円

同營業税（九年分決定）　六四、五八一

計　一三八、七二一

税額分配表

種目	賃貸料	純益歩合	純益金額	按分税額	同上税額ヲ賃貸料ニテ除シタル率	同査定税率	徴税額	純益ニ對スル割合
土地	百萬円 一、三八	、八〇	百萬円 九八二	百萬円 四八、三	百分ノ 三、九三	百分ノ 四、〇	千円 四九、一二八	、〇五〇
建物	八九一	、七〇	六二四	三〇、七	二、四三	三、五	三、二一〇	、〇五〇
利子	四七九	、九〇	四三一	二一、二	四、四三	四、五	二、五九六	、〇五〇
營業	—	—	一、三五〇	三九、八	—	別表	三八、〇三三	、〇三八
計	—	—	三、三八七	一四〇、〇	—	—	一三九、九六七	、〇四一

備考

營業ニ對スル按分税額ハ財産ノミヨリ生スル分トシテ純益金額ノ六割ヲ計算シ之ヲ基礎トシテ按分シタルモノナリ

以上三案ニ付審議討究ノ結果左ノ結論ヲ得タリ

甲　直接國税體系竝地租、營業税ノ地方税委譲

一般所得税ヲ中樞トシ之ニ配スルニ左ニ其ノ綱領ヲ記載シタル財産税ヲ創設シテ直接税ノ體系ヲ構成シ地租、營業税ハ之ヲ地方税ニ委譲スル方針ヲ執ルコト

（理由）　第三案ハ現行地租及營業税ヲ相當ニ修補シ同時ニ建物税及資本利子税ヲ創設セムトスルニアルモ該案ハ國税ノ種目ヲ增加シテ税制ヲ益々繁雜ナラシムルノ缺點アルノミナラス現行地租及營業税ハ其ノ性質ヨリ觀ルモ又各國税制ノ傾向ニ照スモ結局之ヲ地方税ニ委譲スヘキモノト認メラルルノミナラス國税トシテハ充分ニ之ヲ改善スルコト困難ナルモノナルヲ以テ單ニ其ノ一部分ヲ修補シテ存續セシメムトスルカ如キハ税制ノ根本的改善策トシテ姑息ノ感ナキヲ得ス

第二案ハ地租及營業税ヲ地方税ニ委譲シ一般所得税ノ外ニ特別所得税ヲ創設セムトスルニアルモ元來特別所得税ノ新設ハ一般所得税ノ補完ヲ目的トスルモノナルニ拘ラス等シク純收入ヲ以テ課税標準ト爲スカ故ニ一般所得税ノ缺點卽チ純收入ノ調査困難ナルカ爲ニ生スル負擔ノ不權衡ヲ矯正スルコト能ハサルノミナラス却テ其ノ缺點ヲ二重ニシテ益々不公平ナラシムルノ結果ヲ生シ且各種財産ノ自然增價及無收益財産等ニ對シ課税スルコト能ハサルヲ以テ補完税トシテ充分ナルモノト認メ難シ

第一案ハ現行地租及營業税ハ缺點多ッシテ國税タルニ適セサルヲ以テ之ヲ地方税ニ委譲シ其ノ課税ヲシ

テ地方的事情ニ適應セシメ併セテ地方財源ノ基礎ヲ適實ニシ一面國稅トシテハ一般所得稅ノ補完トシテ一般財產稅ヲ創設スヘシト云フニアリ而シテ一般財產稅ハ財產價額ヲ課稅標準トスルモノナルカ故ニ純收益ヲ課稅標準トスルカ爲ニ生スル一般所得稅ノ前述ノ缺點ヲ調節シ併セテ財產ヨリ生スル所得ニ重課スルノ目的ヲ達シ又土地其ノ他ノ自然增價ニ因ル擔稅力ニ課稅シ尙無收益財產ニ對シテモ課稅スルヲ以テ無收益財產ヲ收益的ナラシムルノ利益アル等幾多ノ特長ヲ備ヘ一般所得稅ノ補完トシテ最モ適當ノ性質ヲ有スルモノト認ムヘキモノナキニ非ス卽財產稅ハ動モスレハ不動產ニ偏重スルノ傾向アルコト及調査上ノ困難卽チ財產價額又ハ負債ノ調査容易ナラサル點ノ如キハ最モ考量スヘキコトニ屬スト雖租稅制度ノ根本的改正ヲ斷行スルノ必要切迫シタル今日ナルヲ以テ實行上ニ於ケル多少ノ困難ノ如キハ之ヲ忍フノ必要アルノミナラス財產價額又ハ負債ノ調査ハ現行相續稅ニ於ケル經驗ニ徵スルモ必スシモ實行シ難キ問題ナリト認メ難シ故ニ第一案ヲ採用スルヲ可ナリト認メタリ

右述フル如ク大體ニ於テ第一案ヲ可ナリト認メタルモ同案ニ對シテ尙修正ヲ要スヘキモノアリト認メタリ卽左ノ如シ

(イ) 稅率ヲ千分ノ一、五ノ比例率トスルコト

(註) 創設當時ヨリ其ノ稅率ヲ高クシ又ハ累進稅率ヲ適用スルトキハ脫稅等ノ弊害ヲ釀シ其ノ圓滿ナル發達ヲ害スル虞アルヲ以テ成ルヘク低キ比例稅率ヲ適當トス

(ロ) 課稅最低限ヲ二千圓トスルコト

(註) 前號ニ依リ稅率ヲ低クスルノ結果相當ノ歲入ヲ擧ケムカ爲ニハ最低限ヲ低下セシムルノ必要アリ又一面衆議院議員ノ選擧資格及現行相續稅ニ於ケル課稅最低限等ヲ參酌シテ二千圓トスルヲ可トス

此ノ結果納稅者著シク多數トナリ徵稅費ヲ增加スルコトトナルヘキモ已ムヲ得サルモノト認ム

(ハ) 所得納稅者ノ有スル財產ハ前號ノ最低限ニ達セサル場合ト雖總テ課稅スルコト

(註) 此ノ場合ノ財產ハ財產ノミヨリ觀レハ擔稅力ナキニ似タリト雖他ニ多クノ所得アリテ所得稅ヲ納ムル者ノ有スル財產ナル以上ハ相當擔稅力アル資產ナリト謂フヲ得ヘク又財產稅ハ一般所得稅ノ補完トシテ資產ヨリ生スル所得ニ重課スルノ目的ヲ有スルモノナルヲ以テ此ノ點ヨリ觀ルモ所得納稅者ノ有スル財產ニハ總テ課稅スルヲ可トス

(二) 不動產價格ノ四分ノ一ヲ課稅價格ヨリ控除セサルコト

(註) 不動產ハ調査シ易ク動產ハ調査困難ナルヲ理由トシテ課稅價格ノ計算上不動產ニ斟酌ヲ加フルモノトセハ動產ト雖其ノ全額ヲ調査シタル場合ハ之ヲ斟酌スルノ必要ヲ生スルノミナラス前記ノ理由ヲ以テ不動產ニ斟酌ヲ加フルノ制度ヲ設クルトキハ動產所有者ハ當然其ノ四分ノ

一ヲ申告セサルモ可ナリトスルノ觀念ヲ釀成スル結果ヲ生スルノ虞アルヲ以テ法律上ニ於テハ現行相續稅等ニ於ケルカ如ク動產、不動產共ニ時價ヲ以テ計算スルコトニ定ムルヲ可トス

但シ實行上ニ於テハ相當斟酌ヲ加フルモノトス

(ホ) 無記名株式及公債、社債、銀行預金等ハ源泉課稅トスルコト

(註) 法人ノ有スル財產ニハ重複課稅ヲ避クルノ趣旨ヲ以テ課稅セサルコト及個人ノ有スル株式又ハ持分等ヲ他ノ財產ト共ニ綜合課稅スルコト第一案ト變リナキモ無記名株式等ニアリテハ之カ綜合困難ナルヲ以テ一般所得稅ニ於ケル第二種所得ノ課稅方法ニ準シ之ヲ源泉課稅トスルヲ可トス

前各號ノ外 (一)法人ニ對スル財產稅ノ可否 (二)負債ヲ控除スルノ要否竝其ノ範圍ヲ限定スルノ可否 (三)國債ニ對シ免稅スルノ可否等ニ付キ論議シタルモ之等ハ第一案ニ對シ變更ヲ加ヘサルコトトシ卽チ(一)ハ個人ニ綜合課稅シ(二)ハ原則トシテ總テノ負債ヲ控除シ(三)ハ國債ト雖免稅スヘキ限ニ在ラスト決定シタリ

一般財產稅綱要

一 納稅義務者

(一) 財產ノ權利者但シ法人ハ之ヲ除ク

(註) 法人ヲ除クハ重複課稅ヲ避クルカ爲ナリ卽チ法人ノ財產ハ株式又ハ持分ニ表現セラレ其ノ株式又ハ持分ハ個人ノ財產トシテ課稅セラルルヲ以テ法人ノ財產ニハ課稅セサルヲ可トス

(二) 權利者ノ住所カ內國ニ在ルト外國ニ在ルトヲ問ハス但シ第二項第一號(ハ)ノ財產ニ付テハ其ノ住所カ內國ニ在ル者ニ限ル

二 課稅スヘキ財產

(一) 內國ニ在ル左記各號ノ財產

(註) 收益財產タルト無收益財產(主トシテ享樂財產)タルトヲ問ハス財產稅ハ財產其ノモノニ擔稅力アリトシテ之ニ課稅スルヲ目的トスルモノナルカ故ニ收益ノ有無ヲ問フノ必要ナシ加之無收益財產ト雖之ニ課稅スレハ當該財產ヲシテ收益化セシムルノ好影響アルヲ以テ無收益財產ニ對シテモ課稅スルヲ可トス

(イ) 動產及不動產

(ロ) 不動產ノ上ニ存スル權利

(ハ) 前二號ニ揭ケタル以外ノ財產權

(註) 本號ノ財產ニ付テハ權利者ノ住所地ヲ以テ財產ノ所在地ト看做ス

(二) 前號ノ財產價額中ヨリ權利者ニ屬スル一切ノ債務ヲ控除ス但シ課稅外ノ財產ヲ取得スル爲ニ要シタル債務ハ之ヲ控除セス

（註）家族扶養費ノ控除、小額所得者ニ對スル斟酌等ノ如キハ一般所得稅ニ於テ爲スヲ可トシ一般財產稅ニ於テハ此等ノ人的事情ヲ斟酌セサルモノトス

三 課稅外ト爲スヘキ財產

㈠ 公共ノ用ニ供シ又ハ公益ノ爲ニ使用スル財產

㈡ 動產中家寶、什器、書籍其ノ他生活ニ必要ナル家具日用品等

四 課稅最低限

同居家族ノ分ヲ合算シ總財產價額二千圓未滿ノ者ニハ課稅セス但シ第三種所得納稅者ノ有スル財產ハ此ノ限ニ在ラス

五 課稅方法

㈠ 原則トシテ個人ニ綜合シテ課稅スルコト

㈡ 無記名株式、公債、社債、銀行預金等ハ配當又ハ利子支拂ノ際徵收スルコト

（註）源泉課稅トスルノ結果免稅點以下ノモノニモ課稅シ又法人ノ所有スルモノニモ課稅スルモノトス

六 課稅價格ノ算定

㈠ 時價ヲ標準トスルコト

㈡ 時價不明ナルモノハ收益ニ對スル一定倍數ヲ標準トシ時價收益共ニ不明ナルモノハ評定價格ニ依ルコト

㈢ 地上權、永小作權、定期金其ノ他特殊ノ權利ニ付テハ大體現行相續稅法ノ計算方法ニ準スルコト

七 課稅價格ノ調査決定

大體現行所得稅法ノ規定ニ準スルコト

八 稅率

千分ノ一、五比例稅率トスルコト

九 本稅施行ニ依リ徵收シ得ヘキ稅額見込左ノ如シ

財產稅徵收額	七一、九三八千円
徵稅費見積	約七、〇〇〇
差引實收額	六四、九三八

財產稅課稅價額及稅額調

種類	課稅財產總額		總額ニ對スル割合	金額
土地	二、七二六、四七六千円	一萬圓以上ヲ有スル者ノ課稅額	●三五	二、九四九、五六二千円
		五千圓以上ヲ有スル者ノ課稅額	●七〇	一五、二〇八、五三三千円
		三千圓以上ヲ有スル者ノ課稅額	●八〇	一七、三八二、二八〇千円
		二千圓以上ヲ有スル者ノ課稅額	●八五	一八、四六七、五〇四千円

建物	六、七九〇、八三三	●五〇	三、三九五、四一六	●六五	四、四一四、〇四〇	●八〇	五、四三三、六六五	●九〇	六、一二二、七四八		
山林立木	一、四四一、三九七	●四〇	五、七六、五五八	●五〇	七二〇、六九八	●六〇	八六四、八三八	●七〇	一、〇〇八、九七七		
鑛山	二、五六五、一二八	●五〇	一、二八二、五六四	●六〇	一、五三九、〇七六	●八〇	二、〇五二、一〇二	●一〇〇	二、五六五、一二八		
船舶	一六〇、六五五	●五〇	八〇、三二七	●六〇	九六、三九三	●七〇	一一三、四五八	●八〇	一二八、五二四		
家畜	三四九、一一一	●二〇	六九、八三三	●四〇	一三九、六四四	●五〇	一七四、五五五	●六〇	三〇九、四六六		
機械器具	七一、二三三	●六〇	四二、七三三	●七〇	四九、八五五	●八〇	五六、九七七	●九〇	六四、〇九九		
原料品	六二、三二〇	●六〇	三七、三九二	●七〇	四三、六二四	●八〇	四九、八五六	●九〇	五六、〇八八		
商品	四、一九三、八六二	●七〇	二、九三五、七〇三	●八〇	三、三五五、〇八九	●九〇	三、七一四、四七五	●九五	三、九八四、一六八		
國債	八九一、八〇三	●四〇	三五六、七二一	●六〇	五三五、〇八一	●八〇	七一三、四四二	●九五	八四七、二一三		
地方債	二六一、三四〇	●五〇	一四〇、六七〇	●七〇	一九六、九三八	●九〇	二五三、二〇六	●九五	二六七、二七三		
社債	二〇七、〇七八	●四〇	八二、八三一	●六〇	二四二、二四六	●八〇	一六五、六六三	●九〇	一八六、三七〇		
銀行預金	四、三〇九、三六三	●三五	一、五〇八、二七七	●五五	二、三七〇、一四九	●七〇	三、〇一六、五五四	●八五	三、六六二、九五八		
通貨	二六一、八三	●二〇	五六、三六四	●三五	九八、六三七	●六〇	一六九、〇九三	●八〇	三三五、四五七		
株式其ノ他法人投資	一〇、七〇九、三二一	●六五	六、九六〇、九九三	●八〇	八、五六七、三七六	●九五	一〇、一七三、七五九	●九五	一〇、一七三、七五九		
計	五四、〇四一、六三〇	●五四	二九、四七五、九三二	●六九	三七、四五九、三七九	●八一	四四、三九〇、八三円	●八九	四七、九五八、七三一		
				税額（千分ノ一・五）			七一、九三八、〇九六				

備考

一　課税財産總額ハ別表私有財産價額調ノ個人所有ノ分ヲ掲ケタルモノトス但シ（イ）土地、建物及山林立木ハ總價額ノ二割ヲ斟酌シタル金額ヲ掲上シ（ロ）社債及銀行預金中ニハ其ノ金額ヲ利用シ個人ニ貸付シタルモノ約三割ヲ占ムルモノト見積リ之ヲ控除シタルモノヲ掲上セリ

二　總額ニ對スル財産階級毎ノ割合ハ所得税ノ調査及土地ノ階級毎分布狀況等ヲ斟酌シテ推定シタルモノナリ

私有總財産價額調

種類	總財産價額	同上ノ内法人所有分	同上ノ内法人所有分	差引個人所有ノ分	備考
土地	二七、九九八、〇〇七千円	●〇三割	八三九、九四一千円	二七、一五八、〇九六千円	別紙内譯ノ通
建物	八、九二六、三三三	別紙ノ通	四三七、七九一	八、四八八、五四一	同
山林立木	一、八二九、九四六	●〇一	一八、一九九	一、八〇一、七四七	同
鑛山	六、四二二、八二〇	●六〇	三、八四七、六九二	二、五六五、一二八	（鑛産價格（農商務省調査）六四一、二八二千圓ヲ利率一割ニテ價額ヲ還元ス
船舶	六四三、六一九	●七五	四八一、九六四	一六〇、六五五	別紙内譯ノ通
家畜	三四九、一一一	—	—	三四九、一一一	同
機械器具	二八四、八八九	●七五	二一三、六六七	七一、二三三	（營業税ヲ課セラレタル製造業資本金一、七八〇、五五五、二三五圓中八割一、四二四、四四四、一〇八圓ヲ固定資本トシ其ノ二割ヲ機械器具ト見積計算ス
原料品	一七八、〇五六	●六五	一一五、七三六	六二、三二〇	（同上ノ製造業資本金一、七八〇、五五五、三六圓中二割三五六、一二八、〇二七圓ヲ運轉資本トシ其ノ五割ヲ原料品ト見積計算ス
商品	六、四五二、〇九五	●三五	二、二五八、二三三	四、一九三、八六二	（營業税決定卸賣一七、七八六、八九四千圓ノ三割九、三三六、〇六八千圓及小賣二七九、〇六八千圓ノ四割一、一二六、〇七七千圓ヲ現在額商品ト見積計算ス
國債	一、二七四、〇〇四	●三〇	三八二、二〇一	八九一、八〇三	大正九年六月末現在高ニ公定相場ヲ乘シテ計算ス
地方債	四〇一、九一四	●三〇	一二〇、五七四	二八一、三四〇	所得金額三、五〇七千圓ヲ利率五分六厘ニテ價額ヲ還元ス
社債	四三二、六〇八	●三〇	一二六、七八二	三九五、八二六	所得金額元、五八二千圓ヲ利率七分ニテ價額ヲ還元ス
銀行預金	七、六九五、二九二	●二〇	一、五三九、〇五八	六、一五六、二三四	大正九年六月一日現在ニ依ル
通貨	一、五三六、三九三	別紙ノ通	一、二四四、五七一	二八二、八三一	別紙内譯ノ通
株式其ノ他法人投資	二一、二七二、八六四	●〇五	五六三、六四三	一〇、七〇九、三二一	（大正九年末現在拂込見込資本八、六七二、四三四千圓ニ三割增トシテ計算ス
計	七五、六五六、九八〇		二二、一九〇、〇五二	六三、四六六、九八〇	

備考

一　財産價額ハ私有財産價額トス

二　各種財産ノ現在高ハ大正七年乃至大正九年ニ於テ調査シ得タルモノノ内成ルヘク最近ノモノヲ採用シタリ

三　機械器具、道具等ニ付テハ製造業ノ分ノミヲ計算シ農業及商業用ノモノハ算入セサルコトトセリ

四　室内裝飾品、身邊裝飾品及自動車等ノ如キモノハ調査至難ナルカ故ニ之ヲ省キタリ

五　私設鐵道及軌道ノ價額ハ總テ法人ノ所有經營ニ屬スルカ故ニ株式其ノ他ノ法人投資額中ニ包含ス

一　全國土地賣買價格調

地目	段別	一段當賣買價格	總價額	一段當地價	備考
田	二、九三三、五七五、五段	四六九円	一三、七〇六、八七九千円	三四・八六錢	單價ハ勸業銀行調査ノ大正八年四月現在價格ニ依ル
畑	二、五〇一、七八四、九	三四九	六、三三六、四四四	九・一三	同
宅地	坪當 六大都市其他ノ市郡 三九三、一三五、七	九四、五、一七、一二、〇	六、二五九、九五七	一六九・七一	市街宅地中六大都市ハ地價ノ十五倍其他ハ地價ノ約十倍、郡村宅地ハ地價ノ約六倍ニテ計算ス
鹽田	五、六三〇、四	八〇〇	四五、〇二六	三一・〇四	專賣局調査大正九年分ニ依ル
鑛泉地	三、三	坪當 一、五〇〇	一、四八五	坪當 七・六三	地價ノ二十倍ヲ以テ計算ス
山林	八、〇四八、八八九、〇	二〇	一、六〇九、七七七	三三	農務局調査及相續稅ノ調査ヲ參照シテ計算ス
池沼	二、六八七、〇	二〇	二、五三七	一・二三	山林價格ニ比準シテ計算ス
原野	一、三三六、五四五、〇	一〇	一三三、六五四	二一	農務局調査及相續稅ノ調査ヲ參照シテ計算ス
牧場	五〇、九六五、八	一〇	五、九六五	二〇	原野ニ比準シテ計算ス
雜種地	一四、〇三九、九	四五	六、三一三	九・三一	地價ノ約五倍ヲ以テ計算ス

計	一五、二八六、二四六、五		二七、九九八、〇三七

イ　宅地價額内譯表（合計）

市町村ノ種別	九年一月一日現在地價	倍數	倍數地價（即時價ト認ムルモノ）	備考
六大都市	二二三、八六六、四〇五円	十五倍	三、二〇七、九九六、〇七五円	
其ノ他ノ市區	八一、四六七、七五二	十倍	八一四、六七七、五二〇	市數六七 區數七
町村	三七二、八八〇、六二〇	六倍	二、三三七、二八三、七八〇	
計	六六八、二四、七八七		六、二五九、九五七、三七五	現在地價七〇、六一七、三一七 現在地價一〇、八五〇、四三五

ロ　宅地價格内譯表（一坪當）

都市	現在地價	倍數	倍數地價	最高 現在地價	最高 倍數地價	最低 現在地價	最低 倍數地價
東京市	七・五〇錢	十五倍	一一二・五〇錢	一〇〇・〇〇錢	一、八〇〇・〇〇錢	一・一〇錢	一六・五〇錢
横濱市	四・八八	同	七三・二〇	一一五・〇〇	一、七二五・〇〇	三三	四・九五
名古屋市	三・六八	同	五五・二〇	七二・五〇	一、〇八七・五〇	四〇	六・〇〇
大阪市	八〇三二	同	一二四・八〇	一〇六・四二	一、五九六・三〇	四五	六・七五
京都市	三・二五	同	四八・七五	八四・〇〇	一、二六〇・〇〇	二〇	三・〇〇
神戸市	六・六〇	同	九九・〇〇	九一・〇〇	一、三六五・〇〇	一八	二・七〇
外各市區ノ平均	一・七一	十倍	一七・一〇				
町村平均	三四	六倍	二・〇四				

二　建物價額調

區別	總價額	備考
家屋（住宅及附屬建物共）	八、三八三、一四八 千円	市制地ノ戸數二、三六一、八〇七戸、一戸當地代ヲ除キタル賃貸料年三〇圓ト見積リ此ノ賃貸料計五三、八三、六〇〇圓、市制地以外ノ戸數八、三〇七、八〇九戸、一戸當地代ヲ除キタル賃貸料年三六圓ト見積リ此賃貸料計二九五、四八一、二四圓合計八三八、三四、八〇四圓利率一割ニテ價額ヲ還元ス
個人 倉庫	六、〇四二	營業稅ヲ課セラレタル倉庫業建物賃貸價格七一九、二六四圓中數地及店舗ノ分ヲ控除シタル倉庫ノミノ分ヲ七割ト見積リ之ヲ利率一割ニテ還元シタル價額五、〇三四、六六八圓外ニ營業者以外ヲ其ノ二割ト見積リ之ヲ加算セリ
個人 工場	九〇、三一九	營業稅ヲ課セラレタル製造業建物賃貸價格二五、〇三三、二九圓中數地及店舗ノ分ヲ控除シタル工場ノミノ分ヲ五割ト見積リ之ヲ利率一割ニテ還元シタル價額七五、二五六四五圓外ニ營業者以外ヲ其ノ二割ト見積リ加算セリ
個人 築造物	九、〇四三	築造物ハ工場ノ一割ト推定セリ
個人 計	八、四八八、五四一	
法人 家屋其ノ他	四三七、七九一	營業稅ヲ課セラレタル法人ノ建物賃貸價格四、五〇四、七九七圓中數地ノ分ヲ控除シタル建物ノミノ分ヲ八割五分ト見積リ之ヲ利率一割ニテ價額ヲ還元セリ
合計	八、九二六、三三一	

備考

營業稅ハ大正九年決定額ニ依リ調査ス

三　山林立木調

一	大正九年分山林所得（八年伐採）	八三、九九八、三五九円
二	伐採價額百圓當所得歩合七十五圓ニテ換算セル伐採金額	一一一、九九七、八一二
三	外ニ所得納稅者以外ノ伐採ヲ右ノ三割ト見積リタル伐採價額	三三、五九九、三四四
四	伐採價額合計	一四五、五九七、一五六

五　伐採價額ノ十二倍半ヲ以テ立木價額ト見積リ計算シタル金額　一、八一九、九六四、四五〇

備考

伐採年限ヲ大體五十年ト見積リ現在立木總數量ハ一ケ年伐採量ノ五十倍ナレトモ其ノ平均年數（二十五年）ニ相當スル立木ノ單價ハ伐採期ニ達シタルモノノ四分ノ一ヲ相當ト認メ五十倍ノ四分ノ一即十二倍半ヲ以テ立木ノ總價額ト計算セリ

四　船舶價額調

種別		重量噸數	單價	價額	備考
汽船		三、九五四、一一〇 噸	一五〇 円	五九三、一一八 千円	
帆船		九六六、四二一	五〇	四八、三二一	
帆船		二九五、〇九五	四	一、一八〇	
計				六四二、六一九	

備考

一　大正九年六月現在ニ依ル

二　重量噸數ハ遞信省調査ノ總噸數ヲ基礎トシ單價ハ營業稅資料等ヲ基礎トシテ調査セリ

五　家畜價額調

種別	頭數	單價	價額	備考
牛	一、三〇四、三三一 頭	一五 円	一四九、九九八 千円	
馬	一、五六〇、一四二	一〇七	一六六、九四五	

山羊	一〇九、六九二	二	二九	
緬羊	三、一九二	二	六	
豚	三五九、九九九	八	六、四七九	
鶏	二五、〇九一、五二一	一	二五、〇九一	
鷲	三七三、五三六	一	三七三	
計			三四九、二一一	七〇

備考

頭數ハ農商務統計ニ依リ價格ハ大正七年中ニ於ケル家畜市場ノ平均ニ依ル

六 通貨調

流通貨幣	二一五、三二六	千円
同小額紙幣	一八四、八九〇	
同兌換券	一、三二一、二六四	
計	一、七二一、四八〇	
内 銀行金銀有高	九一六、二七四	
差引 内	八〇五、二〇六	
銀行以外ノ法人所有高	一六一、〇四一（二割）	
調査洩見込高	三六二、三四三（四割五分）	
差引個人所有高	二八一、八二二（三割五分）	

備考

一 大正九年六月現在ニ依ル

二 銀行以外ノ法人所有高調査洩見込高及個人所有ノ分ノ各割合ハ推定トス

乙 地租、營業税ノ委讓方法

施行當初ニ於ケル一般財産税ハ成ルヘク其ノ税率ヲ輕クシ之カ爲ニ其ノ歳入カ現行地租及營業税ノ總額ニ達セサル部分ハ當分ノ間臨機ノ處置トシテ地租及營業税ノ税率ヲ平等ニ低減シテ此ノ兩税ヲ存續セシメ財産税完成ノ時ニ於テ之ヲ地方税ニ委讓スルコト

（理由）一般財産税ヲ創設シテ地租及營業税ハ直ニ之ヲ地方税ニ委讓スルヲ理想トスルモ財産税施行ノ初ヨリ其ノ税率ヲ高クスルトヤハ或ハ其ノ施行ノ圓滿ヲ害シ又ハ脱税ノ弊害ヲ助長スルノ虞アリ加之施行當初ニ於テハ課税物件調査ノ完璧ヲ期スルコト困難ナルヲ以テ歳入ノ確實ヲ保證スルコト能ハス故ニ當分其ノ税率ヲ成ルヘク低カラシメ漸次其ノ發達ヲ圖ルノ方針ヲ採リ其ノ間ノ歳入不足ニ對シテハ

一時的現行地租及營業稅ノ幾分ヲ國稅トシテ存續セシメ財產稅ノ基礎確實トナリタル場合ニ於テ此ノ兩稅ヲ地方稅ニ委讓スルコトトシ地方稅ハ當分ノ間從來ノ通之ニ對スル附加稅ニ止ムルヲ可トス

地租及營業稅ハ初ヨリ全部之ヲ地方稅ニ委讓シ財產稅ノ歲入不足ニ對シテハ一時的ニ特別所得稅ヲ新設シテ之ヲ補充スヘシトノ說アルモ一般財產稅ノ外ニ當分ノ應急策トシテ特別所得稅ヲ新設シ而カモ近キ將來ニ於テ之ヲ廢止スト云フカ如キハ徒ニ國稅ノ制度ヲ混亂セシムルノミナラス全然新ナル二個ノ租稅ヲ同時ニ實施スルハ執行上非常ノ困難ヲ來サシムルコトトナリ決シテ策ノ得タルモノト謂フヲ得ス故ニ不完全ナカラモ從來多年繼續シ來リタル地租、營業稅ヲ存續シ之ニ對シテ財產稅ノ歲入ニ相當スル金額ノ減稅ヲ行フニ止ムルヲ可ト認ム又創設スヘキ財產稅ノ財源ヲ以テ地租或ハ營業稅ノ一方ヲ地方稅ニ委讓スルヲ可トストノ說アルモ此ノ兩稅ハ土地ト營業トノ負擔ノ權衡ヲ圖ルヲ目的トシ兩稅相俟チテ現行直稅制度ノ體系ヲ成スモノナルヲ以テ假令一時的ナリトハ云ヘ其ノ一方ノミヲ地方稅ニ委讓スルトキハ國稅トシテノ組織ヲ亂雜ナラシムルノ嫌アルヲ以テ財產稅ノ歲入ハ之ヲ地租ト營業稅トニ割當テ兩稅ノ稅率ヲ平等ニ輕減シ財產稅ノ歲入增加スルニ從テ漸次地租、營業稅ノ稅率ヲ低下セシムルヲ可トス而シテ前項記載ノ如ク財產稅總額七一、九三八(千圓)ニシテ此ノ內ヨリ徵稅費約七百萬圓ヲ控除スルトキハ實收額六四、九三八(千圓)ナルヲ以テ此ノ金額ハ現行地租及營業稅ノ輕減ニ充ツヘキモノナリト雖他ノ國稅整理ノ結果減額スヘキモノヲモ差引スルニアラサレハ國稅全體ニ於テ

國庫歲入ノ不足ヲ生スルヲ以テ之ヲ控除スルノ必要アリ卽チ右ノ金額ヨリ他ノ直接國稅及間接國稅整理ノ結果ニ依ル差引減稅額三、一六七(千圓)ヲ控除スレハ殘額六一、七七一(千圓)ニシテ地租及營業稅ノ合計一三八、八〇一(千圓)(地租七四、一四〇營業稅六四、六六一)ノ四割四分五厘ニ相當スルヲ以テ現行地租及營業稅ハ各其ノ稅率四割四分强ヲ低減シテ存續スルモノトス

(註)財產稅徵收費約七百萬圓ヲ絕對ニ增加スルハ地租、營業稅ノ一部ヲ國稅トシテ保留スル期間中ニ限ル地租、營業稅ノ全部ヲ地方稅ニ委讓シタル曉ニハ之ニ要スル徵稅費約六百三十萬圓ハ國費トシテ不用ニ歸スルヲ以テ差引增加額百萬圓內外トナルヘシ尤モ此ノ場合ニ於テ財產稅ノ徵收額カ施行當初ノ倍額トナレハ之カ爲ニ市町村交付金署二百萬圓ヲ增加スルコトトナルヘシ

丙　當分存續スヘキ地租、營業稅ノ整理

國稅トシテ存續スヘキ地租及營業稅ノ課稅標準等ニ付テハ左ノ如クスルコト

地租

地租ハ現行ノ儘之ヲ據置キ追テ地方稅ニ委讓スル場合ニ於テ改善ヲ加フルコト

(理由)現行地租ハ其ノ課稅標準タル地價設定後數十年ヲ經各地間ノ權衡ヲ得サルコト顯著ナルヲ以テ地價ヲ修正スルカ又ハ其ノ他ノ課稅標準ニ依ル等根本的ニ改正スヘシトノ說アルモ地租ノ課稅方法ハ長

キ沿革ヲ有シ之ヲ根本的ニ改正スルコトハ容易ノ業ニアラス而カモ早晩地方税ニ委讓スヘキモノナルヲ以テ此ノ際國ノ事業トシテ多大ノ經費ト手數トヲ費シテ之ヲ改善スルノ要ナク又地租ヲ地方税ニ委讓シタル場合ニ於テハ其ノ地方ノ財政事情ニ依リ必スシモ各地間ノ權衡ヲ保持シ難カルヘキヲ以テ今日之ヲ根本的ニ改善統一スルノ必要ナシ寧ロ他日地方ニ委讓シタル曉ニ於テ各地方狹小ナル範圍ニ適當セル周密ナル調査ヲ行ヒ之ヲ改善スルヲ可ナリト認ム

營業税

營業税ハ成ルヘク營業利益ヲ測定スルニ適當ト認ムル課税標準ヲ選擇シ同時ニ其ノ種目ヲ成ルヘク少ナカラシメ尚營業利益皆無ナル場合ニ於ケル課税免除ノ途ヲ開キ左ノ如ク改正スルコト

改正要領

一　課税スヘキ營業ノ種類ハ大體現行法ニ準スルコト

二　課税標準ハ大體左ノ如ク改正スルコト

(イ)　建物賃貸價格ハ必スシモ營業ノ大小收入ノ多寡ヲ代表スルモノニ非サルヲ以テ原則トシテ課税標準中ヨリ之ヲ削除スルコト但シ席貸業、料理店業、旅人宿業ニ付テハ例外トシテ之ヲ存置スルコト

(ロ)　從來建物賃貸價格及從業者ノミヲ課税標準トシタル營業ニ付テハ收入金又ハ資本金ヲモ課税標準トシ營業利益ノ多寡ニ適應セシムルコト

(ハ)　物品販賣ノ賣上金ハ現行法ニ於テ賣上金ニ對スル税率ヲ甲、乙ニ區分シアルモ其ノ種目中不適當ト認ムルモノアルヲ以テ之ヲ相當ニ整理スルコト

(ニ)　課税最低限竝資本金計算方法ニ付テモ相當調査スルコト

(ホ)　其ノ他各業ニ付以上各號ノ趣旨ニ準シ適當ナル改善ヲ加フルコト

三　現行法ニ於ケル課税標準額カ前年ノ半額ニ達セサル場合ノ減損更訂ノ制度ハ之ヲ存續シ別ニ其ノ年ニ於ケル營業税利益皆無ナル場合ニ於テハ税金ヲ全免スルノ制度ヲ設クルコト

四　課税手續

(イ)　課税標準ノ調査ニ付テハ現行調査委員ノ外同業組合其ノ他各種ノ組合等ノ意見ヲ徵スルノ制度ヲ設ケ以テ直接納税者トノ折衝ヲ少ナカラシムルコト

(ロ)　實地ニ就キ調査スルノ必要アル場合ハ高級ノ税務官吏ヲ以テ之ニ充ツルノ組織トシ且祕密漏洩ニ對シ嚴格ナル制裁ヲ設クルコト

(ハ)　誠實ナル申告ヲ奬勵シ成ルヘク其ノ申告ヲ尊重スルノ方針ヲ採ルト同時ニ無申告者又ハ不正申告者ニ對シテハ相當ノ制裁規定ヲ設クルコト

五　調査、決定、徵收、納期等

現行法ノ通但シ調査委員及審査委員等ノ制度ハ大體改正所得税法ニ準シ之ヲ改ムルコト

六　稅率ハ以上各項ニ依リ調査シタル課稅標準ニ對シ總稅額ヲ適當ニ配分シタルモノトスルコト

（理由）營業稅モ亦地租ト同シク新設スヘキ財產稅完成ノ際ニ於テ全部之ヲ地方稅ニ委讓スヘキモノニシテ國稅トシテ存續スルハ過渡期ニ於ケル一時的ノ方便ニ過キサルヲ以テ當分之カ修正ヲ爲スノ必要ナキカ如シト雖營業稅ニ於テハ之ヲ改善セムカ爲ニ地租ノ如ク多大ノ經費ヲ要スルコトナキノミナラス本稅ハ其ノ制定以來非難多ク殊ニ近來ハ其ノ全廢又ハ改善ノ聲一層高マリ政府又ハ議會ニ對スル建議請願等ノ狀況ニ鑑ミルモ苟モ一般稅制ノ根本的整理ヲ爲サムトスル場合ニ於テハ假令一時的ニ國稅トシテ存續スルニ過キスト雖之ニ對シ何等ノ改正ヲ加ヘスシテ之ヲ存置スルコトハ不穩當ナリト認ム而シテ本稅改正ノ主要問題ハ其ノ課稅標準ヲ如何ニスヘキヤニアリ今之ヲ大別スレハ

甲　現行課稅標準ヲ全廢シ各業トモ其ノ所得ヲ課稅標準トスルノ說

乙　現行課稅標準ヲ全廢シ各業トモ其ノ資本ヲ課稅標準トスルノ說

丙　所得及資本ノ兩者ヲ課稅標準トスルノ說

丁　本案ノ如ク現行法ニ相當修正ヲ加フルノ說

等ナリト雖甲說ニ依レハ營業稅ヲシテ所得調査上ノ缺點ヲ補充スルノ特質ヲ失ハシムルノミナラス一般所得稅ト重複課稅ノ形トナリ且ツ營業ニ付テノミ所得課稅主義トスルトキハ土地ニ對スル課稅ト權衡ヲ失スルヲ以テ採用スルヲ得ス、乙說ニ依レハ全然所得ノ如何ヲ問ハス損失アルモ尙之ニ課

稅スルコトトナルカ故ニ現行法ニ對スル非難ヲ防遏スルコト能ハサルノミナラス財產稅ト重複課稅ノ形トナリ且ツ全部ノ營業者ニ付固定資本及運轉資本ノ全額ヲ適當ニ調査スルコトハ實行極メテ困難ナリ又丙說ハ要スルニ前二說ノ折衷ナルヲ以テ前述シタル兩說ノ缺點ヲ合セ有スルノミナラス主義ニ於テモ明晰ヲ缺キ且ツ其ノ實行上ノ手數ニ於テモ亦錯雜ヲ來スコトトナルヲ以テ是亦採用シ難シ而シテ丁說ハ原則トシテ建物賃貸價格ヲ削除シ各營業ニ應シテ賣上、資本又ハ收入金等ヲ主タル課稅標準ト爲スカ故ニ大體ニ於テ擔稅力ニ適應シタル課稅トナルヘク又實際所得ナキ場合ニ於テハ課稅ヲ免除スルヲ以テ損失アルモ尙課稅スルハ不當ナリト云フ現行法ノ非難ヲ除クヿトヲ得ヘシ故ニ本案ノ如ク改正スルヲ適當トス

要スルニ營業稅ニ付テハ其ノ性質ニ鑑ミ又其ノ非難ノ點ヲモ參照シテ各種ノ改正案ヲ樹テ周密ナル研究考査ヲ盡シタルモ各一利一害アリ結局丁案ノ如クスルノ外他ニ良案ナキモノト認メタリ

第二　其ノ他ノ直接税ノ整理

甲　廢止スヘキモノ

通行税

通行税ハ之ヲ全廢スルコト

（理由）

(イ)　今日ノ社會狀態ニ於テハ汽車、電車又ハ汽船ヲ利用スル者カ之ヲ利用セサル者ニ比シ必スシモ特別ノ擔税力アリト認メ難キノミナラス自動車ヲ利用スル者ニ課税セスシテ電車ヲ利用スル者ニ課税スト云フカ如キ不權衡ヲ生シ而モ此ノ不權衡ヲ矯正セムカ爲自動車ヲ利用スル者ニ對シテモ通行税ヲ課セムトスルモ自動車ノ營業用タルト自用タルトヲ問ハス其ノ通行ノ距離及度數等ニ應シ適當ノ課税ヲ爲スコト能ハサル等徵税手續ニ困難アルヲ以テ實行殆ント不可能ナリ

(ロ)　其ノ課税範圍ニ付テモ汽車、電車又ハ汽船ノ乘客ナル以上ハ無資産階級ノ者ト雖又如何ナル短距離ノ通行ト雖之ヲ除外スルコトナキカ故ニ多數者ニ對シテハ比較的負擔苛重ニ過クルノ感アリ現行法ハ此ノ點ニ鑑ミ或ハ賃金ノ等級區分ニ依リ又ハ距離ノ長短ニ應シ税額ノ差等ヲ設ケ其ノ負擔力ニ應セシムルカ如キ形式ヲ採レリト雖其ノ實際ニ於テハ十哩又ハ十海里未滿ノ通行者ニ對スル

税額ハ總額ノ七割以上ヲ占メ又一、二等乘客ノ納税額甚タ僅少ニシテ三等乘客ノ納税スルモノ税額ノ約九割ニ相當スル實況ナルカ故ニ本税ノ實事上下層階級者ニ對スル課税ナリト謂フ非難ヲ免ルル能ハス

(ハ) 右ノ非難ヲ除カムカ爲ニ短距離又ハ下級ノ乘客ニ對スル課税ヲ免除シテ本税ヲ存續スヘシトノ説ナキニアラスト雖之ヲ除外スルトキハ現在歳入ノ大部分ヲ失ヒ財政上全ク本税存續ノ理由ヲ失フモノト謂ハサルヘカラス故ニ寧ロ此ノ際之ヲ全廢スルヲ可ト認ム

賣藥營業税

賣藥税法中賣藥營業税ハ之ヲ廢止シ營業税法ノ製造業トシテ課税スルコト

(理由)現行賣藥營業税ハ藥劑一方毎ニ製造定價總額ニ依リ税額ヲ定ムルカ故ニ例ヘハ一ケ年ノ製造定價總額等シク五千圓ナリトスルモ藥劑一方ノミナル場合ノ税額二十二圓ナルニ一方五百圓ノモノ十方ニテ五千圓トナル場合ノ税額七十圓トナルカ如キ結果ヲ生シ又一方十萬圓以上ノモノニアリテハ其ノ製造高如何ニ多額ナルモ十萬圓ノモノト同一ノ負擔ニ止ムルカ如キ不公平ヲ生ス故ニ改正ヲ行フノ必要アリ而シテ此ノ點ノ改正ハ現行法ノ修正ニ依リ之ヲ改善シ能ハサルニアラスト雖元來賣藥製造業ハ他ノ一般ノ製造業ト其ノ性質異ナル所ナク之ニ對シテ獨立ノ税目ヲ設ケ置クトキハ普通ノ製造業トノ負擔ノ公平ヲ失スルノ缺點アルヲ以テ寧ロ此ノ機會ニ於テ賣藥營業税ハ之ヲ廢止シテ營業税法ヲ適用スルコトニ改ムルヲ可トス

税額ノ計算左ノ如シ

營業税法ニ依リ課税ズル場合ノ税額見込　八〇、二八五円

現行賣藥營業税額(九年度實額)　三一〇、五八五

差引減額　二三〇、三〇〇

乙　改正スヘキモノ

相續税

一　相續税ハ大體現行法ノ組織ノ儘之ヲ存置スルコト

(理由)相續税ハ本邦特有ノ美風タル家族制度ノ趣旨ニ反スルノ嫌アリ加之財産税ヲ創設シテ財産所有者ニ對シ特別ノ課税ヲ爲ス場合ニ於テ尚此ノ存置スルハ財産ニ對スル課税重キニ過クトノ感ヲ生セシムルノ虞アリ此ノ點ヨリ之ヲ觀レハ寧ロ相續税ヲ廢止スルハ所謂税制整理ノ目的ニ副フカ如ク認メラルルモ元來相續税カ家族制度ヲ破壞スルノ虞アリヤ否ヤハ其ノ課税ノ程度如何ノ問題ニシテ負擔スヘキ税額カ多大ニ失スルコトナク即チ家産ヲ侵蝕シテ一家ノ存續ニ不安ヲ來サシムルカ如キ程度ニ達セサル限リハ決シテ家族制度ノ趣旨ヲ沒却スルモノト謂フヘカラス又財産税ヲ創設スルハ一定ノ財産ヲ所

有スルノ事實カ擔稅力ヲ表示スルモノナリト謂フノ趣旨ニ出ツルモノナルモ相續稅ニ在リテハ相續ト云フ偶然ノ事實ニ因リ一時ニ多額ノ財產ヲ取得シ經濟上ニ於ケル地位ヲ增進スルモノナルカ故ニ其ノ相續人ニ相當ノ擔稅力アリト爲スモノニシテ此ノ兩稅ハ全ク課稅ノ目的ヲ異ニスルモノナルヲ以テ財產稅ヲ創設スルカ爲ニ相續稅ヲ廢止スヘシト謂フノ理由ナシ又現行法ハ數次改正ノ結果最早顯著ナル缺點モ認メラレサルヲ以テ第三項以下ニ記載シタル改正ヲ加フルノ外ハ總テ現行ノ通トシテ之ヲ存續セシムルヲ可ト認ム

二 稅率ハ之ヲ据置クコト

(理由)相續稅ハ創設以來明治四十三年及大正三年ニ於テ其ノ稅率ヲ輕減シテ創設當時ノ半額以下ニ低下セシメタルカ爲相續ニ對スル登錄稅ヲ加フルモ尙賣買又ハ贈與ノ場合ニ於ケル登錄稅ニ比シ著シク輕キ負擔ヲ爲スニ過キサルヲ以テ之ヲ相當ニ引上クルコトモ一應理由アリト認メラルルモ其ノ稅率ヲ高クスルトキハ動モスレハ家族制度破壞ノ非難ヲ招キ易ク又財產稅ヲ創設シテ尙相續稅ノ稅率ヲ引上クルトキハ納稅者ヲシテ負擔加重ノ感ヲ懷カシメ財產稅ノ創設ヲ困難ナラシムルノ虞アリ加之家族制度ニ對スル影響等ヲ慮リ旣ニ前後二回ニ涉リ減稅ヲ爲シタルニ拘ラス其ノ後特殊ノ新事實モ發生セサル今日ニ於テ再ヒ其ノ稅率ヲ引上クルカ如キハ穩當ヲ缺クノ嫌ナキニアラス故ニ少クトモ此ノ際ハ之カ引上ヲ爲ササルヲ穩當ト認ム

三 現行法第二十三條ニ依リ遺產相續ト看做スヘキ贈與ハ推定相續人ニ對スルモノノミニ限ルモ其ノ以外ノ親族ニ對シテ爲シタルモノヲモ課稅スルコト

(理由)推定相續人以外ノ者ニ對スル贈與ニ課稅セサルトキハ一旦推定相續人ニ贈與シ更ニ推定相續人ニ贈與スルノ手續ヲ取ルモノニ課稅シ能ハサルヲ以テ本條ノ目的ヲ充分ニ貫徹セシムルコトヲ得ス故ニ推定相續人ニアラスト雖自己ノ親族ニ對シ贈與シタルモノニハ課稅スルヲ可トス元來推定相續人以外ノ親族ニ對スル贈與マテモ之ヲ遺產相續ト看做スハ穩當ナラス而モ其ノ目的ハ脫稅防止ノ爲ナリトセハ寧ロ進ンテ親族以外ノ者ニ對シ贈與シタル場合ト併セテ之ヲ獨立ノ贈與稅トスルヲ可トストノ說アルモ現時本邦ノ社會狀態ニ於テハ他人ニ對シテ單純ニ贈與ヲ爲スカ如キモノ極メテ少カルヘク又遺產贈與ノ手段トシテ全ク親族關係ナキ他人ニ贈與シテ之カ仲介ト爲サシムルカ如キモ亦稀有ナルヘク況ンヤ贈與ニ課稅スルトセハ其ノ贈與ノ目的ニ應シ例外ヲ必要トシ又ハ贈與ノ內容ニ依リ可否ノ疑問ヲ生スルモノ多々アルヘク此等ノ點ヲ考慮スレハ此ノ際一般贈與稅ヲ設クルノ必要ナシト認ム又親族ニ對スル贈與ヲ本條ニ規定セムトスルハ特ニ贈與稅ヲ課スルノ趣旨ニ出ツルモノニアラスシテ脫稅ヲ防カムトスルノ精神ニ外ナラサルヲ以テ相續稅法中ニ之ヲ規定スルモ敢テ不當ニアラスト認ム

四 不動產及船舶ノ贈與ニ對シテモ法第二十三條ニ依リ遺產相續ト看做シ課稅スルコト

(理由)現行法ハ不動產及船舶ノ贈與ニ對シ高率ノ登錄稅ヲ課スルヲ以テ相續稅ヲ課スルノ必要ナシトスルノ主義ヲ採レルモ其ノ稅率餘リニ高キ爲カ事實上贈與ノ場合ニ於テモ賣買其ノ他ノ名義ヲ以テ登錄ヲ爲シ已ムヲ得サル場合ノ外贈與トシテ登記シ高キ登錄稅ヲ納ムル者極メテ少キヲ以テ立法ノ目的ヲ達シ能ハサル現狀ニアリ而シテ假ニ登錄稅ニ於テ漏レナク高率ノ課稅ヲ爲シ得ルモノトスルモ相續稅ニ於テハ累進稅率ヲ適用シアルニ拘ラス比例稅タル登錄稅ト差引シテ可ナリト認メ置クハ立法上不公正ナリ若シ此ノ主義ヲ是認セムカ一般相續稅ノ場合ニ於テモ不動產ニ對シテハ單ニ登錄稅ヲ課スルニ止ムヘク特別ノ手數ヲ加ヘテ相續稅ヲ課スルノ必要ナシトスルノ結論ヲ生スルニ至ルヘシ故ニ本案ノ如ク之ヲ改正スルヲ可トス

五 船舶ノ價格ハ時價ニヨリ計算スルコト

(理由)現行法ニハ法第四條ニ於テ特別ノ計算方法ヲ規定スルカ故ニ實際ノ價格ニ副ハサルモノ多シ今日ニ於テハ船舶ノ時價ヲ見積ルコト敢テ困難ナラサルヲ以テ機械的ノ算出ニ依ラス時價ニ依リ計算スルヲ可トス

六 以上各項整理ノ結果增加スヘキ稅額不明ナルモ登錄稅ノ減少ト差引シテ大體增減ナキモノト認ム

登錄稅

一 遺言、贈與其他無償名義ニ因ル不動產及船舶ノ所有權取得中親族間ノ贈與ニ對スル稅率ハ遺產相續ニ因ル各所有權ノ取得ト同程度ノ稅率ニ低減シ親族以外ノ者ニ對スル贈與ニ付テハ普通賣買等ノ登錄稅ヨリ若干其ノ稅率ヲ高ムルコト

(理由)現行法ニ於テハ推定相續人ニ對スル動產ノ贈與ニ付テハ相續稅法ノ規定ニヨリ相續ト看做シテ課稅スルモ不動產及船舶ノ贈與ニ對シテハ課稅セス其ノ代リ登錄稅ニ於テ其ノ價格ノ千分ノ六十ノ稅率ヲ以テ之ニ課稅シ事實ニ於テハ相續稅ヲ課シタルト同結果ヲ來サシムルコトニ爲リ居ルモ相續稅整理案ノ如ク不動產及船舶ト雖親族ニ對シ贈與ヲ爲シタルモノハ總テ相續稅ヲ課スルコトニ改正スル方適當ト認メ別ニ其案ヲ立テタリ從テ登錄稅ハ同法中ノ遺產相續ニ因ル所有權ノ取得ニ對シテ課スル稅率ト同樣ノ課稅ヲ爲スコトニ改メ尙親族以外ノ者ニ對スル贈與ハ普通賣買等ヨリ若干其ノ稅率ヲ高ムルヲ適當ト認ム

二 現行法中不動產及船舶等ノ賣買ニ因ル所有權取得ノ場合ニ於ケル登記價格ハ事實上實際ノ賣買價格ヨリ低シト認メラルルヲ以テ其ノ實際價格ノ登記ヲ勵行セシムルト同時ニ其ノ稅率ヲ相當低減スルコト

(理由)現行法中不動產及船舶ノ賣買竝贈與ニ因ル所有權取得ノ稅率ハ過重ノ嫌アリテ動モスレハ不正ノ申告ヲ爲シ課稅價格ヲ隱匿シ以テ事實上脫稅ヲ圖ルモノ尠カラス殊ニ財產稅設定後ニ於テ財產稅ノ課稅價格ト登錄稅ノ課稅價格トニ著シク差違ヲ生スルハ妥當ナラサルヲ以テ登錄稅ノ課稅價格モ亦財產稅ノ如ク時價卽實際賣買價格ニ依ラシムルコトトシ之ト同時ニ之ニ因リテ生スヘキ登錄稅增

收ノ範圍ニ於テ其ノ稅率ヲ相當低減スルコト

(註)登錄稅ノ整理ニ關聯シ地方稅中不動產取得稅ノ整理ヲ要スルモノアリ本稅ノ稅率ハ各府縣ノ情況ニヨリ課稅率ヲ異ニスト雖地方ニ依リテハ府縣、市町村稅ヲ通シテ不動產價格ノ千分ノ三十二ト云フ如キ高率ノ課稅ヲ爲スモノアルヲ以テ登錄稅稅率ノ輕減ヲ爲ストキハ之トノ權衡上不動產取得稅ノ稅率モ亦相當輕減ヲ爲スコトニ考慮ノ要アリト認ム

三 其他現行法中各種ノ登錄ニ對シ課稅上不權衡ト認ムルモノニ付テハ追加若ハ增減稅ヲ爲スコト

四 登錄稅ノ脫稅防遏策トシテ制裁ノ規定ヲ設クルコト

(理由)現行法ニ於テハ何等ノ規定ナキヲ以テ脫稅ヲ圖ルモノ尠カヲス況ンヤ今後課稅價格ノ充實ヲ勵行セムトセハ一層相當ノ制裁規定ヲ置クノ必要アリト認ム

(註)財產稅創設ノ結果財產稅ノ課稅價格ト登錄稅ノ課稅價格トニ著シク差違ヲ生スルハ妥當ナヲサルヲ以テ登錄稅課稅價格ノ決定ニ付テハ司法省ハ大藏省ト協議ヲ遂ケ之カ統一ヲ期スル必要アリト認ム

五 以上各項整理ノ結果稅額多少減スヘキ見込ナルモ相續稅ノ增加ト差引シテ大體增減ナキモノト認ム

鑛業稅

現行鑛業稅中鑛產稅ノ稅率ハ之ヲ半減シ鑛區稅ハ現行法ノ通存置スルコト

(理由)鑛業稅ハ鑛產稅ト鑛區稅トニ區分セラレ鑛產稅ハ產出鑛物ノ價格ヲ標準トシテ之ニ課稅シ鑛區稅ハ鑛區ノ坪數ヲ課稅標準トシテ之ニ課稅セリ而シテ鑛業稅ノ性質ヲ以テ全然收益稅ナリトセハ財產稅ヲ創設セムトスル以上ハ地租及營業稅ノ廢止ニ伴ヒ本稅ヲ廢止スルコトモ亦當然ナリトノ說アルヘキモ鑛業稅ハ單ニ收益稅ノ性質ノミヲ有スルニ止マラス鑛業權者ニ對シテ鑛物ノ採收ニ付國家カ特ニ獨占的權利ヲ與フルモノナルヲ以テ鑑區稅ハ勿論鑛產稅ノ一部分ハ共ニ特許稅ノ性質ヲ有スルモノト認ム故ニ鑛產稅中收益稅ノ部分ニ對シテハ之ヲ免除スル意味ニ於テ鑛產稅率ヲ相當低減スルコト必要ナルヘキモ他ノ特許稅ノ性質ヲ有スル部分及鑛區稅ハ之ヲ存置スヘキモノト認ム而シテ其ノ收益稅ノ部分カ果シテ何程ナルヤ明確ナラサルヲ以テ此ノ際ニ於テハ現行鑛產稅額ノ二分ノ一ヲ輕減シテ之ヲ地方稅ニ委讓スルコト

所得稅

現行所得稅法ハ最近根本的改正ヲ加ヘラレタルヲ以テ大體ニ於テ改正ヲ要スル點少シト認ムルモ二三研究ヲ要スル事項ナキニアラス卽チ左ノ如シ

(イ) 法人ト個人トノ課稅方法ヲ異ニスル結果近來資產家中所得稅ノ輕減ヲ主タル目的トシテ財產保全會社ヲ設立スルモノ少ナカラサルカ如シ此ノ點ヲ改正シテ課稅ノ公平ヲ期スルノ方法ナキヤ

(ロ) 銀行定期預金利子ニ對シ第二種所得稅ヲ課シ其ノ他ノ銀行預金利子ニハ第三種所得稅ヲ課スルノ組織

ナレトモ實際上ニ於テハ定期預金以外ノ預金ノ利子ニ付キテハ課稅セラルルモノ皆無ト云フモ過言ニ非サル情況ナルヲ以テ定期預金ニ對シテノミ課稅スルノ結果トナリ從テ近來實質上定期預金ナルニ拘ラス種々ノ手段ヲ講シテ定期預金ニ非サルカ如キ形式ヲ採リ以テ所得稅ノ逋脫ヲ圖ル者甚タ多キヲ認ム此ノ弊害ヲ矯正シテ負擔ノ公平ヲ圖ル必要ナキヤ

(ハ) 第二種所得ノ稅率稍低キニ過クル感アリ之カ爲ニ法人カ增資ノ代リニ社債ヲ發行シテ第一種及第三種所得稅ヲ免レムトスル傾向ナキニアラス故ニ社債ニ對スル稅率ヲ引上クルカ又ハ進ンテ第二種所得稅ヲ廢シテ個人ニ綜合課稅スルノ必要ナキヤ

以上各項ハ何レモ相當研究ヲ要スル事項ナルモ改正所得稅法ハ實施後日尙淺キヲ以テ少クトモ今後一二年ヲ經過シタル後ニ非サレハ之カ改正ヲ確定的ニ論結シ難シ故ニ此ノ際ハ成ルヘク改正ヲ見合セ置クヲ可トスルカ如シ然レトモ(イ)及(ロ)ニ記載シタル事項ノ如キハ其ノ弊害顯著ニシテ到底此ノ儘ニ放任シ難シト認メラルルヲ以テ左記各項ノ改正ヲ加フルコト

一 財產保全會社ノ留保金ニツイテハ左ノ如ク改正スルコト

(イ) 法人ニシテ其ノ事業ノ性質ヨリ觀察シテ必要アリト認ムル程度以上ニ社內留保ヲ爲シタルモノアルトキハ其ノ金額ハ其ノ出資額ニ應シ之ヲ配當シタルモノト見做シテ各個人ニ綜合課稅スルコト

(ロ) 前項必要ナル留保額ノ程度ハ大藏大臣之ヲ認定スルコト

(ハ) 右ノ認定ニ對シ不服アル者ニ對シテハ行政訴訟ヲ許スコト

二 銀行預金(貯蓄預金ヲ除ク)ニ對シテハ總テ第二種所得稅ヲ課スルコト

丙 改正セサルモノ

砂鑛區稅

一 現行法ノ通存置スルコト

(理由)本稅ハ明治四十三年ノ制定ニ係リ施行後逐年砂鑛區域ヲ減少シ又砂金採取高モ著シク減スルニ至リ鑛業ノ發達ヲ沮害スルモノト認メラルルノミナラス稅額僅々一萬餘圓ニ過キサルヲ以テ寧ロ之ヲ廢止スルヲ可ナリト謂フモノアルモ苟モ財產稅ヲ創設スル以上ハ鑛業稅中ノ鑛區稅ト同一理由ニ依リ本稅ハ尙存置スルノ要アリト認ム

兌換銀行券發行稅

現行兌換銀行券發行稅ハ一定制限內ノ保證準備發行ニ對スルモノトニ區分セラル前者ハ兌換券ノ發行ヲ爲シ得ル特權ヨリ生スル特別ノ收益ニ課稅セムトスルモノニテ其ノ發行高ニ對シ一箇年千分ノ十二半ノ稅率ヲ適用シ後者ハ寧ロ兌換券發行高ノ調節ヲ圖ルヲ主タル目的トシテ其ノ稅率ヲ稍々高クセリ卽制限外發行高ニ對シ百分ノ五ヲ下ラサル範圍ニ於テ其ノ時々大藏大臣之ヲ定ムルノ制ヲ採

レリ(現在百分ノ七)

課税ノ根據以上ノ如クナルヲ以テ本税ハ將來ト雖之ヲ存續セシムルノ必要アリ而シテ其ノ税率ハ本税ノ目的及外國ノ立法例等ヨリ勘案シ大體相當ト認メラルルヲ以テ現行法ノ通据置クヲ可ト認ム

狩獵免許税

政府ニ於テハ狩獵法ノ全體ニ付根本的改正ノ計畫アル趣ナルヲ以テ狩獵免許税モ其ノ際合セテ研究セラルヘク今回ハ之カ改廢ヲ爲ササルヲ相當ト認ム

第二編

間接國税整理案

間接國稅整理案

第二篇

目次

第一　間接國稅整理方針……九三
第二　間接國稅整理案……九三
甲　廢止スヘキモノ……九五
醬油稅、自家用醬油稅……九五
石油消費稅……九六
賣藥印紙稅……九七
乙　改正スヘキモノ……九九
酒造稅、麥酒稅、酒精及酒精含有飲料稅……九九
砂糖消費稅……一二六
織物消費稅……一四九
印紙稅……一五七
丙　創設スヘキモノ……一七一
化粧品稅……一七一

清涼飲料税……一七五
丁　改正セサルモノ……一七八
取引所税……一七八
骨牌税……一七八
戊　其ノ他新税トシテ調査シタルモノ……一七九
酢税課否ニ關スル調査……一七九
燐寸消費税課否ニ關スル調査……一八二
其ノ他各種ノ新税ニ關スル調査……一八三

第一　間接國税整理方針

間接國税ノ整理ニ關シテハ大體ノ方針トシテ消費税ニ付テハ成ルヘク生活必需品ニ對スル課税ヲ避ケ又ハ輕減シ主トシテ奢侈品ニ課税スルノ主義ヲ採リ以テ現行消費税中廢止スヘキモノノ有無ヲ調査シタリ

尚又消費税ノ課税方法ニ付テモ製造課税ト引取課税、從量税ト從價税、消費税ト專賣、其ノ他税率、納期、取締方法等ヲ調査シ尚進ムテ現行税トノ權衡上又財源トシテ必要上新税ノ創設ヲ要スルモノノ有無ヲモ調査シ又消費税以外ノ間接税ニ付テモ各其ノ内容ニ付詳細ナル研究ヲ遂ケ以下各項ニ記述スル如キ結論ヲ得タリ

第二　間接國税整理案

現行間接國税中廢止スヘキモノ、改正ヲ要スヘキモノ及新税トシテ創設スヘキモノト決定シタル税目、其ノ他新税トシテノ可否ニ關シ調査ヲ遂ケタルモノ左ノ如シ

甲　廢止スヘキモノ

醬油造石税

自家用醬油税

石油消費税
賣藥印紙税

乙 改正スヘキモノ

酒造税
酒精及酒精含有飲料税
麥酒税
（税率ノ改正、原料用酒精ノ戻税等）

砂糖消費税（砂糖税トノ權衡上飴ニモ課税スルコト）

織物消費税（織物税トノ權衡上メリヤス、フエルトニモ課税スルコト）

印紙税（證書帳簿ノ課税區分、税率ノ改正、免税點ノ引上等）

丙 創設スヘキモノ

化粧品税

清涼飲料税

丁 改正セサルモノ

取引所税

骨牌税

戊 其ノ他新税トシテ調査シタルモノ

酢税

燐寸消費税

其ノ他各種ノ新税

甲 廢止スヘキモノ

◇醬油税、自家用醬油税

醬油税及自家用醬油税ハ之ヲ廢止スルコト

（理由）醬油税及自家用醬油税ヲ現行ノ儘存置スルモ可ナリト認メラルル事由アリ卽チ醬油ハ必スシモ國民ノ生活上ノ必需品ト稱シ難キノミナラス醬油税ハ數十年來課税シ居レトモ其ノ間格別非難ノ聲ヲ聞カス而モ歲入約五百萬圓ヲ算スルカ故ニ好箇ノ財源タルヲ失ハス依テ之ヲ存置スルモ可ナルカ如シト雖左記理由ニ依リ廢止スヘキモノト認ム

(イ) 醬油ニ對スル現行ノ課税ハ必シモ重シトセサルモ醬油ハ吾國民生活上ノ日用品ニシテ如何ニ貧者ト雖或程度ノ數量ハ之ヲ消費スルノ狀態ナルカ故ニ之ニ對シテ課税スルハ假令輕税ナリト雖不可ナリ

(ロ) 醬油ニ課稅スル以上之ト權衡上畧ホ醬油ト效用ヲ同スルノ味噌其ノ他ノ調味料ニモ課稅セサルヘカラス而モ此ノ如キハ事實上實行困難ナルカ故ニ寧ロ醬油稅ヲ廢止スルヲ可トス

(ハ) 既ニ醬油稅ヲ廢止スル以上自家用醬油稅モ亦當然之ヲ廢止セサルヘカラス何トナレハ自家用醬油ハ農民カ其ノ收穫ニ係ル豆、麥ヲ原料トシテ製造シ自家ノ需要ヲ充タスニ過キサルモノナレハナリ

◇石油消費稅

石油消費稅ハ之ヲ廢止スルヲ相當ト認ム

(理由)

一 燈火用石油ノ消費ハ電氣瓦斯ノ發達ニ伴ヒ年次其ノ需要減縮シ今ヤ一部下層階級又ハ山間僻地ニ限ラルルノ狀況ニシテ大體ニ於テ本稅ハ細民ノ負擔ニ歸スルコト

二 石油消費稅ヲ存置スル以上ハ石油ト同一用途ニ供セラルル電氣瓦斯ニ對シテモ一樣ニ課稅ヲ爲スニ非サレハ負擔ノ衡平ヲ得ス然レトモ電氣瓦斯ニ對スル課稅ニ付テハ (イ)動力用ト燈火用トヲ問ハス總テ課稅スルトキハ著シク工業ノ發達ヲ阻碍スヘク (ロ)若シ之ヲ區別シテ燈火用ノミニ課稅セムトスルモ其ノ工業用ニ使用セラルルモノトノ消費量ヲ區別スルコト頗ル困難ニシテ殆ント不可能ナルヘク (ハ)又若シ供給者ノ徵收スル料金額ヲ標準トシ課稅スルコトトセハ各供給者每ノ其ノ料金ヲ異ニスルニ因リ稅金ノ負擔ヲ不公平ナラシメ且自家用消費ニハ課稅セサルノ結果ヲ生スヘク (ニ)又電燈ニ在リテハ電球ノ燭光ニ應シ課稅シ瓦斯ニ在リテハマントルノ使用數ニ應シ課稅スルコトトスルモ共ニ使用者ノ脫稅ヲ多カラシムルノミナラス前者ニ在リテハ臨時取付ノ裝飾燈等ノ調査ノ困難アリ後者ニ在リテハ瓦斯ストーブ其ノ他煮沸消費量トノ區別ヲ爲スコト困難ナルヘキカ故ニ電氣瓦斯ニ對シテハ今遽ニ課稅シ難キモノナルコト

三 本稅ノ收入ハ逐年減少ノ趨勢ニ在リテ現ニ其ノ歲入ハ百萬圓ニ滿タサルカ故ニ財源トシテモ重要ナルモノニ非サルコト但シ本稅ハ一石當リ一圓ニシテ之ヲ其ノ卸賣價格約五十圓又ハ小賣價格約七十圓ニ對シ僅ニ百分ノ二又ハ百分ノ一、四ニ過キサル輕稅ニシテ且從來格別苦情ナキ租稅ナルヲ以テ假令收入額少キモ財政逼迫ノ今日之ヲ廢止スルノ要ナシトノ說アルモ稅制ノ根本的整理ヲ爲サムトスル際ニ於テハ本稅ノ如キハ前述ノ理由ニ依リ廢止スヘキモノト認ム

◇賣藥印紙稅

賣藥印紙稅ヲ廢止スルノ可否

否トスル理由

(イ) 賣藥ハ醫師ノ指揮ヲ俟タスシテ自己ノ病症ニ適應スルモノヲ選用シ得ルカ故ニ醫師ノ診療ヲ受クルニ比シ甚タ輕便ナリ從テ之ニ從價一割程度ノ輕微ナル課稅ヲ爲スハ敢テ不當ニアラス

(ロ) 先進諸國ニ於テモ現ニ相當課稅シ居レリ

(ハ) 賣藥印紙ハ稅明治十五年以降課稅シ居レルモ其ノ間大ナル非難ノ聲ヲ聞カス之レ消費者ニ大ナル苦痛ヲ與フルコトナキニ因ルモノナルカ故ニ徒ニ理論ニ趨リテ九百萬圓ノ收入ヲ拋ツハ財政上容認シ難シ

可トスル理由

(イ) 賣藥ハ僻地ノ住民又ハ下層階級等ニシテ醫師ノ診療ヲ受クルコト能ハサル者ニ多ク使用セラレ且一般國民ニ對シテモ保健又ハ治病上相當必要ノモノナルヲ以テ之ニ課稅スルハ不可ナリ

(ロ) 賣藥トハ藥品ノ效能、用法、用量ヲ附記シ醫師ノ指揮ヲ俟タスシテ之ヲ使用セシムルコトヲ目的トシテ發賣スルモノヲ謂ヒ新藥新製劑トハ其ノ效能、用法、用量ヲ附記スルコトアルモ其ノ記述專問的ニシテ主トシテ醫師又ハ醫師ノ指揮ヲ受ケタル者ヲシテ使用セシムルコトヲ目的トシテ發賣スルモノヲ謂フモ其ノ疾病ヲ醫スルコトヲ目的トスル點ニ於テハ彼此差異アルコトナキニ拘ラス現在ニ於テハ賣藥ニノミ課稅シ新藥新製劑ニハ課稅セサルカ爲兩者ノ間ニ課稅ノ衡平ヲ失ス依テ若シ賣藥ニ對スル課稅ヲ存續スルモノトセハ當然新藥新製劑ニ對シテモ課稅シ更ニ新藥新製劑トノ權衡上藥局方ニ記載セラレタル醫藥ニ對シテモ亦課稅セサルヘカラス然リト雖モ斯ノ如キハ到底實行不可能ナル故ニ寧ロ賣藥ニ對スル課稅ヲ廢止スルヲ相當ト認ム

(ハ) 賣藥ハ代金ノ回收ニ相當時日ヲ要スル爲其ノ間當業者ハ印紙稅金ヲ立替ヘサルヘカラルカ如キ不都合アリ

依テ賣藥印紙稅ハ之ヲ廢止スルヲ相當ト認ム

乙　改正スヘキモノ

◇酒造稅、麥酒稅、酒精及酒精含有飲料稅

一　酒稅課稅ノ制度ニ付テハ現行ノ儘据置クヲ可トスルモ稅率ハ稅制整理ニ因ル歲入減補塡ノ必要上左記ノ通增率スルコト

酒類		
第一種	酒精分二十三度以下ノ濁酒	一石ニ付三十二圓
第二種	酒精分二十三度以下ノ清酒、白酒、酒精分三十度以下ノ味淋、燒酎	一石ニ付三十五圓
第三種	酒精分三十度ヲ超エ四十五度以下ノ燒酎	前號ノ金額ニ酒精分三十度ヲ超ユル一度毎ニ一圓三十五錢ヲ加ヘタル金額
第四種	酒精分二十三度ヲ超ユル濁酒、清酒、白酒酒精分三十度ヲ超ユル味淋及酒精分四十五度ヲ超ユル燒酎	酒精分一度毎ニ一圓六十錢

麥酒　一石ニ付二十圓

酒精及酒精含有飲料　一石ニ付三十七圓

酒精分二十三度以下ノモノ　酒精分一度毎ニ一圓六十錢

酒精分二十三度ヲ超ユルモノ

備考

酒稅率對照表

類	種	別	現行稅率	改正稅率	增稅步合
酒	第一種	酒精分二十三度以下ノ濁酒	一石ニ付三〇円	一石ニ付三円	割分區〇・〇七
		同　清酒	同　三五	同　三五	〇・〇七
	第二種	同　白酒	同　三五	同　三五	〇・〇七
		同　味淋酒	同　三五	同　三五	〇・〇七
		同　燒酎	同　三五	同　三五	〇・〇七
	第三種	同三十度ヲ超エ四十五度以下ノ燒酎	三十三圓ニ酒精分三十度ヲ超ユル一度毎ニ一圓二十五錢ヲ加フ	同上一圓三十五錢ヲ加フ	〇・八〇
	第四種	同二十三度ヲ超ユル濁酒	酒精分一度毎ニ一・五円	酒精分一度毎ニ一・六円	〇・〇七
		同　清酒	同　一・五	同　一・六	〇・〇七
		同　白酒	同　一・五	同　一・六	〇・〇七
		同三十度ヲ超ユル味淋酒	同　一・五	同　一・六	〇・〇七
		同四十五度ヲ超ユル燒酎	同　一・五	同　一・六	〇・〇七

酒精及酒精含有飲料　一石ニ付八円　一石ニ付二〇円　一・二

酒精分一度毎ニ一・五　但シ三十五圓ノ割合ニ下ルコトヲ得ス（酒精分二十三度以下一石ニ付　酒精分二十三度ヲ超ユルモノ酒精分一度毎ニ）　一石三十五圓ニ對シ〇・五七　酒精分一度當〇・〇七

現行酒造稅法、麥酒稅法、酒精及酒精含有飲料稅法ヲ統一シテ酒稅法ト爲スノ可否ノ區分ヲ釀造酒、蒸餾酒、再製酒ニ大別シ此ノ三者ニ對シ權衡ヲ得ル樣稅率ヲ相當ニ改正スルコトモ考究スヘキ一案ナリ其ノ理由左ノ如シ

可トスル理由

(イ) 現在酒類ニ關スル稅法ハ酒造稅法、麥酒稅法、酒精及酒精含有飲料稅法ノ三者ニ分レ各稅率、納期ヲ異ニスル爲負擔ノ權衡ヲ失シ又取締規定ノ如キハ同一事項ヲ各稅法ニ規定セル爲甚タ煩雜且不便ナリ依テ之ヲ整理統一スルヲ可トス

(ロ) 現在酒造稅法ハ其ノ適用ヲ清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎ニ限リ而シテ此等ノ酒類ノ定義ヲ細密ニ規定シ多少ニテモ右定義ニ該當セサルモノハ悉ク酒精含有飲料トシテ別箇ノ稅法ヲ適用スル爲定義ト異ナレル原料又ハ方法ヲ以テ酒類ヲ製造スルトキハ其ノ製品ハ定義ニ從テ製造シタルモノト實質上殆ント同シキニ拘ラス酒精含有飲料トシテ二圓タケ多額ヲ課稅セラレ負擔ノ權衡ヲ失スルノミナラス釀造上科學ノ應用自由ナラス從テ釀造技術ノ改善進步ヲ阻礙シ且原料ノ利用經濟的

ナラサルコトアリ依テ酒造税法ノ定義ヲ徹廢シ酒税ノ課税區分ヲ酒類ノ製造方法ニ從ヒテ釀造酒蒸餾酒再製酒ト爲スト同時ニ各酒類ノ税率ヲ權衡ヲ得ル樣適當ニ改正スルヲ可トス

然レトモ右ニ對シ左記ノ如キ不都合アリ

(イ) 各酒税法ヲ統一シテ酒造税法ノ定義ヲ徹廢シ總テノ酒類ヲ其ノ製造方法ニ依リテ分類シ釀造酒、蒸餾酒、再製酒ト爲スハ頗ル便利ナルカ如シト雖モ釀造酒、蒸餾酒、再製酒トハ如何ナルモノナルカニ付テハ依然定義ヲ設ケサルヘカラス而シテ其ノ定義ヲ明確ニ區分規定スルコト難キカ故ニ實際ノ課税ニ當リテハ釀造酒ナリヤ、蒸餾酒ナリヤ將タ再製酒ナリヤニ付疑問ヲ生シ折角現行税法ノ定義ヲ徹廢シタル效果ヲ收メ得サルニ至ルヘシ

(ロ) 酒造税法ノ定義ヲ徹廢シテ各酒類原料ノ制限ヲ解クニ於テハ現行法上燒酎原料ト爲ササル糖蜜ヲ以テ製造シタル酒類モ亦燒酎ト同一ニ課税セラルヘシ然ルニ糖蜜ハ甘藷ニ比シテ價格頗ル廉ナルヲ以テ法律改正後ハ燒酎原料トシテ廉價ナル糖蜜ノミヲ使用シテ甘藷ヲ使用セサルヘク從テ甘藷ノ價格ヲ暴落セシメ甘藷耕作地方ノ農民ニ打擊ヲ與フルノミナラス現在約七千ヲ算スル在來ノ燒酎業者ハ漸次其ノ生業ヲ失フニ至ルヘシ

(ハ) 現行酒税率ノ酒類ニ依リテ異レルハ夫々沿革ヲ有シ下層階級者ノ飲料ニ對シ特ニ税率ヲ輕減スル等各相當理由ヲ有スルモノニシテ最モ權衡ヲ得タルモノナリ從テ之ヲ改正スルニ於テハ却テ權衡ヲ失スルニ至ルヘシ

(ニ) 現行酒税ノ納期ハ酒造税法ノ酒類ニ付テハ製成後長キハ十七ケ月目麥酒、酒精及酒精含有飲料ハ何レモ製成ノ翌月ナルモ各種酒税法ヲ統一シ各酒類ノ定義ヲ徹廢シテ之ヲ三種ニ分類スル以上納期モ亦各酒類ヲ通シテ全ク同一ト爲スカ又ハ三種類別ニ定ムルノ外ナキモ斯クテハ各酒類ニ付キ其ノ納期ヲ不當ニ繰上ケラレ又ハ繰下ケラルルモノヲ生スヘシ

(ホ) 現在清酒、味淋、燒酎ニ付テハ滓引減量又ハ貯藏減量ヲ控除シタル殘石數ニ對シテ課税シツツアルモ定義徹廢ノ結果ハ清酒、味淋、燒酎ノ範圍明確ヲ缺クニ至ルヲ以テ全然此等ノ酒類ニ對スル控除ヲ廢止スルカ然ラサレハ滓引減量又ハ貯藏減量ヲ生セサル酒類ニ對シテマテ一樣ニ控除ヲ爲ササルヘカラサルニ至リ不衡平ナル結果ヲ生スヘシ

(ヘ) 現行法ニ依レハ酒造税法上ノ酒類ト麥酒並酒精及酒精含有飲料トハ各其ノ造石税ノ納期ヲ異ニセル爲其ノ納税擔保ニ關スル規定モ亦著シキ相違アリ卽酒造税法ニ依ル酒類ニ付テハ査定後十數ケ月ニ渉リテ造石税ノ納付ヲ猶豫スル爲納税保證物ヲ提供セシメ又麥酒、酒精、酒精含有飲料ニ付テハ査定ノ翌月中ニ納付スルノ制度ナルヲ以テ何等ノ保證物ヲ徵セス然ルニ各酒税法ヲ統一スル以上ハ納税擔保ニ關スル規定モ統一セサルヘカラサルモ前記ノ如ク納期ノ統一困難ニシテ從テ納税擔保ニ關スル規定ノ統一モ亦頗ル困難ナリ

之ヲ要スルニ酒税ニ關スル各種ノ税法ヲ統一シテ其ノ酒類ノ區分竝税率ヲ改正スルハ理想トシテハ可ナルヘキモ各種ノ税法ハ夫々特殊ノ沿革ヲ有スルカ故ニ其ノ實行甚タ困難ナルノミナラス強テ之ヲ統一セムトセハ前掲ノ如キ種々ノ不都合アルヲ以テ寧ロ大體ニ於テ現行ノ通之ヲ据置クヲ適當ト認ム前述ノ如ク酒税ハ此ノ際改正ノ必要ヲ認メサルモ直接税間接税全般ニ渉ル税制整理ノ結果歳入約千二百萬圓ノ減少ヲ來シ而シテ之カ補塡財源ハ之ヲ比較的負擔力ニ餘裕アル酒税ノ増徴ニ求ムルヲ最モ適當ナリト認メラルルニ依リ其ノ税率ヲ本文記載ノ通改正セムトス

而シテ各酒類、麥酒、酒精及酒精含有飲料ニ對スル現行税率ハ大體ニ於テ衡平ナルヲ以テ増税ノ割合モ總テ之ヲ一率ト爲スコトト爲セリ尤モ算出ノ結果生シタル圓位又ハ十錢位未滿ノ端數ニ付テハ徴税上ノ手數ヲ増加セサラムカ爲ニ總テ之ヲ圓位又ハ十錢位ニ切上ケタリ其ノ結果偶々各酒類ノ増税割合ニ多少ノ差異ヲ生スルニ至リタリト雖深ク考慮スル價値ナシト認ム唯麥酒ハ其ノ増税割合ヲ酒類ト畧ホ同一ニセハ一石當ノ税率十九圓トナルモ麥酒ハ比較的負擔力アル者ニヨリテ飲用セラルルノミナラス現在其ノ税率低キヲ以テ之ヲ二十圓ニ引上クルモ不當ニアラスト認メタリ

二 課税方法ハ現行造石税制度ヲ維持スルコト

(理由)清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎、麥酒、酒精及酒精含有飲料ニ對スル現在ノ課税方法ハ造石税制度ニシテ總テ此等ノ酒類ノ製成ヲ終リタルトキ其ノ石數ヲ査定シ該石數ヲ標準トシテ一定税率ヲ以テ課税スル制度ナルカ其ノ不可ナル點ヲ擧クレハ

(イ) 現行造石税制度ハ酒類製成ノトキ之ヲ査定シ其ノ石數ヲ標準トシテ課税スル爲製成後販賣スルニ至ルマテノ貯藏減量等卽消費セラレサル數量ニ對シテマテ課税スルコトトナリ消費税ノ本質ニ反ス

(ロ) 造石税制度ノ結果トシテ一旦酒類ノ製造ヲ了タル以上ハ之カ販賣ノ遲速ニ拘ラス一定時期ニ税金ヲ納付スルコトヲ要スルカ爲新酒販賣ヲ主トスル者ト古酒販賣ヲ主トスル者トノ間ニ甚シキ不衡平アリ卽前者ハ納期前ニ製造酒ノ大部分ヲ販賣シ從テ販賣代金ト共ニ收受セル税金ハ或期間之ヲ利用シ得ルニ拘ラス後者ハ之ニ反シテ税金ヲ立替納付セサルヘカラサルカ如キ不都合アリ

(ハ) 酒造税ノ納期ハ年四回ニシテ毎一回總税額ノ四分ノ一宛ヲ納付スヘキヲ以テ當業者ハ一時ニ多額ノ税金ノ調達ヲ要シ殊ニ納期ノ半數ハ會計年度末二月、三月ト連續スルカ故ニ一方ニ於テハ政府ハ國庫金ノ運用上不便多ク他方ニ於テハ酒造業者ハ時恰モ酒造資金ノ最需要期ニ際スルヲ以テ納税金ノ調達上頗ル苦痛ヲ感ス

等ノ理由ヲ以テ造石税制度ニ代フルニ左記方法ノ庫出税制度ヲ採用セムトスル案アリ

(イ) 製造時期ニ關係ナク現實酒類ヲ販賣スル爲倉庫ヨリ搬出スル都度其ノ石數ヲ査定シ之ニ課税スルコト從テ政府ノ査定ヲ受ケサレハ庫出ヲ爲スコトヲ得ス但シ貯藏中ノ檢酒其ノ他必要ノ場合

ハ收稅官吏ノ立會ヲ求ムルコト

(ロ) 前月中ノ庫出石數ニ對スル稅金ヲ翌月徵收スルコト但シ稅金ニ相當スル擔保ヲ徵シテ一定期間(例三ケ月)ノ延納ヲ認ムルコト

而シテ庫出稅ノ長所左ノ如シ

(イ) 庫出稅ハ庫出石數卽チ販賣石數ヲ課稅標準ト爲スカ故ニ造石稅ノ如ク貯藏減等ニ對シテマテ課稅スルカ如キ不都合ナク最モ消費稅ノ本質ニ適ス

(ロ) 稅金ハ庫出ノ翌月之ヲ徵收スルカ故ニ當業者ハ不當ニ稅金ヲ利用シ又ハ稅金ノ立替ヲ要スルカ如キコトナキハ勿論一時ニ多額ノ稅金ヲ調達セサルヘカラサルカ如キ苦痛ナク政府モ亦國庫金運用ノ圓滑ヲ期シ得ヘシ尤モ酒ノ販賣代金ハ必スシモ販賣ノ翌月回收セラルルモノニアラサルモ稅金ニ對シ擔保延納ノ制度ヲ認ムル以上ハ妨ナカルヘク又延納稅金ハ順次ニ之ヲ納付スルカ故ニ當業者ハ同一擔保ヲ數回利用シ得ヘク從テ一時ニ多額ノ擔保ヲ調達スルノ要ナシ

(ハ) 庫出稅ハ現行酒類造石稅ノ如ク稅額ノ約五分ノ一ニ過キサル擔保ヲ以テ稅金ノ納付ヲ長キハ十七ケ月ニ渉リテ猶豫スルカ如キコトナキヲ以テ國庫ハ滯納ニ因ル缺損ヲ免レ得ヘシ

右ノ如ク庫出稅ハ相當理由アリト雖モ又一面ニ於テハ左記ノ如キ缺點アリ

(イ) 庫出稅制度ヲ採用スル場合ニ於テハ窃ニ酒類ノ庫出ヲ爲シ以テ脫稅ヲ圖ル者無キヲ保シ難キヲ

以テ相當取締ノ必要アルモ多數ノ容器各個ニ政府カ封緘ヲ施ス如キコトハ到底不可能ナルヲ以テ酒ノ貯藏倉庫ヲ完全ナラシメ之ニ對シ政府カ銷鑰ヲ施スヲ最モ便利トスルモ現在ノ酒造倉庫ハ概ネ之ニ適セサルヲ以テ改築ヲ要スヘシ

(ロ) 酒類ハ製成後ニ於テ腐敗シ易ク殊ニ清酒ニ於テ其ノ危險最モ多キヲ以テ常ニ注意ヲ加ヘ檢酒ヲ爲ス必要アルモ其ノ都度收稅官吏ノ立會ヲ求メサルヘカラサル爲自然檢酒不行屆トナリテ腐敗ニ陷ルモノヲ增加スヘシ

(ハ) 庫出稅ト爲ストキハ庫出ノ都度收稅官吏ノ立會ヲ要スルヲ以テ取引ノ敏速ヲ妨ケ遂ニ商機ヲ逸セシムルコトアルヘシ

(二) 造石稅制度ニ於テハ酒類ノ製成ヲ終ルマテ監督ヲ要スルニ止マルモ庫出稅ニ於テハ其後尙酒類ノ賣盡サルル迄檢査監督ヲ要スルヲ以テ官民相互ニ煩累ナルノミナラス政府ハ爲ニ徵稅費ノ增加ヲ來スヘシ

庫出稅ハ以上ノ如キ缺點アルヲ以テ實行困難ナリ而シテ他ノ論者ハ右ノ如キ庫出稅ノ缺點ヲ緩和スル爲酒ノ庫出ヲ當業者ノ自由ニ委スルト同時ニ一定割合ノ貯藏減量ヲ認メ尙窃カニ庫出シテ脫稅スルノ危險ヲ防カムカ爲庫出石數カ製成石數ニ對シ一定割合ニ達セサルトキハ其ノ不足石數ニ課稅スルノ方法ヲ採ルヘシト爲ス而シテ此ノ方法ニ依ルトキハ

(イ) 倉庫ニ政府ノ鎖鑰ヲ施ス必要ナキカ故ニ倉庫ノ改築ヲ要スルカ如キコトナシ

(ロ) 檢酒ニ不便ナキヲ以テ酒ノ腐敗防止ニ何等ノ障害ナシ

(ハ) 酒ノ庫出ハ自由ナルヲ以テ當業者ハ商機ヲ逸スルカ如キコトナシ

(二) 政府ハ檢査監督上ノ手數ヲ省キ得ヘシ

ト謂フト雖モ斯ノ如ク一定割合ノ貯藏減量ヲ法令上認ムルノ結果ハ事實庫出迄ニ一定割合ノ減量ニ達セサルモノハ恰モ達シタルカ如ク申告シテ不當ニ稅金ヲ免ルヘク之ニ反シテ事實一定割合ノ減量ヲ超過スルモノハ販賣セサル貯藏減量ニ對シテマテ課稅セラルルコトトナリ結局現行造石稅制度ト同一ノ缺陷ヲ生シ庫出稅ノ本來ノ長所ヲ失フコトトナルヘシ

抑モ現行造石稅制度ヲ不可ナリト爲ス主タル現由ハ造石稅ハ貯藏減量等ニ對シテマテ課稅スルカ故ニ不衡平ナリト謂フニ在ルモ現在清酒、味淋、燒酎ノ如キ滓引ヲ爲シ又ハ貯藏中缺減ヲ生スル酒類ニ對シテハ相當量ノ控除ヲ爲シタル上課稅シツツアルカ故ニ全ク消費稅ノ本質ニ反スルモノトハ稱シ難ク且檢査監督モ庫出稅ニ比スレハ簡便ナル爲官民相互ニ便利ナルノミナラス多年施行ニ慣熟セルモノナルヲ以テ結局酒類ニ對スル課稅方法ハ現行ノ造石稅制度ヲ維持スルヲ最モ適當ト認ム

三

課稅標準ハ現行從量稅制度ヲ維持スルコト

(理由)酒類ニ對スル課稅ハ現在從量稅ニシテ酒類ノ品質ノ良否ヲ問ハス其ノ石數ノミヲ標準トシテ一定率ニ依リ課稅ス而シテ之ヲ不可ナリト爲ス者ハ酒類ハ品質ノ良否ニ依リテ其ノ價格ニ大ナル差異アルヲ以テ左記二方法ノ內一ヲ選ミテ之ヲ從價稅ト爲スヘシト主張ス

(一) 各酒類製造者ヲシテ前月中ニ於ケル實際販賣酒類ノ總價格ヲ申告セシメ之ヲ標準トシテ課稅スルコト但シ庫出稅ノ實行ヲ前提トス

(二) 各酒造家ヲ其ノ製造酒類ノ品位ニ依リテ數等級ニ分チ其ノ各造石數ニ前年中ニ於ケル各等級每ノ販賣價格ヲ乘シ以テ販賣總價格ヲ算出シ之ヲ標準トシテ課稅スルコト

而シテ從價稅ハ酒類ノ販賣價格ヲ標準トシテ課稅スルカ故ニ能ク消費者ノ負擔能力ニ適應セシメ得ヘク最モ消費稅ノ本質ニ適スルノミナラス酒價ハ財界ノ消長ニ伴フテ騰落スルカ故ニ稅額ニ屈伸力ヲ保タシメ得ヘシト謂フト雖モ

(イ) 各製造者ヲシテ前月中ニ於ケル實際販賣酒類ノ總價格ヲ申告セシメ之ヲ標準トシテ課稅スルトキハ不誠實ノ申告百出シ其ノ眞實價格ヲ調査シ難ク從テ課稅不衡平ニ陷ルヘキカ故ニ不可ナリ況ンヤ本案ハ庫出稅ノ施行ヲ前提トスヘキモノニシテ既ニ庫出稅ノ採用スヘカラサル以上從價稅ハ之ヲ採用スルニ由ナキモノナリ

(ロ) 各酒造家ヲ其ノ製造酒ノ品位ニ依リテ數等級ニ分チ其ノ各造石數ニ前年中ニ於ケル各等級每ノ販賣價格ヲ乘シテ販賣總價格ヲ算出シタル上之ヲ標準トシテ課稅スルノ案ハ稍從價稅ノ本質ニ

適フモノナリト雖モ各酒造家ノ等級ヲ定ムルコト頗ル困難ナルノミナラス假令一旦之ヲ定ムルモ各酒造家ノ酒ハ年ニ依リテ優劣ヲ生シ必スシモ一定不動ノモノニアラサルヲ以テ前年ノ實蹟ニ依リテ等級ヲ定ムルトキハ不衡平ナル結果ヲ生スヘク而シテ又時々等級ノ變更ヲ行ハムトセハ其ノ都度官民ノ紛爭ヲ惹起スヘク加フルニ前年中ニ於ケル各等級毎ノ酒價ノ調査モ亦頗ル困難ニシテ之亦實行困難ナリ

以上ノ如ク從價稅ハ實行頗ル困難ナリ而シテ現行從量稅制度ハ施行最モ簡單ニシテ且其ノ收入ハ單ニ造石數ノ增減ニ伴フテ增減スルニ止マリ價格變動ノ影響ヲ被ムルコトナキカ故ニ比較的歲入ノ確實ヲ期シ得ヘシ依テ酒ノ課稅標準ハ現行從量稅制度ヲ維持スルヲ適當ト認ム

酒稅ノ納期ハ之ヲ現行ノ儘据置クコト

(理由)酒稅ニ關スル制度ニ付現行制度ヲ維持スル以上ハ納期ニ付テモ現行ノ儘之ヲ据置クヲ相當トス唯現行酒造稅ノ納期ハ七月、十月、二月、三月ノ四期ナルカ其ノ第四期ヲ繰下クヘシト論スル者アリ其ノ主張スル所ニ依レハ現行納期ノ第三期、第四期ハ二月、三月ト連續シ恰モ清酒製造時季ニ際シ當業者ハ最モ酒造資金ヲ要スル時ナルヲ以テ其ノ納稅ニ困難ヲ感スル結果酒類ヲ濫賣シテ酒價ヲ攪亂シ又ハ滯納ヲ爲スニ至ルカ如キ弊害アルヲ以テ第四期ヲ四月又ハ五月ニ繰下クヘシト謂フニ在ルモ納期ノ斯ク二ケ月連續スルニ至リタルハ從來屢次繰下ノ結果ニシテ納稅ヲ要スル酒類ハ過半販賣

濟ニ係リ從テ稅金ハ販賣代金ト共ニ既ニ收受セルモノナルヲ以テ稅金ノ納付ニ困難ヲ感スルモノトハ認メ難キノミナラス此ノ上納期ヲ繰下クルニ於テハ愈々徵稅上ノ危險ヲ增大スルト同時ニ會計年度ノ關係上國庫ハ施行初年度ニ於テ數千萬圓ノ歲入減ヲ來スヲ以テ目下ノ財政情態ハ到底之ヲ許ササルモノナリ依テ酒造稅ノ納期繰下ハ不可ナリト認ム

課稅濟ノ酒精ヲ酒類又ハ酒精含有飲料製造ノ原料ト爲シタルトキハ該酒精ノ造石稅ヲ下戻スコト

(理由)現行法ハ酒類ノ原料ニ供スル酒類ニシテ同一製造場ニ於テ製造シタルモノナルトキハ之ヲ原料用トシテ取扱ヒ當初ヨリ課稅セサルモ他ノ製造場ニ於テ製造シタル課稅濟ノモノヲ買入レテ原料ト爲ストキハ其ノ製成酒ノ總量ニ對シテ課稅シ買入原料酒類ノ稅金ハ戻稅セサル制度ナリ然ルニ近來酒精ヲ原料トシテ酒類ヲ製造セムトスル者漸次多カラムトスルノ傾向アリ此等ハ一面酒類製造ニ關スル科學ノ應用竝技術ノ進步ヲ促進スル上ニ於テ相當奬勵スルヲ可トスルノミナラス酒精ハ其ノ大部分砂糖製造ノ副產物タル糖蜜ヲ原料トシテ製造シタルモノナルヲ以テ之ヲ酒類ノ原料ニ供スルハ畢竟現在ニ於ケル酒類ノ主要原料タル米、麥、甘藷等ノ消費ヲ節約スルコトトナルヲ以テ食糧政策上ヨリ見ルモ奬勵スヘキコトニ屬ス依テ酒類製造ノ原料ニ供スル酒精ハ其ノ同一製造場ニ於テ製造ニ係ルモノタルト否トヲ問ハス之ヲ免稅スヘシト論スルモノアリ之ニ反對スル者ハ酒精ノ造石稅ハ相當高率ナルカ故ニ廣ク戻稅ノ途ヲ開クニ於テハ實際使用セサル酒精ヲ使用シタリト稱シテ戻稅ヲ得

ムトスル者ヲ生スヘク而モ之ニ對スル取締不可能ナルヲ以テ同一製造場ニ於テ製造ニ係ル酒類ニノミ免税スル現行制度ヲ維持スヘシト主張スト雖モ

(イ) 現行制度ニ依レハ同一製造場ニテ製造ニ係ル原料酒類ヲ使用シテ酒類ヲ製造スル場合ニ於テ其ノ原料酒ハ免税セラルヘキモ此恩典ヲ受クルハ事實上大製造家ニ限ラレ而シテ小製造家ハ自ラ原料酒類製造ノ設備ナキモノ多キカ故ニ多クハ他ノ製造場ニ原料酒類ノ供給ヲ仰カサルヲ得ス結局原料酒類ト製成酒類ト二重課税トナルカ故ニ甚シク不衡平ナリ而モ二重課税ヲ免ルル爲新ニ原料酒類ノ製造ヲ爲サントスルモ其ノ製造場狹隘ニシテ擴張ノ餘地無キ場合ニ於テハ少シク距離アル場所ニ分工場ヲ設クルヲ便利トスルモ現行法ハ取締上ノ必要ヨリ斯ノ如キモノハ之ヲ同一製造場ト認メサルヲ以テ原料酒類製造ノ希望ヲ有シナカラ尚且二重課税ニ甘ンスルノ已ヲ得サルカ如キ不都合ヲ生スルコトアリ

(ロ) 現在混成酒製造業者ノ如キハ二重課税ヲ避クル爲混成酒ノ製造ヲ他ノ酒精製造場ニ委託シツツアルモ混成酒ノ優劣ハ主トシテ原料品ノ種類及其ノ配合量ニ依リテ定マルモノナルヲ以テ自己發賣品ノ全部ヲ一製造場ノミニ委託スルトキハ其ノ製造祕密ヲ知ラルル虞アルニ依リ一部ヲ甲製造場ニ委託シ他ノ一部ヲ乙製造場ニ委託シタル上之ヲ自己ノ手許ニ於テ混和スルカ如キ手段ヲ採リツツアルモ現行法ニ於テハ該混和ヲ一ノ製造行爲ト認メ更ニ其ノ總石數ニ課税スヘキモ

ノニシテ之ニ對シ税法ヲ嚴正ニ執行スルニ於テハ犯則タルヲ免レス而モ此等混成酒製造者ハ表面上單ニ販賣者ニ過キサルヲ以テ充分ノ檢査監督ヲ行ヒ能ハサルカ如キ狀態ニアリ依テ酒類ノ原料ニ供スル酒類ノ税金ハ大體ニ於テ之ヲ免税又ハ戻税スルヲ至當トス然レトモ凡テノ原料酒類ニ對シテ免税スルハ取締上實行不可能ナルカ故ニ原料酒精ニ限リ之ヲ免税又ハ戻税スルヲ相當ト認ム蓋シ酒精ハ其ノ含有酒精分ヲ課税標準ト爲セルト且現在工業用酒精ニ戻税シツツアル關係上造石數査定ノ都度其ノ酒精分ヲ檢査スルノミナラス之ヲ一斗入鍼力罐ニ收容シタル上收税官吏ニ於テ其ノ石數、酒精度數等ヲ表示シタル封緘紙ヲ以テ封緘ヲ施シ別ニ當該官廳ヨリ製造者氏名、石數、酒精度數等ヲ記載シタル査定濟證明書ヲ製造者ニ交付シ酒精ノ取引ニハ必ス該査定濟證明書ヲ添附スルヲ以テ原料用酒精ニ對シ使用前承認ヲ受ケシムル方法ヲ採ルニ於テハ收税官吏ハ當該酒精ヲ檢査シテ直ニ其ノ不正品ナリヤ否ヤヲ鑑別シ得ルカ故ニ戻税上弊害ヲ生スヘキ虞ナシ而シテ酒精ニ戻税スル權衡上清酒、濁酒、白酒、味淋又ハ燒酎ヲ原料ニ供シタル場合ニ於テモ戻税スルヲ至當トシ就中燒酎ハ其ノ實質酒精ト同シク唯其ノ酒精分ニ比シテ稍稀薄ナルニ過キサルヲ以テ酒精ニ戻税スル以上少クトモ燒酎ハ當然戻税スルヲ至當トスルカ如キモ此等酒類ノ内燒酎以外ノモノニ對スル課税ハ酒精ト異リ大體ニ於テ石數ヲ標準トシテ爲スモノナルヲ以テ査定ノ際必シモ其ノ酒精分ノ檢定ヲ行ハス又燒酎ニ付テハ酒精分ノ檢定ヲ行フ

モ之カ容器ヲ制限シ査定濟證明書ヲ一一添附スルカ如キハ實行不可能ナルヲ以テ各酒類ヲ通シテ其ノ一旦製造場外ニ移出セラレタル以上之ヲ他ノ同種ノ酒類ト混和シ又ハ割水ヲ爲シ其ノ他ノ加工ヲ爲スモ其ノ經過殆ント不明ナリ從テ此等加工セラレタル酒類ヲ買入レ原料ニ供スルモノニ對シテ迄戻稅ヲ爲スニ於テハ不正ノ行ハルル虞アルカ故ニ此等ノ酒類ニ對スル戻稅ハ不可ナリト認ム

六 現在清酒原料トシテ使用シ得ルハ燒酎ニ限レルヲ改メテ酒精又ハ燒酎ト爲シ其ノ使用量ヲ醪容量百ニ對シ攝氏驗温器十五度ノ時ニ於テ〇、七九四七ノ比重ヲ有スル酒精二、五以内ト定ムルコト

(理由)現在酒造稅法ノ定義ニ於テ清酒ト稱スルハ米、米麴、水ヲ原料トシテ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過シタルモノヲ謂ヒ此等原料ノ外麥、粟、玉蜀黍、稗、清酒粕又ハ燒酎ヲ原料トシテ醱酵セシメ之ヲ濾過シタルモノハ清酒ト看做ス旨ヲ規定セリ而シテ燒酎ノ混和量ニ付テハ明ニ之ヲ規定セサル爲無制限ニ之ヲ混和スルモ可ナリト論スル者アリ然レトモ元來酒造稅法ニ清酒ノ原料トシテ燒酎ヲ加ヘタルハ古來灘地方ニ行ハルル柱燒酎ノ慣行ヲ認メタルニ依ル而シテ柱燒酎ヲ添加スルコトハ幾分酒精分ヲ昂上セシムル結果ヲ來スモ其ノ主タル目的ハ濾過操作ヲ容易ナラシムルト滓下ケヲ容易ナラシムルコトニ在リ故ニ稅法ノ精神ハ無制限ニ多量ノ燒酎ヲ添加セシムルノ趣旨ニ非ラス然ラハ幾何ノ燒酎ノ添加ヲ認ムヘキヤニ付テハ法文上多少明確ヲ缺クノ嫌アリ或ハ清酒製成後ニ混和シ得ル燒酎又ハ酒精ノ量トノ權衡上醪容量ノ百分ノ一以内ニ限ルヘシトノ說アルモ清酒ニ混和スルハ防腐ノ目的ヲ以テスルモノニシテ兩者其ノ目的ヲ異ニスルヲ以テ之カ權衡上百分ノ一ニ制限セントスルハ理由ナキノミナラス近來釀造技術ノ進歩ニ伴ヒ酸酵中酒精、燒酎ヲ添加シテ清酒ヲ釀造セムトスルモノ漸次多カラントスルノ傾向アルカ故ニ混和スヘキ燒酎ノ量ヲ餘リニ狹ク限定スルトキハ釀造技術ノ進歩發達ヲ阻止スルノ虞アリ故ニ其ノ混入量ハ百分ノ一以上ト爲スヲ相當トス然レトモ清酒ハ其ノ含有酒精分二十三度ヲ限界トシ之ヲ超ユルモノハ稅率高キヲ以テ無制限ニ燒酎ノ混和ヲ認ムルモ此二十三度以上ニ達スルヤテ之ヲ混和スルコトハ採算上不利益ナルカ故ニ之ヲ敢テスルモノナカルヘク又無制限ニ混和ヲ認ムルニ於テハ査定ノ際一々試餾セサレハ適用スヘキ稅率ヲ確定スルコト能ハサルニ至リ官民共ニ到底其ノ煩ニ耐ヘサルニ至ルヘシ然ルニ普通清酒ノ酒精分ハ大體十八度内外ニシテ二十度以上ニ上ルモノハ極メテ稀ナルカ故ニ醪容量百ニ對シ純酒精分百分ノ二、五以内ノ燒酎ヲ混和スルコトトセハ前記ノ弊害ヲ除去シ得ルノミナラス採算上ヨリ來ル當業者ノ希望ヲ充シ得ルヲ以テ此程度ノ制限ヲ適當ト認メタリ而シテ既ニ燒酎ノ使用ヲ認ムル以上ハ同分量ノ純酒精分ヲ含有スル酒精ノ使用ヲモ認ムルヲ至當ト認ム

七 葡萄酒、果實酒ハ現在ノ通課稅外ニ置クコト

(理由)現在課稅外ニ在ル葡萄酒、果實酒ニ對シ課稅スヘシト爲ス者アリ其ノ主張スル所ニ依レハ葡萄

酒、果實酒ヲ課稅外ニ措キタルハ之カ製造發達ヲ奬勵セムトスルノ趣旨ニ出テタルモノナリト雖モ我國ノ如キ濕氣多キ土地ノ葡萄實ハ酸味多クシテ糖分少キカ故ニ到底外國產ニ拮抗スヘキ優良葡萄酒ヲ得ヘキ望ナク從テ此ノ上尙免稅ノ恩典ヲ與ヘテ其ノ發達ヲ圖ルモ到底其ノ目的ヲ達シ難キノミナラス葡萄酒ノ酒精分ハ平均七、八度ニ達シ致醉能力麥酒ニ優ルモノアルヲ以テ麥酒ト權衡上ヨリ見ルモ課稅スルヲ相當トナシ而シテ已ニ葡萄酒ニ課稅スル以上其ノ他ノ果實酒ニ對シテモ同樣ニ課稅スヘシト謂フニ在レトモ葡萄酒ノ如キ世界的飲料ノ生產ヲ助長スル政策ヲ繼續スルノ必要アルハ勿論葡萄酒、果實酒ハ致醉用トシテ用ヒラルルヨリモ寧ロ滋養補血劑トシテ用ヒラルルモノ多ク而シテ其ノ致醉用ニ供セラルルモノハ概ネ別箇ノ酒類トシテ課稅セラルル酒精含有飲料ノ原料ト爲スモノナルカ故ニ二重課稅ノ弊ヲ避クル爲旁之ヲ課稅外ニ置クヲ適當ト認ム

酒稅增稅額計算書

種別	酒名	製成高	內減	清濁引戻控除減	出業廢敗亡失工場用及移輸高免稅	課稅差引高	現行稅率	稅額	改正稅率	改正稅額
第一種濁酒		二〇、六五五石		一石	五石	二〇、六〇〇石	三〇	六二、八〇〇円	三一	六九、二〇〇円
第二種	清酒	五、〇四八、六六六		五二、三一	五、九六	四、七八、三〇一	三五	一五、七〇三、九三五	三五	一六、一四〇、五三五
第二種	白酒	九、四八八		一	五三	九、四六六	〃	三二、三六八	〃	三三〇、二六〇
第二種	淋酒	八、四三九		一、七九	九八	八、六三一	〃	二、八六、二四六	〃	三、〇三五、九七〇
第二種	燒酎	二三、六六		一、三一	三、四一	一〇八、九九	〃	三五九、六七	〃	三、八一四、六五五
第三種	燒酎	一五〇、〇〇八		一一、六〇〇	—	二五七、四〇八	四十度ト四五、五〇ヲ	一一、七一一、〇六四	超一度一石四十八圓五十錢 一円	一一、四八四、二八八
第四種	燒酎	一、〇〇七 六〇、〇一七ヲ		一〇 六〇〇ヲ	—	五九、四九七 五九、四七七ヲ	一ヲ一円五	九、一一六	一円六	九五〇、六七
計		五、五三、九三六		二五七、八五一	七九、〇四二	五、一一〇、二四六三		一七四、八九三、九六四		一八五、五六〇、二八五
麥酒		四四一、〇四四		—	七八、四四四	三六二、五九〇	一八円	六、五三六、六一〇	一〇円	七、二五一、八〇〇
酒精		四八、五一〇三 四八、〇八二ヲ		—	二九、〇六六 三、一八五	一一、〇一一〇 一八、九九六	一ヲ一円五	二八四、九九四	一ヲ一円六	二〇三、九九四
酒精含有飲料	二十四度未滿	二一、四七四		—	二、〇一六	一一〇、四五八	三五円	七一六、〇三一〇	酒精分二十三度以下三七	七五六、九四六
	二十四度以上	三五六、八三五六ヲ		—	三五六、八三五六	三五七、五八六	一ヲ一円五	五三五、二三五	二ヲ十三度超酒精分一円分 一円六	五七〇、九三六
合計		六、〇一五、六六三	二五七、八五一	一六二、六五五	五、九五五、一三七			一六二、九五六、八六一		一九四、四三、九六一
差引增		一一、四八、一〇〇圓								

（附）酒類專賣ニ關スル調査

酒類專賣案

一　酒類（清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎、麥酒、酒精及酒精含有飲料）ノ製造、販賣ヲ政府ニ專屬セシムルコト

二　外國酒類ハ政府之ヲ輸入シテ賣下クルコト

三　政府ハ專賣實施ノ當時現在スル酒類製造場、器具、機械及現在酒類ヲ總テ買收スルコト但シ交通又ハ製造上不便ナル製造場ニ付テハ器具、機械及現在酒類ニ限リ之ヲ買收スルコト

四　酒類製造業者ニ對シテハ營業權ノ補償トシテ各製造場最近三ヶ年ノ賣上金額ノ平均一ヶ年分ノ二割ヲ交付スルコト但シ專賣實施前一年以內ニ於テ開業シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

五　卸商ハ原則トシテ元賣捌人ニ指定スルコト其ノ指定ヲ受サル者ニ對シテハ營業權ノ補償トシテ各人最近三ヶ年ノ賣上金額ノ平均一ヶ年分ノ一割ヲ交付スルコト但シ專賣實施前一年以內ニ於テ開業シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

六　買收費及補償交付金ハ國債ヲ發行シ額面百圓ニ付九十五圓ノ割合ヲ以テ計算交付スルコト但シ酒類ノ買收費ハ現金ヲ以テ交付スルコト

七　酒類ノ賣下價格ハ少クトモ專賣施行ノ際其ノ當時ノ市場價格以上ニ騰貴セシメサル程度ニ於テ之ヲ定ムルコト

八　酒類ノ販賣ニ付テハ專賣官署ノ外元賣捌人小賣人ヲ指定シ之カ販賣ヲ爲サシムルコト

九　酒類ノ賣下ニ付テハ製造所ヨリ各地販賣官署所在地迄政府ノ費用ヲ以テ回送シ且酒類ノ等級ヲ區分シテ各等級毎ノ小賣價格ノ制限ヲ設ケ大體全國同一ナラシムルコト

一〇　專賣制度施行ニ付テハ可成現在ノ各專賣官署ヲ利用スルモ酒類ノ主產地等必要ノ場所ニハ新ニ地方專賣局、同出張所又ハ倉庫ヲ新設スルコト

右ノ如キ方法ニ依リ製造專賣ヲ實行スルヲ可トスル理由左ノ如シ

一　酒類ノ主要原料ハ米、麥、甘諸等ナルカ此等ハ國民ノ常食品ナルカ故ニ將來或ハ食料需給ノ關係上酒類ノ造石高ヲ制限セサルヘカラサル必要ヲ生スルコトナキヲ保セス斯カル場合ニ現今ノ如ク民營ニテハ生產額ヲ制限スルコト因難ナリ假ニ此ノ因難ヲ排シテ石數ヲ制限ストスルモ需給ノ關係上價格ノ暴騰ヲ來スノ虞アリ專賣制度ニ於テハ造石高ノ增減ハ最モ容易ニシテ而モ價格ヲ騰貴セシメサルコトヲ得ヘシ

二　酒類ヲ專賣ト爲スニ於テハ比較的大規模ノ下ニ酒類ノ製造ヲ爲シ得ルカ故ニ現在ニ比シテ生產費ヲ節約シ得ヘク從テ酒價ヲ低減シ得ヘシ

三　現在市場ニ供給セラルル酒類中ニハ製造者ノ經濟上ノ打算又ハ製造技術ノ未熟等ニ因リ腐敗ニ傾キ若ハ酒質劣惡ナルモノ稀ナラサルカ故ニ國民保健上ニモ影響スル所尠シトセス然レトモ之ヲ專賣ト爲スニ於テハ此等ノ弊害ヲ減少シ得ルノミナラス進テ酒類品質ノ改善統一ヲ圖リ得ヘシ

四　酒稅率ノ漸次增加スルニ從ヒ酒造業者ニシテ脫稅ヲ企ツル者少カラサルニ依リ現在ニ於テハ其ノ製造ニ關シ周到ナル檢查監督ヲ要スル爲其ノ手數容易ナラサルノミナラス多額ノ經費ヲ要スルモ專賣制度ニ於テハ此等ノ手數ト費用ヲ節約シ得ヘシ

然レトモ酒類ノ製造專賣ニハ左記ノ如キ缺點アリ

一　酒類殊ニ清酒ノ如キハ其ノ製造中又ハ貯藏中ニ於テ腐敗ノ危險多ク現在當業者ハ不斷細心ノ注意ヲ拂ヒツツアルニ拘ラス尙且絕對防止ハ不可能ニシテ廢棄ニ屬スルモノ少カラサル狀態ナルヲ以テ之ヲ專賣ト爲シタル曉ニ於テ腐敗ノ防止ニ要スル手段幷之ニ要スル經費ハ蓋シ僅少ナラサルヘク到底政府事業ニ適セサルモノト認ムル已ニ酒類造石高ノ八割四分ヲ占ムル清酒ニシテ專賣ニ適セストセハ他ノ酒類ノミ之ヲ專賣ト爲スモ何等實益ナキモノト認ム

二　酒類ハ其ノ原料、製造技術又ハ酒類需要ノ關係上夫々製造時期アリ特ニ酒類ノ大部分ヲ占ムル清酒ニアリテハ普通冬期ニ限ラレ人員使用上不經濟ナリ而シテ四季釀造ヲ行ハント欲セハ冷却裝置等ニ多大ノ設備費ヲ要スルヲ以テ一時固定資本ヲ要スルコト多キノミナラス一方買收シタル工場ハ不用トナリ

或ハ收支償ハサルニ至ルノ虞アリ

三　現在酒類免許者ノ數ハ一萬二千餘ヲ算シ我國各種ノ產業中ニ於テ重要ノ地位ヲ占ムルカ故ニ專賣制度ノ實施ニ依リ一時此等多數當業者ノ生業ヲ奪フハ不可ナリ

四　酒類ノ賣下後販賣者ニ於テ割水其ノ他加工ヲ爲スコトヲ防遏スル必要上酒類ハ總テ之ヲ罐詰ト爲シ封緘ヲ施ササルヘカラサル爲假令正味一石當ノ賣下價格ハ專賣施行當時ノ市場價格ヲ限度トシテ定ムルモノトスルモ尙且消費者ノ負擔ハ現在ニ比シテ增加スルニ至ルヘシ

五　酒類ノ品費カ一般社會ノ進步竝嗜好ノ向上ニ伴ヒ漸次進步發達スルノ傾向ニアルハ之カ製造ヲ當業者ノ自由競爭ニ委スルニ基クモノナリ然ルニ今之ヲ政府ノ專賣ト爲スニ於テハ獨占事業ノ通弊トシテ勢ヒ品質ノ改善發達ヲ沮害スルコトトナルヘシ

六　酒類ノ品質ハ其ノ製造場ノ位置、使用原料、氣候、釀造技術等ノ關係ニ依リ千差萬別ナルヲ以テ其品質ノ良否ヲ甄別シ之ヲ數等級ニ分チタル上各等級每ノ小賣價格ヲ定ムルカ如キコトハ實行困難ナルヘシ

之ヲ要スルニ酒類專賣ノ不可ナル點少カラスト雖就中淸酒ノ腐敗シ易キコトハ專賣制度實行上ノ一大支障ニシテ收支計算ヲ待ツ迄モナク到底專賣ニ適セサルモノト認ム

前述ノ缺點ヲ避クルカ爲左記ノ如キ方法ヲ以テ酒類ノ販賣專賣ヲ行フノ案モアリ

一　酒類ノ免許ヲ與ヘテ民間ニ製造セシメタル上政府之ヲ買收シテ賣下クルコト

二　政府ハ專賣施行ノ當時現在スル酒類ヲ總テ買上クルコト

三　外國酒類ノ輸入販賣、酒類ノ賣下價格、賣下方法等總テ製造專賣ニ同シ

而シテ販賣專賣ノ可ナル理由左ノ如シ

一　販賣專賣ハ政府自ラ酒類ヲ製造セサルモノナルヲ以テ其ノ製造中ノ腐敗危險ヲ避クルコトヲ得

二　販賣專賣ニ於テハ現在ノ製造業者ハ概ネ其ノ事業ヲ繼續シ得ヘキカ故ニ製造專賣ノ如ク一時ニ多數者ヲシテ生業ヲ失ハシムルコトナク之ト同時ニ製造設備ノ買上費モ節約スルコトヲ得

三　製造獨占ノ弊ヲ避ケ得ルヲ以テ品質ノ改善發達ヲ阻礙スルカ如キコトナシ

然レトモ販賣專賣ニモ亦左記ノ如キ缺點アリ

一　販賣專賣ニ於テハ酒類製造中ニ於ケル腐敗ノ危險ハ之ヲ避ケ得ヘシト雖モ貯藏中ニ於ケル腐敗ハ之ヲ如何トモ爲シ難シ何トナレハ酒類ノ腐敗ハ其ノ酒質ノ如何及貯藏方法ノ完否ニ因ルモノナルモ收納當時酒質ノ健全ナリヤ否ヲ鑑別スルコトハ頗ル困難ナルノミナラス收納後ニ於ケル貯藏方法ヲ完備ナラシムルコトハ政府事業トシテ頗ル困難ナルモノナレハ酒類腐敗ノ危險ハ製造專賣ニ於ケル場合ト大體異ナルコトナシ

二　酒類ノ品質ハ千差萬別ナルカ故ニ一々其ノ品質ヲ鑑別シテ公平ニ收納價格ヲ定ムルコトハ頗ル困難ナ

リ從テ收納ノ都度官民間ニ紛爭ヲ惹起スルニ至ルヘシ

三　酒類ノ製造場ハ現ニ一萬二千ヲ算シ山間僻陬ノ地ニマテ散在スルヲ以テ酒類ノ收納販賣ニ要スル手數多大ナリ

如上ノ事由ニ依リ販賣專賣モ亦不適當ナリト認ム

第一　酒類製造場數及免許人員表

種別	清酒	濁酒	白酒	味淋	燒酎	麥酒	酒精	酒精含有飲料	計
製造場數	一〇、二〇七	一四九	一三	一七二	一、五六六	一	三九	三五二	一二、五〇九
免許人員	九、七九三	一四八	一三	一六八	一、五四七	一	三九	三五〇	一二、〇六九
備考									

一　清酒乃至燒酎ハ大正十年一月一日現在麥酒、酒精及酒精含有飲料ハ大正十年三月一日現在トス

第二　酒類製成高表

酒別	大正四酒造年度	同五年度	同六年度	同七年度	同八年度	平均
清酒	三、九六二、五九一石	四、七〇一、五九三石	五、一九〇、〇〇七石	五、一九二、四八五石	六、一八六、四八六石	五、〇四六、六二八石
濁酒	一七、七九六	一九、一三七	一九、九二九	一七、八六八	二八、五四三	二〇、六五五
白酒	七、九〇八	九、〇七〇	一〇、二七五	九、七九三	一〇、三九五	九、四八八
味淋	六六、一八六	八〇、九二五	九二、一〇七	一〇五、五七二	一〇三、三五五	八九、四二九
燒酎	二六八、三三	三一三、七七八	三九五、二一七	三九五、二四四	三五四、三一〇	三七三、一七六
麥酒	二四八、八一八	三四五、一四二	四三、四八五	五一、五三五	六七七、二四九	四四一、〇四四
酒精	九、三三〇	八、一八二	三、六八四	一、七四九	三、〇七〇	五、一〇三
酒精含有飲料	一二、九四二	一五、九七七	二四、二五五	三六、八六〇	六一、三三四	三〇、〇六〇
合計	四、五九二、八六二	五、四九三、八〇四	六、一一七、〇〇九	六、二七一、〇九六	七、六〇三、六四二	六、〇一五、六八三

第三　酒類腐敗亡失石高表

酒別	大正四酒造年度	同五年度	同六年度	同七年度	同八年度	平均
清酒	三、五六〇石	一九、五〇七石	八、九五六石	一二、一八七石	七、五〇五石	一六、一四三石
濁酒	一三四	八七	一五	二四	一七	五五
白酒	—	五	一〇	—	—	三
味淋	一五	四九	九	七一	三	二九
燒酎	七八	六六九	四七	五、七六六	二八九	一、三七〇
合計	三、七八七	一〇、三一七	九、〇三七	一八、〇四八	七、八一四	一七、六〇一

腐敗酒內譯表

種別	大正四酒造年度	同五年度	同六年度	同七年度	同八年度	平均
政府ノ承認ヲ得酒類トシテ飲用スヘカラサル處置ヲ施シタルモノ	一四、五九一石	七、八四九石	一、五五八石	二、三四八石	四、六九八石	六、二〇九石
燒酎ノ製造ニ供スルモノ	一三、九三四	六、一二八	四、三〇九	二、九九一	二、〇八〇	五、八八八
合計	二八、五二五	一三、九七七	五、八六七	五、三三九	六、七七八	三、〇九七

第四　酒類輸移出高表

酒別	大正四年度	同 五年度	同 六年度	同 七年度	同 八年度	平均
清酒	六一、〇四一石	六七、四六六石	六四、八四五石	五八、九八〇石	四六、九三五石	五九、八五三石
濁酒	—	—	—	—	—	—
白酒	四五	六〇	五五	五一	三六	四九
味淋	六六八	八三一	九九四	九一〇	九五〇	八六九
燒酎	一五八	三五三	八一九	八四九	一、一七六	六七一
參酒	三一、八〇九	五一、九三〇	八六、二〇〇	一〇〇、九四三	一二〇、三八九	七八、四五四
酒精	—	—	—	—	—	—
酒精含有飲料	四、一八一	六七二	一、四〇四	一、六九一	二、一二〇	二、〇一六
合計	九八、八九二	一三一、三一三	一五四、三一七	一六三、四二四	一七一、六一六	一四一、九一三

第五　酒類輸入高表

酒別	大正六年 數量	大正六年 價額	大正七年 數量	大正七年 價額	大正八年 數量	大正八年 價額	平均 數量	平均 價額
葡萄酒（樽入）	一〇三千利	一六三円	九九千利	一〇一円	一五四千利	三七九円	一九千利	二四八円
同（樽入）	二、一九三	五四七	三、二六七	一、一七一	四、一七一	二、〇四三	三、二一〇	一、二五四
シヤムパンウ井スキー（罎入）	三三	八四	二四	一〇〇	三六	二一七	二八	二六
同（其ノ他）	一八	三〇	二七	六八	三三	八七	二六	三二
其他ノ酒類	一三三	二三一	一二五	二六七	二一四	三一六	二一一	二六五
計	一九六	一四六	二三一	三〇五	二五九	三八一	二三〇	二七七
酒精	二、六三九	一、八一	三、七六三	二、一一三	四、七六七	三、四三三	三、七三三	二、三三九
	—	—	—	—	七六利	三三	二五利	一

◇砂糖消費稅

一　砂糖ノ課稅方法ハ現行ノ通其ノ色相ニ依ルコト

（理由）

(イ)　現行ノ砂糖ニ對スル課稅方法ハ主トシテ其ノ色相ニ依ルモノナルカ故ニ之カ區分ハ市場取引ノ實際ニ適合セサルノミナラス爲ニ故ラニ砂糖ニ著色ヲ爲シテ稅率ノ低減ヲ圖ルカ如キ不自然ノ行爲ヲ爲ス者ヲ生スルニ至レルヲ以テ之カ課稅區分ヲ左ノ如ク改正シ砂糖ノ製造方法及市場取引ニ適合セシムルコトモ亦研究スヘキ一案ナリ

(1)　砂糖　第一種　粗糖　　百斤ニ付　二圓

甲　樽入黑糖、樽入白下糖　　同　三圓

乙　甲ニ屬セサル含蜜糖　　同　五圓

丙　分蜜糖

第二種　精製糖（粗糖ニシテ和蘭標本第二十號以上ノモノハ精製糖ト看做ス）　百斤ニ付　九圓

第三種　氷砂糖、角砂糖、棒砂糖、粉末糖其ノ他類似ノモノ　同　十圓

(2)　糖蜜　第一種　氷砂糖ヲ製造スルトキニ生スル糖蜜

甲　糖分ヲ蔗糖トシテ計算シタル重量全重量ノ百分ノ七十ヲ超エサルモノ　百斤ニ付　三圓

乙　其ノ他ノモノ　糖分ヲ蔗糖トシテ計算シタル重量百斤ニ付九圓ノ割合ヲ以テ算出シタル金額

第二種　其ノ他ノ糖蜜

甲　糖分ヲ蔗糖トシテ計算シタル重量全重量ノ百分ノ七十ヲ超エサルモノ　百斤ニ付　二圓

乙　其ノ他ノモノ　同　三圓

(3)　糖水　同　八圓

右案ニ依ルトキハ現行制度ニ比シ其ノ課税區分擴大セラルルカ爲分蜜粗糖ノ上等品ト精製糖ノ裾物トハ品質ニ於テ格段ノ懸隔ナキニ其ノ税率ノ差甚シキニ至リ且右ノ案ハ一見砂糖ノ色相ニ依ル區分ヲ廢スルコトヲ得ヘキカ如キモ精製糖ト分蜜粗糖トノ區分ニ付テハ依然和蘭標本ヲ使用スルヲ要シ徹底的ナラス又分蜜粗糖、含蜜粗糖ノ名稱ハ普通ニ區分呼稱スルモ兩者ノ何レニ屬スヘキヤノ限界ニ付テハ結局含有糖分ノ多少ノ程度ニ依リ判別スルノ外ナク就中輸入糖ノ査定ニ付テハ其ノ製造方法ヲ知悉スルコト能ハサルノ結果其ノ果シテ分蜜糖ナルヤ含蜜糖ナルヤニ付課税上ノ紛爭ヲ生シ易キ處アル等幾多ノ缺點アリテ慣熟セル現行法ノ課税區分ヲ改正スルニ足ルノ價値ナキモノト認ム

(ロ)　或ハ分蜜粗糖ト精製糖トハ其ノ含糖分畧々同一ニシテ效用ニ於テモ何等格段ナル差異ナキノミナラス之カ市場價格ニ見ルモ兩者ノ値開キハ僅ニ税率ノ差ト精製費用トヲ併セタルモノノ差ニ止マルノ狀況ナレハ之カ課税率ヲ强テ區分スルノ要ナキカ如シ然リト雖モ此ノ如キハ多少皮相ノ觀ニ過クルモノアリ何者精製糖ハ分蜜粗糖ニ比シ其ノ品位高ク事實上高尙ナル菓子ノ原料ニ使用セラレ又家庭等ニ在リテモ之ヲ使用スルハ多少奢侈的消費ニ屬ス從テ精製糖ニ對スル擔税力ハ普通分蜜糖ニ比シ大ナルモノアリト斷スルコトヲ得ヘキカ故ニ之ヲ同一率ニ置クヘシトノ說ハ採用スルニ足ラサルモノト認ム

(ハ)　或ハ又砂糖ハ其ノ種類ニ依リ分蜜粗糖、精製糖ノ如キ中流以上ノ消費ニ屬スルモノト含蜜粗糖ノ如キ主トシテ下層階級ノ消費ニ屬スルモノトアルヲ以テ宜シク含蜜粗糖ニ對シテハ課税ヲ免除スヘシトノ說アリ此ノ說モ亦以下記述スル理由ニ依リ之ヲ採用スルノ價値ナキモノト認ム卽チ(1)現行ノ砂糖消費税率ハ之ヲ六階級ニ分チ克ク含蜜粗糖（黑糖、白下糖、赤糖ノ類）分蜜粗糖（黃双糖ノ類）精製糖（白糖類）再製糖（氷砂糖、角砂糖類）トノ間ニ適當ナル階級ヲ設ケアリテ富者ト貧者トハ自ラ其ノ負擔能力ニ應スル砂糖ノ消費ヲ爲スコトヲ得ヘキカ故ニ論者ノ如ク强テ含蜜粗糖ニノミ免税スルノ必要ナク(2)而シテ之ヲ實際ノ消費狀態ニ觀ルニ含蜜粗糖ハ主トシテ地方農村ニ於テ消費セラルルモ其ノ消費者ハ必シモ下層民ノミナラス然ルニ之ヲ免税スルコトトセハ相當擔税力アル者モ亦免税セラルルコトナリ他ノ課税砂糖ヲ消費スル者トノ間ニ

不權衡ヲ生スヘキノミナラス(3)同一效用ヲ有スル砂糖ノ內ニ於テ課稅品ト非課稅品トノ區別ヲ嚴正ニ施行スルカ如キハ實際上至難ナルコトニシテ延テ其ノ査定ニ當リ從來ヨリハ一層ノ紛爭ヲ釀スニ至ルヘク(4)含蜜粗糖ノ免稅ノ結果ハ歲入ニ於テ約四百八十萬圓以上ヲ失フニ至ルハシ

二　現行砂糖消費稅率ハ之ヲ改正セサルコト

(理由)

(イ)　砂糖消費稅率ハ其ノ制定以來財政上ノ必要ニ因リ數次ノ改正ヲ經、漸次昂騰シタルヲ以テ其ノ稅率ノ過重ニ失ストノ說アリ然レトモ之ヲ他ノ間接國稅ト比較スルトキハ例ヘハ織物消費稅ニ於テハ絹綿交織物、綿織物等ニ對シテモ價格一割ノ消費稅ヲ課スルカ如キ酒造稅ノ淸酒一石ニ付三十三圓ヲ課スルカ如キ將又專賣法ニ依ル煙草ノ負擔等ニ比スルトキハ決シテ砂糖消費稅率ノミ偏重ナリト云フコトヲ得ス試ニ各種課稅物件ノ市場價格ト稅率トノ割合ヲ調査スルニ別紙第一號表ノ如シ而シテ砂糖ノ既往十年間ニ於ケル消費量ノ趨勢ニ鑑ミルニ時ニ或ハ財界ニ於ケル景氣ノ消長ニ左右セラレタルコトアリト雖モ大體ニ於テ別紙第二號表ノ如ク年次其ノ消費額ヲ增進スルノ傾向アリテ現行稅率カ其ノ消費量ニ影響ヲ及ホササルモノナルコトヲ認メ得ヘシ

(ロ)　現行ノ砂糖消費稅率ハ既述セシカ如ク幾多ノ階級ニ區分シ課稅ヲ爲セルモ試ニ精製糖百斤當消費稅率ニ付諸外國ノ消費稅率トヲ比較研究スルニ別紙第三號表ニ揭クルカ如タ米國ニ於テハ消費稅ノ制度ナク伊國ハ最近專賣ヲ實施シタルモノ其ノ以前ハ百斤十六圓五十二錢ヲ課シ又英國ハ十三圓五十二錢、和蘭ハ十三圓五錢墺匈國ハ九圓二十七錢ニシテ孰レモ我國ヨリハ高位ニ在リ只佛國及獨逸ハ我國ヨリモ多少低位ナルモ大體ニ於テ我國ノ現行消費稅率ハ高率ナリト謂フコトヲ得サルヘシ

(ハ)　更ニ諸外國ニ於ケル砂糖消費稅ト關稅トヲ合算シタル金額ニ付比較研究スルニ別紙第三號表ニ示スカ如ク我國ノ十三圓六十五錢ニ比シ英、伊、獨、墺匈、和蘭ノ諸國ハ大體高ク米、佛兩國ハ低位ニ在ルコトヲ示セリ而シテ我國ニ於テハ臺灣領有以來大ニ糖業ノ振興ヲ促進セシムルノ政策ヲ實行シ一面數次ノ關稅改正ヲ行ヒテ大ニ國內產糖ノ保護助長ヲ圖ル所アリタレハ今ヤ既ニ自給自足ノ域ニ達シテ餘剩ノ砂糖ヲ海外ニ輸出シ得ル迄ニ至リタルカ故ニ之カ關稅率ノ按排ニ付テハ多少研究ノ餘地ナキニアラサルモ現行ノ消費稅率ハ之ヲ改正スルノ要ナキモノト認ム

三　飴ハ砂糖トノ權衡上之ニ課稅スルコトトシ飴ハ糖蜜ト看做スヘキ旨ヲ砂糖消費稅法中ニ規定シ之ニ對シテ百斤ニ付二圓ノ課稅ヲ爲スコト

(理由)飴ハ砂糖ノ代用品トシテ消費セラレ殊ニ別紙第四號表ニ示スカ如ク近來製菓業ノ發達ニ伴ヒ飴ノ需要漸次增加スルノ傾向アルヲ以テ砂糖トノ權衡上之ニ課稅ススルノ必要アリト認ム仍ホ飴製造業ハ近時著シテ大工場組織ノモノ續出シ東京、名古屋、大阪方面ニ在リテハ一日平均二十石乃至百

石餘ノ碎米ヲ使用シテ新式機械ニ依ル砂糖ノ製造操作ト殆ント等シキ規模ヲ以テ飴ノ製造ヲ爲ス者アルニ至リ爲ニ別紙第四號表ニ示スカ如ク小製造場ハ逐年淘汰ヲ受ケテ其ノ數ヲ減少スル傾向アルヲ以テ最早之ニ對シ課稅ヲ爲スモ徵稅上敢テ困難ナラスト認ム

或ハ飴ノ製造者中ニハ之ヲ原料トスル菓子ノ製造業ヲ兼スル者多ク從テ兩者ノ限界明瞭ヲ缺キ其ノ課稅物體ヲ捕捉スルニ苦シム場合アリト謂フト雖モ此等菓子製造業者ハ大體先ツ水飴ヲ製造シ然ル後之ニ加工ヲ爲スヲ常トスルカ故ニ飴ノ課稅數量ヲ査定スルコトハ左迄困難ナラス

或ハ飴ノ消費ハ主トシテ中流以下ノ兒童又ハ下層階級ノ消費ニ屬スルカ故ニ之ヲ課稅スルハ不可ナリト謂フト雖モ近時製菓業ノ發達ト一般衞生思想ノ普及トニ依リ從來ノ如ク粗製飴ヲ消費スル者著シク減少シ多ク高等ナル菓子例ヘハドロップ、ミルクキヤラメル、ゼリービンズ其ノ他種々ノ菓子原料トシテ使用スルニ至リタレハ之カ稅率ヲ砂糖消費稅率中ノ最下級ナル糖蜜ト同樣百斤ニ付二圓ト爲ストキハ決シテ苛重ナルモノニアラサルヘシ

四 煉乳原料砂糖戻稅法ヲ改正スルコト

(理由)明治四十一年現行煉乳原料砂糖戻稅法制定當時ニ於テハ我國煉乳業ノ發達未タ十分ナラス其ノ製造方法及品質ニ於テ歐米ノ輸入品ニ比シ遙ニ遜色アリ從テ輸入ノ數量多額ニ上ルノ狀況ニアリタルト煉乳カ主トシテ育兒用トシテ使用セラルルノ故ヲ以テ之カ原料砂糖ニ對シ消費稅ニ相當スル金額ヲ下戻スルヲ可トスヘシトノ趣旨ヲ以テ戻稅法ヲ規定セラレタルモノニシテ爾來我國ノ煉乳業ハ長足ノ發展ヲ遂クルニ至レリ然ルニ一面ニ於テ近來歐風菓子ノ製造業大ニ勃興シ來リ遂ニ法制ノ缺陷ニ乘シ砂糖ノ戻稅ヲ受ケタル煉乳ヲ使用シテビスケット、ミルクキヤラメル其ノ他ノ菓子ヲ製造シテ事實上砂糖消費稅ノ負擔ヲ免カレムトスル者ヲ出シタルノミナラス又一方輸出菓子、糖果原料砂糖戻稅法ニ依リテ右ノ菓子又ハ糖果ヲ輸出スルニ於テハ更ニ砂糖ニ對スル消費稅ノ戻稅ヲ請求スルコトヲ得ヘキコトトナリ居レルヲ以テ煉乳原料砂糖戻稅法ヲ改正シ一旦砂糖ノ房稅ヲ受ケタル煉乳ハ菓子又ハ糖果ニ使用スルヲ得サルノミナラス若之ヲ使用シタルトキハ消費稅ヲ徵收スヘキコトト爲シ之カ爲命令ヲ以テ砂糖ノ戻稅ヲ受クヘキ煉乳ノ容器罐ヲ一封度入ニ制限シテ相當取締ヲ施シ以テ他ノ消費稅ヲ課セラレタル砂糖ヲ原料トスル菓子又ハ糖果トノ間ニ於ケル負擔ノ權衡ヲ計ルヲ相當ト認ム

(備考)

(一) 菓子原料ニ使用スル煉乳ハ普通石油罐大ノ容器ニ簡單ニ收容運搬セラレ又直接消費ノ煉乳ハ普通之ヲ一封度入罐詰トシテ嚴密ナル眞空裝置ヲ爲シテ變敗ヲ防止スルノ方法ヲ採ルモノナルカ故ニ命令ヲ以テ使用器容ヲ制限スルニ於テハ相當之ヲ取締リ得ヘシト認ム

(二) 煉乳輸入高ノ消長及內地生產高竝ニ菓子糖果原料ニ使用セル煉乳ノ數量等ハ別紙第五號表ニ

之ヲ詳記ス

第一號表

間税課税物件ノ市場價格及税率ノ割合

課税物件	單位	大正九年中全國平均市場價格	税率	市價ニ對スル税率ノ割合
黑糖	百斤當	二八・八六〇円	二・〇〇〇円	〇六九
白下糖	同	三一・一七〇	二・五〇〇	〇七九
赤糖	同	三一・七七〇	三・〇〇〇	〇九四
第二種分蜜糖	同	三三・四三〇	五・〇〇〇	一四九
精製糖	同	四三・六二〇	九・〇〇〇	二〇六
氷砂糖	同	五三・二四〇	一〇・〇〇〇	一八八
清酒	一石當	一〇一・五九〇	三三・〇〇〇	三二六
濁酒	同	六八・六八〇	三〇・〇〇〇	四三八
白酒	同	一二八・三三〇	三三・〇〇〇	二五七
味淋	同	一三三・三三〇	三三・〇〇〇	二四七
燒酎	同	一一〇・七三〇	三三・〇〇〇	二九八
參酒	同製成	一〇九・〇四〇	一八・〇〇〇	一六五
醬油	一石當	四八・九五〇	一・三三〇	〇二七
溜油	同	六一・〇四〇	一・六五〇	〇二七
石油	一石當	五〇・一〇〇	一・〇〇〇	〇〇二
賣藥	(定價ノ八掛ヲ卸賣價格トス)	八〇〇	定價ノ一割	一二四

第二號表

明治四十四年以降砂糖消費税課税額調

(地方及品種ニ依リ多少ノ差異アリ)

年度	課税斤數	消費税額	一人當消費量	實下價格ニ對シ	平均
明治四十四年	三〇〇、五七九、八二四斤	一六、七三、四一五円	一〇、八斤	五九九	五九九
明治四十五年	三七〇、九一五、五〇八	一八、四九〇、一三五	九、三		
大正元年	四五四、三三一、一七六	二三、〇〇五、七五七	一〇、八		
大正二年	四五五、四九四、二二三	二三、九九五、〇四八	一〇、三		
同三年	五一七、一七二、九九六	二五、六三五、五四七	九、九		
同四年	五六〇、七八六、四六二	二八、三八八、四八五	一〇、六		
同五年	五九五、三六二	三一、一〇七、一〇二	一一、一		
同六年	六二四、五九五、三六二	四一、四三九、二一七	一三、五		
同七年	七六三、六一八、四五三	四六、五四〇、〇四一	一七、三		
同八年	七九二、三一三、五二三	四三、〇八七、九九三	一三、二		
同九年	七一一、八四五、五〇五				

第三號表

各國砂糖税率一覽 (精製糖百斤當)

國名	消費税	關税	合計	摘要
本邦	円 九・〇〇〇	円 四・六五〇	円 一三・六五〇	
英	一三・五二七	一四・八七〇	二八・三九七	

米	一	八●〇〇三	八●〇〇三	
佛	五●八〇五	一●三九三	七●一九八	
伊	一六●五二一	三三●九八七	三九●五〇八	最近專賣實施以前ノモノ
獨	四●〇一五	一一●四七二	一五●四八七	
墺	九●二七六	六●三四九	一五●六三五	
匈	一三●〇五七	—	一三●〇五七	和蘭ノ關稅ハ相手國ニ依リ異ルヲ以テ計算セス
和蘭				

備考

一、本表ハ大正九年十一月臺灣總督府調査糖業統計ニ依ル

二、外國ノ稅額ハ純分比價ニ依ル

三、稅率ニ數個ノ階級アルモノハ最高稅率ニ依ル

第四號表

飴ノ製造場數及生產額調

年次	製造場數	飴ノ生產數量	內 內地消費	內 外國輸出
大正六年	大正五年八月一日現在 四、一四七	五七、〇五七、七九七 斤	五七、〇四七、〇九五 斤	一〇、七〇二 斤
同七年	同	五六、二五七、七五一	五六、二五三、七四〇	四、〇一一
同八年	同	六二、三七八、三五五	六二、三七一、七九三	六、五六二
同九年	大正十年七月一日現在 一、九九四	六八、〇〇九、一四八	六八、〇〇三、五四九	五、五九九
平均	（大正五年ニ比シ減二、一五三）	六〇、九二五、七六二	六〇、九一九、〇四四	六、七一八

備考

一 內地消費數量ニ對シ課稅ニ因ル消費減ヲ一割ト見込ミ百斤ニ付二圓ノ稅率トシテ歲入一、〇九六、五四二圓トナル

第五號表

煉乳輸入高ノ消長及內地製造高竝菓子、糖果ニ使用スル煉乳ノ數量調

年次	煉乳ノ輸入高	煉乳ノ內地製造高	計	內菓子、糖菓ニ使用セシ數量	同上煉乳ニ包含スル砂糖斤數	同上ニ對スル戾稅金額
大正三年	七、七二二、六〇五 封度	二、九七九、九四七 封度	一〇、六九二、五五二 封度	五、五六七 封度	一、九四四 斤	一七五 円
同四年	五、五五四、一〇四	四、三〇五、三九五	九、八五九、四九九	二三一、六六〇	七四、八二二	六、七二四
同五年	五、〇五九、五九七	六、六九六、七五八	一一、七五六、三五五	七四八、九七四	二三一、五四五	二〇、八三九
同六年	六、〇七七、四三三	七、四二三、六九一	一三、五〇一、一二四	八五九、三八四	二六九、四八二	二四、二四九
同七年	四、三二六、九六八	一〇、六七七、五四四	一五、〇〇四、五一二	一、三二七、八八〇	三三六、六九〇	三〇、二九三
同八年	五、四一四、六〇〇	一五、〇八四、〇一六	二六、四九八、六二六	一、六二八、六六四	五一六、五六二	四六、五〇八
同九年	六、二六八、五一七	一一、六〇〇、八四〇	一七、八六九、三五七	一、八五七、四八二	五九五、九九四	五三、六三九

（附記）

一、最近三箇年間ニ於ケル輸出菓子、糖菓原料砂糖戾稅法ニ依リ戾稅セシ砂糖斤數、稅額左ノ如シ

年度	輸出菓子、糖菓戾稅法ニ依ル戾稅砂糖斤數	戾稅金額
大正七年度	七七、五五三 斤	三、八七五 円
同八年度	九七、六三六	四、八八二
同九年度	二六六、四八〇	一三、三二三

二、大正六、七、八年ニ於ケル煉乳ノ輸出高及煉乳製造場數左ノ如シ

年次	煉乳ノ輸出高	煉乳製造場數
大正六年	四〇二、六六七斤	四三
同七年	—	四〇
同八年	一、八九八、六七七	四二

（附）砂糖專賣ニ關スル調査

◇砂糖專賣案

砂糖ヲ政府ノ專賣ト爲シ之ニ依リ一面財政上收入增加ヲ圖ルト共ニ他方ニ於テ食料政策上其ノ市場價格ヲ適當ニ調節スルコトモ亦研究ヲ要スル一案ナリ然レトモ其ノ可否ヲ論スルニ當リテハ先以テ如何ナル方法ニ依リ專賣ヲ實行スヘキヤヲ研究スルヲ要ス仍テ我國ニ於テ比較的施行シ易シト認ムル二、三ノ案ニ就キ以下各其ノ計畫ノ大樣ヲ揭ケ然ル後其ノ得失ニ付研究スル所アルヘシ

第一案（本案ハ內地ヲ目的トシタルモノニシテ臺灣、朝鮮等ニ於テハ專賣ヲ施行スルト否トヲ問ハサルモノトス）

(一) 粗糖（和蘭標本色相第十八號未滿ノ砂糖）ニ限リ免許ヲ與ヘテ民間ニ製造セシメ其ノ全部ヲ政府ニ買上ケ而シテ其ノ一部ハ消費用トシテ其ノ儘賣下ケ一部ハ政府自ラ之ヲ精製シテ賣下クルコト

(二) 內地ニ必要ナル砂糖ニ付テハ臺灣又ハ朝鮮ヨリ之ヲ購買スルコト

(三) 外國糖ハ砂糖ノ內地又ハ臺灣等ノ產額ト輸出ノ狀況トニ鑑ミ必要ニ應シテ粗糖ニ限リ之ヲ輸入シ一部ハ其ノ儘消費用トシテ賣下ケ一部ハ之ヲ精製シテ賣下クルコト但シ將來ハ外國輸入糖ニ相當スル數量ヲ臺灣ニ於テ生產セシムル方針ヲ採ルコト

(四) 政府ハ官營精糖工場ニ充用スル爲內地ニ於ケル現在ノ十三箇ノ精糖工場ヲ買上クルコト但シ專賣施行

前一年以内ニ工場ヲ設置シタルモノハ除外スルコト

(五) 買上ヲ爲ス精製糖工場主ニ對シテハ其ノ工場及設備ヲ買上クルノ外營業補償金トシテ最近三ヶ年ノ賣上金額ノ平均一ヶ年分ノ二割ヲ交付スルコト右代金トシテ國債ヲ發行シ額面百圓ニ付九十五圓ノ割合ヲ以テ計算交付スルコト

(六) 砂糖ノ卸賣業者ニ對シテハ專賣ノ實施後成ルヘク元賣捌人ニ指定シ從テ此等ニ對シテハ失業交付金ヲ交付セサルコト但シ其ノ指定ヲ受ケサル者ニ對シテハ失業交付金トシテ前項ニ準シ算出シタル一ヶ年卸賣代金ノ一割ヲ交付スルコト

(七) 粗糖ノ買上及購買金額ハ內地、臺灣分共各其ノ生產費ニ百分ノ十ノ利益ヲ加ヘタルモノトスルコト

(八) 少クトモ專賣施行ノ際ハ砂糖ノ市場價格ヲ騰貴セシメサルコトヲ目的トシ政府ノ賣下價格ハ最近ノ市場卸賣價格ヲ標準トスルコト但シ元賣捌人ニ賣渡ス價格ハ其ノ手數料トシテ百分ノ五ヲ控除スルコト

(九) 輸出糖、移出糖及酒精又ハ煉乳ノ原料トナルヘキ砂糖ハ前號ノ價格ヨリ現行消費稅相當額ヲ控除シタル特別定價ヲ以テ賣下クルコト

(〇) 賣下ニ付テハ現在ノ地方專賣局、其ノ出張所及新設出張所等ニ於テ大體全國一樣ノ價格ヲ以テ元捌人ニ賣渡スコト尙砂糖ノ製造地又ハ移入地ヨリ此等販賣官署迄送付スル運賃ハ政府ニ於テ支辨スルコト

(二) 專賣官署以外ノ賣捌機關トシテ元賣捌人及小賣人ヲ指定スルコト而シテ其ノ販賣價格ニ付テハ一定ノ制限ヲ附シ全國大體同一ナルコトヲ期スルコト

(三) 砂糖專賣制度施行ニ付テハ現在ノ各專賣官署ヲ利用シ又現在ノ精製糖工場ハ大體其ノ儘之ヲ使用スヘキ執務上已ムヲ得サルモノニ付テハ相當ノ官署ヲ新設スルコト

(三) 砂糖ノ買上及販賣ノ爲特ニ主要ナル地點ニ限リ倉庫上屋ヲ設クルモノトス而シテ其ノ他ノ地方ニ在リテハ少クトモ當分ノ間ハ成ルヘク民間ノ倉庫ヲ利用スルコト

本案ヲ可トスル事由

(一) 專賣ニ因リ相當ノ歲入增加ヲ圖リ得ヘキコト

砂糖ハ生活上ノ日用品ニシテ其ノ數量ハ逐年多額ニ上ルヘク殊ニ製糖業ハ從來民間事業トシテ相當利益アルモノナルカ故ニ之ヲ專賣ト爲スコトニ因リ政府ハ相當ノ歲入增加ヲ圖ルコトヲ得ヘシ

(二) 砂糖ノ價格ヲ統一シ且適當ニ之ヲ調節シ得ヘキコト

專賣ニ依リテ全國的ニ砂糖ノ價格ヲ統一シ且必要ニ應シテ適當ニ其ノ賣下價格ヲ定ムルコトヲ得ヘキカ故ニ從來ノ如ク糖業會社ノ聯合協定等ニ因リ不自然ナル市場價格ヲ現出スルカ如キトラスト的弊害ヲ除去スルコトヲ得ヘシ

(三) 生產費ヲ節約シ得ヘキコト

製糖業ヲ官營トナシ各精糖工場ヲ統一的ニ經營シ得ル結果生產費ノ節約ヲ期スルコトヲ得ヘシ殊ニ會

社幹部ノ俸給賞與ノ如キ然リ

(四) 帝國内ニ於ケル粗製糖業者ノ發達ヲ助成スルコトヲ得ヘキコト

砂糖官營後ニ於テハ精製糖ノ原料トシテ成ルヘク帝國内ノ產糖、主トシテ臺灣糖ヲ使用シ從來外國ヨリ輸入シタルモノヲ排除スヘキカ故ニ帝國内糖業ノ發達ヲ助長スルコトヲ得

(五) 製糖事業ヲ堅實ナラシメ且從來ノ精製糖會社ノ企業資金ハ之ヲ他ノ確實ナル事業ニ轉用シ得ヘキコト

製糖業ハ民業トシテ從來相當ノ收益ヲ擧ケ居ルモ外國糖ノ壓迫等ニ依リ消長アルヲ免レス之ヲ政府ノ專賣ト爲ストキハ事業比較的堅實トナルト同時ニ從來ノ企業者ハ相當額ノ交付金ヲ得安ンシテ他ノ確實ナル事業ニ轉シ得ヘシ

本案ヲ否トスル事由

(一) 專賣ニ因ル歲入ノ增加ハ比較的多大ナラス一方ニハ國債負擔ヲ增加スルコト

砂糖專賣ノ主タル目的ハ之ニ依リ國庫歲入ノ增加ヲ圖ラムトスルコト言ヲ俟タス而シテ專賣ニ因ル歲入ノ增加額ハ主トシテ砂糖賣下價格ノ決定如何ニ因ルヘシト雖モ我國ニ於ケル砂糖ノ稅率及價格ハ今日ニ於テモ既ニ相當高價ニ達シ居ルカ故ニ更ニ專賣ニ因リ市價ヲ昂騰セシムルコトハ生活ノ安定ヲ妨クルモノニシテ實行困難ナリト認ム從テ歲入ノ增加ハ比較的大多ナラスシテ一方ニハ多額ノ國債負擔ヲ增加スルニ至ルヘシ

(二) 精製糖ノ製造ヲ官營トスルモ生產費ノ節約ハ多キヲ望ムコトヲ得サルコト

精製糖ノ製糖工場ハ内外市場ニ於ケル砂糖ノ需要事情ニ應シ一ケ年ノ内數ケ月間ノ作業ヲ爲スニ過キサルヲ普通トス然レトモ民營ニ於テハ其ノ休業中職工勞役者ノ大部分ヲ便宜他ノ職ニ就カシメ得ルノ便アリト雖モ之ヲ官營トスルトキハ此ノ如キ便法ヲ實行スルコト至難ナルヘキヲ以テ比較的多クノ人件費ヲ要スヘキノミナラス政府事業ハ會計法ノ束縛其他監督又ハ統計等ノ必要ニ依リ民業以外ニ人員ヲ要スルコトアルヲ以テ之カ生產費ノ節約ハ多キヲ望ムコトヲ得サルヘシ

(三) 專賣ニ因リ重要ナル民業ヲ奪フニ至ルヘキコト

糖精事業ハ或國ニ於ケル重要ナル事業ノ一ニシテ既往ニ於テ各製糖會社ハ相當ノ利益ヲ擧ケ居レリ是レ卽チ專賣ヲ行フヘシトノ議アル所以ナルヘシト雖モ既ニ鐵道國有ニ依テ鐵道業ヲ國家ノ獨占ト爲シ煙草及鹽ヲモ專賣ト爲シタル上更ニ製糖業ヲ政府ノ獨占トナストキハ民間事業ヲ減縮スルコト頗ル大ナルヘシトノ譏ヲ免レサルヘシ

(四) 專賣ハ砂糖輸出貿易ニ不便ナルコト

今ヤ帝國ノ砂糖生產高ハ甘蔗作付ノ豐作ナル年ニ於テハ優ニ帝國内ノ消費ヲ充シテ過剩糖ヲ輸出シ得ルニ至リ且年々生產ノ增加ヲ見ルノ趨勢ニ在リ又内地產糖ノ外、外國糖ヲ輸入精製シテ支那、南洋其ノ他ノ方面ニ每年約一億六、七千萬斤ノ多額ナル輸出ヲ爲シツツアリテ實ニ我國ニ於ケル有望ナル輸

出貿易品ノ一トナレリ然ルニ若シ專賣制度ヲ施行スルニ至ラハ海外市場ニ於ケル砂糖價格ノ騰落ニ應シテ時々敏捷ニ其ノ賣下價格ヲ變更シ若ハ先物契約等ヲ爲スコト最モ困難ナルヘケレハ民間經營ニ於ケルカ如ク機宜ノ處置ヲ採リ巧ニ外國品トノ競爭ヲ試ミ以テ販路ノ擴張ヲ圖ルカ如キ商畧ヲ施スコト能ハス延テ輸出ノ增進ヲ期スルコト困難ナルモノアルヘシ加之一歩ヲ進メテ考フレハ政府專賣ノ後ハ或ハ輸出ヲ斷念スルノ外ナカルヘシ

(五) 砂糖ノ官營ヲ理想的ニ徹底セシメムニハ粗糖ノ製造マテモ官營ト爲スヲ要スヘキコト

專賣ヲ理想的ニ實行シ砂糖生產費ノ節約ヲ計リ消費ニ對スル取締ヲ周到ニシ以テ收入ノ增大ヲ期セムカ爲ニハ黑糖其他ノ合蜜糖及分蜜粗糖ノ製造迄モ之ヲ官營ト爲スニアラサレハ完全ニ其ノ目的ヲ達成スルコト能ハサルヘシ然レトモ全部ノ砂糖製造事業ヲ政府ノ獨占トスルカ如キコトハ到底我國ノ現在ニ照シ之ヲ實行シ得サルモノト認ム

(六) 砂糖ノ專賣ニ付テハ前記各號ノ外尙左ノ缺點アルコト

(イ) 專賣實施ニ因リ獨占事業ノ通弊トシテ勢ヒ事業ノ改良又ハ發達ヲ遲緩セシムルニ至ルノ虞アリ

(ロ) 他ニ競爭者ナキ爲自然ニ砂糖ノ品質劣下スルノ虞アリ

(ハ) 營業補償交付金等ニ關シ一時ニ多額ノ公債ヲ發行スルニ因リ自然一般公債價格ニモ影響ヲ及ホスニ至リ公債政策上ノ不利ヲ誘起スルノ虞アリ

(二) 外國ニ於テ各種ノ專賣制度ノ增加ニ對シ之ヲ非難スル者ハ專賣ノ實施ニ際シ政治的運動行ハレ又元賣捌人、小賣人ノ指定等ニ關シテモ之ヲ政治的勢力ニ利用セラルルコト多クシテ遂ニ幾多ノ弊害ヲ釀成シ亦收拾スヘカラサルニ至ルヘシト爲セリ故ニ我國ニ於テモ專賣制度ノ增加ニ付テハ多少此ノ間ノ諸點ニ付考慮ヲ拂フノ要アリト認ム

要スルニ砂糖專賣第一案ハ我國ノ現狀ニ照シ財政上ノ收入比較的多カラス且現行消費稅制度ニ比シ專賣ヲ利トスル點ヨリモ寧ロ之ヲ不利トスルノ點ニ重キヲ置カサルヘカラサルモノト認メラルルカ故ニ之ニ對シ巨額ノ資本ヲ投下シテ此際專賣ヲ斷行スルカ如キハ不可ナリト認ム若シ夫レ專賣ノ利益トシテ揭ケラレタル生產費ノ節約若ハ價格ノ調節ノ如キニ至リテハ必シモ專賣ヲ待ツノ要ナク別箇ノ方法ニ依リ之ヲ行ヒ得ヘシト認ム

第二案 (本案モ內地ヲ目的トスルモノニシテ臺灣、朝鮮等ニ於テハ專賣ヲ施行スルト否トヲ問ハサルモノトス)

(一) 粗糖及精糖共免許ヲ與ヘテ民間ニ製造セシメ粗糖ハ全部政府ニ收納シテ一部ハ粗糖ノ儘消費用トシテ賣下ケ一部ハ之ヲ精製糖業者ニ賣下ケ精製糖ノ製造ヲ爲サシメ之ヲ政府ニ收納シテ一般ニ賣下クルコト

(二) 內地ニ必要ナル砂糖ニ付テハ臺灣、朝鮮又ハ外國ヨリ之ヲ購買スルコト

(三) 粗糖ノ買上及購買金額ハ內地、臺灣共各其ノ生產費ニ百分ノ十ノ利益ヲ加ヘタルモノトスルコト

(四) 精製糖ノ原料用粗糖ハ大體粗糖ノ收納價格ニ政府カ收納保管中ノ實費トシテ百分ノ一ヲ加ヘタル特別定價ヲ以テ賣下クルコト

(五) 精製糖ノ賠償金額ハ原料粗糖ノ特別定價賣下價格ニ精製ニ要スル生產費及百分ノ五ノ利益ヲ加ヘタルモノニ依ルコト

(六) 少クトモ專賣施行ノ際ハ砂糖ノ市場價格ヲ騰貴セシメサルコトヲ目的トシ專賣後ノ賣下價格ハ最近ノ市場卸賣價格ヲ標準トスルコト但シ元賣捌人ニ賣渡ス價格ハ其ノ手數料トシテ百分ノ五ヲ控除スルコト

(七) 輸出糖、移出糖及酒精又ハ煉乳ノ原料トナルヘキ砂糖ハ前號ノ價格ヨリ現行消費稅相當額ヲ控除シタル特別定價ヲ以テ賣下クルコト

(八) 賣下ニ付テハ現在ノ地方專賣局其ノ出張所及新設出張所ニ於テ大體全國一樣ノ價格ヲ以テ元賣捌人ニ賣渡スコト尙砂糖ノ製造地又ハ移入地ヨリ此等販賣官署迄送付スル運賃ハ政府ニ於テ支辨スルコト

(九) 專賣官署以外ノ賣捌機關トシテ元賣捌人及小賣人ヲ指定スルコト而シテ其ノ販賣價格ニ付テハ一定ノ制限ヲ附シ全國大體同一ナルコトヲ期スルコト

(〇) 砂糖專賣實施ニ付テハ現在ノ各專賣官署ヲ利用スヘキモ收納、回送、販賣等ノ爲必要ナル地方ニハ相當ノ官署ヲ新設スルコト

(二) 砂糖ノ買上及販賣ノ爲ニ主要ナル地點ニ限リ倉庫上屋ヲ設クルモノトス而シテ其ノ他ノ地方ニ在リテハ少クトモ當分ノ間ハ成ルヘク民間ノ倉庫ヲ利用スルコト

(三) 砂糖ノ卸賣業者ニ對シテハ專賣ノ實施後成ルヘク元賣捌人ニ指定シ從テ此等ニ對シテハ失業交付金ヲ交付セサルコト但シ其ノ指定ヲ受ケサル者ニ對シテハ失業交付金トシテ國債ヲ發行シ額面百圓ニ付九十五圓ノ割合ヲ以テ計算交付スルコト

本案ヲ可トスル事由

(一) 第一案ニ於ケルカ如ク重要ナル民業ヲ奪フノ弊ナキコト

本案ハ販賣ノミヲ官營トスルモノナルカ故ニ第一案ノ如ク現在ノ重要ナル民業ヲ奪フコトナシ從ツテ精製糖業者ニ對スル營業場ノ買收及營業補償金ヲ要セス爲ニ第一案ニ比シ國債負擔ヲ減少スルノ利アリ

(二) 砂糖製造業者ハ官營ノ結果比較的薄利トナルヘキモ其ノ事業ノ基礎ハ專賣ノ爲ニ鞏固トナルコト

砂糖ハ世界的貨物ナルカ故ニ甘蔗作付ノ豐凶及外國糖生產額ノ過不足ニ因ルノ關係ハ直ニ內地ノ糖價ニ影響ヲ及ホシ爲ニ製糖業者ハ時ニ或ハ意外ノ利益ヲ占ムルコトアリト雖場合ニ依リテハ非常ニ損失ヲ被ルコトモ亦少カラス然レトモ政府ノ專賣トナリタル曉ニ於テハ民營ノ場合ニ比シ若干薄利トナルヘキモ相當利益ヲ包容スル確實ナル賠償價格ヲ以テ必ス買上ケラルルカ故ニ却テ其ノ事業ノ基礎ヲ鞏

固ナラシムルノ利アリ

(三) 其ノ他第一案ニ付キ專賣ノ利點トシテ掲ケタル第一、二、五ノ諸點ハ本案ニモ共通ナル利點ナリトス

本案ヲ否トスル事由

(一) 生產費ノ節約ヲ期シ得サルコト

本案ハ砂糖ノ製造ヲ官營トセサルカ故ニ事業ヲ統一シ其ノ結果ニ依ル生產費ノ節約ヲ期スルニ由ナシ

(二) 其ノ他第一案ニ付專賣ヲ否トスル理由トシテ掲ケタル第四ノ輸出貿易ニ不便ナル點及第五、六ニ掲ケタル諸點ハ本案ニモ亦共通ノ諸點ナリトス

要スルニ本案モ亦歲入ノ增加比較的大ナラサルノミナラス却テ專賣ノ爲ニ輸出貿易ノ發展ヲ妨クル等諸種ノ點ニ於テ不利ト認メラルル所尠カラサルヲ以テ實行ノ價値ナキモノト認ム

第三案

內地及臺灣等ニ於ケル糖業ヲ一團ト爲シテ專賣ヲ實施シ含蜜粗糖(黑糖、白下糖等)ニ限リ免許ヲ與ヘテ民間ニ製造セシメ其ノ製造セラレタルモノハ全部政府ニ買上ケタル後一般ニ賣下ケ又分蜜粗糖(主トシテ臺灣產糖)及精製糖ノ製造ニ付テハ總テ之ヲ政府ノ獨占ト爲シ其ノ製造シタル分蜜粗糖ノ一部ハ消費用トシテ之ヲ賣下ケ一部ハ政府自ラ之ヲ製精シテ賣下クルコト

此ノ案ニ依ルトキハ從來臺灣及內地ニ於ケル糖業者ノ擧ケ得タル企業利益ヲ政府ニ於テ取得シ得ヘク從テ國庫收入ノ點ヨリ見レハ大ニ有望ナル方法ナルカ如シト雖モ飜テ內容ヲ觀ルトキハ內地ニ於テ分蜜粗糖ヲ製造スル者ハ沖繩縣ニ於ケル臺南製糖株式會社及東洋製糖株式會社ノ二會社ヲ除クノ外悉ク臺灣ニ在ルカ故ニ一般會計ノ收入ヲ增加スルコト極メテ少ク主トシテ臺灣總督府特別會計ノ收入問題ニ歸著スヘシ假リニ臺灣特別會計ニ於テ之ヲ實行スルモ製糖業ノ設備ヲ時價ニテ買上クルモノトセハ其ノ金額多額ニ上リ之ニ要スル利子丈ニテモ巨額ニ達シ製造官營益金トシテ殘ス所餘リ多キヲ望ミ得サルヘシ兎ニ角右ハ臺灣ノ問題トシテ研究スヘキモノニシテ本會ニ於ケル調査ノ目的ハ內地ニ於ケル砂糖消費稅ニ代ハルヘキ歲入トシテ專賣ノ可否ヲ研究セムトスルニ在ルヲ以テ本案ニ付テハ深ク研究ヲ爲スノ要ナシト認ム

◇織物消費稅

一 織物消費稅法ハ之ヲ存置スルコト

(理由)織物消費稅ニ付テハ從來之カ廢止ヲ主張スル者アリ其ノ要點ハ(イ)織物消費稅ハ生活ノ必需品タル衣服ニ課稅スルコトトナルカ故ニ不可ナリ(ロ)加フルニ課稅物件ノ種類品質多岐ニ涉ルカ爲其ノ課稅手續繁雜ニシテ當業者ニ苦痛ヲ與ヘ延テ機業ノ發達ヲ阻碍スルノミナラス輸出貿易ヲ妨クルコト大ナルモノアルヲ以テ之ヲ廢止スヘシト云フニ在リ勿論同法施行後數年間ハ種々非難ノ聲モアリシカ施行以來既ニ十數年ヲ經過シ此間徵稅方法ニ關シ幾多ノ改善ヲ加ヘ官民共ニ其ノ手續ニ慣熟スル